
獣医禁書

深口侯人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獣医禁書

【Nコード】

N4060Q

【作者名】

深口侯人

【あらすじ】

大した志も無く獣医師になり、動物病院に勤め始めた男の悲惨な人生の物語。

まえがき

最近、獣医師を主人公にした漫画やドラマなどの影響で獣医師に対する世間の関心が高まってきているように思います。

しかし、どの分野のものでもそうでしょうが、漫画やドラマで紹介されるのは美化された良い面ばかり、登場人物も生き仏のような品行方正の超人ばかりで、実態とは程遠い獣医師の理想像が独り歩きをしているように感じます。

当然、獣医師という職業にも辛く厳しい現実があり、漫画やドラマ内でもちよつとは触れられるのですが、その表現がぬるいことぬるいこと。

『このままでは僕のように虚像に憧れて、実態をよく知りもしないまま獣医師になってしまふ若い犠牲者がたくさん出てしまふ。それはなんとか食い止めねば！！』

そんな想いに駆られた僕は、早速自分の体験談を元にして臨床獣医師の真実と悲劇を描いた物語を書き始めました…。

そう！

本書は！！

浅ましい金儲けを画策して軽佻浮薄な一時の流行を作出するために意図的に不都合な事実を隠蔽しては民衆の関心を引くような英雄を捏造するマスコミと、その思惑に愚鈍に流されるがままの一般大衆、さらに彼らが無思慮かつ無責任に仕立て上げた幻影の理想像に何の疑念も持たずに憧れて生涯の生業としようとする迂闊な愚物たちと、その大量生産された愚昧な犠牲者たちの足元を見ては寄って集って二束三文で扱き使った拳句に用が済んだら容赦なく切り捨てる雇用者たち、そしてそれらすべての関係者の中から問題を解決しようとする人間が一向に現れないという無気力極まりない社会全体に対する警告の書なのです！！！！

「蟹工船」に代表されるような、資本家に搾取される哀れな労働者たちを救済するため、閉ざされた職場に潜む闇を世間に知らしめて問題を提起する告発書の獣医版なのです！！！！

…、嘘です。

ただの憂さ晴らしです。

自分が経験した辛い体験談を愚痴りながら紹介しただけの壮大な落書きです。

暇な人だけ読んでください。

夢の道のり

（子供の頃から夢見ていた「動物のお医者さん」。特に頭が良いわけでもなかった僕にとってはひたすら勉強…ということもなかったが、これまでの人生で多くの時間を勉強に費やしてきた。そして獣医師免許を取り、ついに今日から社会人！！動物を救う仕事ができるんだ！！）

初めて仕事に向かう前の僕は興奮を抑えられなかった。

オーナーとのコミュニケーションは上手く取れるだろうか？

治療は上手にできるだろうか？

良い獣医師になれるだろうか？

これから歩む世界への期待と不安で胸がいっぱいだった。

年甲斐もなく無邪気にはしゃいでいた。

自分の未来は希望に満ち溢れていると思っていた。

でも、それは思いも寄らない過酷な運命の第一歩だった…。

昔から疑問に思っていたことがある。

『人間はそんなに尊いのか？』

僕は別に動物愛護者でも自然崇拝者でもない。

当然、怪しい宗教にも入っていない。

しかし、人間と動物の扱いの違いには昔から違和感を抱いていた。

法律ではペットや家畜は“物”扱い。

動物を殺しても大した罪にはならず、人間の趣味のために不必要に狩られたりもする。

数が多ければ生態系への影響から間引きされるし、人間に危害を加えた動物は人間側に100%の過失があっても処分されたりする。人間に比べて動物たちの命は軽すぎる。

小学生の頃、よく餌をやっていた近所の野良猫が目の前で車にはねられた。

はねた車はスピードも落とさず、何事もなかったかのように走り去っていった。

周囲の人たちも気にも留めずに通り過ぎていった。

はねられた猫はしばらく苦しそうにもがいた後、動かなくなった。

僕は何もできなくて、しばらく立ちすくんでいた。

その猫の命はあまりにもあっけなく終わった…。

人間と同じ扱いをしるゝとまでは言わないが、これはあまりにもひどい扱いではないか？

人間のために働く人はたくさん居るが、動物のために働く人は少ないのではないか？

短絡的思考の少年がそんなことを考え始めたらどうという結論に達するかは容易に想像がつく。

『獣医になって苦しんでいる動物を助けたい！！』

将来なりたい職業が獣医師以外になくなった瞬間だった。

我ながら呆れるばかりの単細胞っぷりだ。

実は、獣医師はどちらかといえば動物を殺す方が得意だ。

獣医師の多くは動物臨床医、公務員、会社員のどれかになって働くが、いずれにしても仕事の基本は動物を経済的に生かすこと。

逆にいえば、利用価値の無い動物を処分する役が回ってくることが多い。

獣医師になったが故に、多くの動物を手につけねばならなくなるとは何と皮肉なことか。

動物の命を救いたければ、獣医師になるよりもむしろ飼育関係の職に就いたり、動物愛護団体にでも入る方が手っ取り早いし、より多くの動物を救える気がするが、決意したのは小学生の時。

深く考えなかったのも仕方ない。

そして、この選択が別の意味でも大きな過ちだったことに気付くのは十数年後になるが、ともかく僕は頭が悪くては獣医になれないと思ひ、勉強にそれなりに精を出すようになった。

高校の三年間、進路相談の紙にはずっと獣医学科を書き続けた。

獣医学科のある大学は、私立も含めて日本全国で十数校と数が少なく、レベルが一番低い大学でも全国偏差値が60近くないと入れない。

現役時代は調子が良くても偏差値55しかなかった僕は模試の結果も当然全てE判定。

合格率20%以下で一縷の望みすらない状態だ。

担任の先生にも「志望校を変えたほうが良い。」と散々言われたが、『昔からの夢だから他の職業は考えられない。』と言って聞く耳を持たなかった。

親にも反対されたが親心を上手く刺激して説得し、卒業後も一年の猶予を貰えることになった。

今から思えば、この人たちがもう少し頑張つて説得してくれていれば、僕の人生はもっとマシだったに違いない！！

……冗談です。悪いのは自分です……。分かってます……。

ともかくそんなわけで、一浪して偏差値を何とか60まで上げ、レベルの一番低い大学を受験。

そして見事に合格することができた。

受験生の成績を見る限り、僕より成績の悪い合格者はほとんど居なかった。

落ちればよかった危ない橋をギリギリで渡りきってしまったのである。

この時点で僕の人生は半分終わったも同然。

もはや後戻りができない状態になってしまった。

大学時代も半年毎に試験があり、その多くは追試になったがいつも

ギリギリで合格し、ストレートで進級できた。

何で追試が多かったのかというと《ギリギリでいつも生きていたいからー!》（…嘘です。勉強してなかっただけです。）

そして病院勤務が始まった時、《リアルを手に入れた》…。

夢は叶った瞬間に現実となるが、実現した夢なんて思っていたような輝きも無ければ素敵なものでもなく、ただただ悪い面ばかりが見えてきてしまう。

夢は夢のまま、手が届きそうで届かないのが一番良い距離感なのだと思いますのもまた先の話。

ともかく、ストレートに進級しても獣医学科は6年制なので、一浪している僕が卒業するのは早くても25歳の時。

高校や大学時代の友達がどんどん就職・結婚していき、話題についていけなくなり、ジワジワと湧いてくる焦燥感と戦いつつ、在学中は将来のためにとバイトやサークルの時間を削って大学付属の動物病院で診療の見学や手伝いをした。

多くのものを犠牲にして臨床街道まっしぐらである。

そして6回生の時、ついに動物病院への就職を決めてしまった。

臨床系研究室の先輩や友人が早くから現実に気づいて公務員や企業に方向転換する中で、自分には臨床しかないと思っていたバカ1号は最後のターニングポイントも華麗にスルーしたのである!!

前フリが長くなったが、こうして卒業し、国家試験にも受かり、数々のターニングポイントで常に最悪の選択をし続けた男の地獄の病院勤務編がいよいよ始まるのである。

第一部・完。

地獄の始まり

——というわけで、早速第二部・地獄の病院勤務編にいきましょうが、最初に断っておく。

『この作品はフィクションであり、ここに登場する人物・病院は実物を参考に作られた架空の存在で、実在のものとは一切関係ありません。』

特に院長。

こいつは僕の実体験・院長を元に、友達の話の中に出てくる院長・先輩・お局看護師のいただけない部分を切り取ってプラスした史上最悪の存在だ。

実体験・院長で十分最悪でしたが、ついでなのでさらに悪くしてみました（笑）。

《最悪の事態は悪化する》、マーフィーの法則でありましたね。

ということで、本書の正しい読み方は「この最悪院長は次にどんな最低アクションをしてくれるんだろう？」と想像して楽しみながら読むこと。

ジャンルはブラックユーモア、いわゆる不謹慎な笑いを楽しむ作品です。

それと、ついでに知られざる動物病院の実態や裏側も紹介しますが、全ての動物病院でここに挙げたような行為が行われているわけではありません。あしからず。

一時期、自殺の一手手前まで追い込まれましたが、笑いにつながれば結果オーライ。

ほろ苦い大人の笑いを楽しんでください。

あと、獣医さんに失望したくないという方はこの先は読まないでね。きっと夢が壊れます。

それでは、「夢が壊れてもいいから現実が知りたい!!」というチヤレンジャーなあなたや「人の不幸は蜜の味。」と言って憚らない正直なあなたは続きをどうぞ。

勤務することになった動物病院は、街中にある自宅併設型の個人病院。

1階が病院、2階が院長の自宅だ。

診察室は2つで動物病院としては普通か少し小さめの規模。

院長、勤務医1名、動物看護師4名で構成される小企業だ。

診察時間は一般的な動物病院と同じで9時―12時と15時―20時で、休診日は木曜日、患畜（病気の動物）は何でも見ることはなっていたが、やはり犬猫が多かった。

大学在学中に1週間ほど見学に通い、診療風景なども見させてもらった。

院長は中年の恰幅の良い温和な感じの人で、従業員たちも仲が良さそうに見えた。

喜んではいけないが、患畜もそれなりに来院するので、良い勉強の場になると思えた。

働く場所はこの病院しかないと思った。

文末は別の意味での過去形です。

理由はすぐに分かります。

臨床獣医の世界では、いずれ開業する予定の地区では修行しない方が良いという暗黙の了解があるらしく、地元を離れて隣県などで研修することが多い。

僕の勤める病院も地元から離れており、見知らぬ土地で独り暮らし

となる。

周りには大学時代の友人も居ないが、最近の通信手段は発達しているので、『距離が離れていても連絡ならいつでも取り合える。』と思っていた。

文末は…以下省略。

ともかく最初に書いた通り、勤務初日の僕の心は躍っていた。
良い職場環境、やりたかった仕事、経済的な親からの自立。
ここまでは順風満帆な人生だ。

この頃は幸せだったなあ…、それに比べて今は…。
幸せって何だっけ？

少なくとも『ポン酢しょう油がある家』ではない。

仕事開始

まず初日。

僕と一緒に看護師も2人入ったみたいだ。

いわゆる同期であり、ライバル的な存在で心強い。

初日は患畜の管理、糞尿の処理、掃除、ゴミ出し、電話番、診療費請求書の書き方、レジの扱い方等々、各種雑用のやり方を叩き込まれた。

獣医師といえど、最初は看護師がやるような雑用をして当たり前だ。他にできる事がないのだから。

獣医師免許を持っていれば法的には診察・治療ができるが、実践でのやり方はまず分からないし、各病院によってもやり方が違ってくるので診療は後回し。

まずは誰でもできる雑用からだ。

頭も体もメモ帳もフル稼働して、あっという間に一日が終わった。ものすごく疲れたが、働いているという実感が湧いてきて何となく嬉しくなった。

家に帰ったらすぐ布団に入り、翌朝までぐっすりだ。

2日目以降も雑用三昧。

初日に教わったことをしつかり復習しつつ、院長や先輩の診療をチラチラ見ながら診療の勉強もする。

なかには、診察時間終了間際に駆け込みで重症患畜が来る日もあった。

当然、診察時間が終わったからといって「はい、サヨナラ。」というわけにもいかず、検査や治療のため残業。

通常業務の範囲内とみなされて残業代は貰えないらしいのが痛い、苦しんでいる患畜を一刻も早く治すために奮闘する。

さらには手術も、昼の休診時間はもちろん、夜の診察終了後にする

こともよくあり、家に帰るころには日付が変わっていたりするのでかなりしんどい。

といっても、僕は手伝いや片付けなどの簡単な作業と見学がメインなのでまだマシだが…。

また、この頃から、院長が従業員を怒鳴っているのがよく目に付くようになる。

何といっても回数が多い。

最低でも1日1回は怒鳴っている。

新人で、まだ色々と慣れない僕や同期の看護師たちは特に怒鳴られる回数が多かった。

そう…、院長は本性の片鱗を早くも見せ始めていたのである。

しかし、僕はこの時点ではまだ『やっぱり人の上に立つ者として、時には厳しい面も見せなければいけないみたいだ。』と好意的解釈をしていたのだ。

そんな間拔けな自分に今さらながらに腹が立つ。

そして初めての休日である休診日がやってくる。

週休2日と聞いていたのだが、研修中の身で、しかも病院が忙しい時期（4～6月の動物病院は狂犬病の予防接種やフィリアという心臓の寄生虫の予防開始で忙しくなる）ということで、「しばらくは週休1日にする。」と言われていたため、1日しか休めない。

この時点で初めて『あれっ？労働条件無視？この院長、信用できるのか？』とちよつと不安になったが、『確かに新人で普段あまり役に立ってないし、勉強中の身だからな。』と無理矢理納得する。

ちなみに他の従業員は、休診日の他に各人日替わりで休みが1日ずつ貰えるシフトとなっているので、合計で週休2日となる。

ただし、休診日は誰か1人が病院に来て、急患用の電話番号プラス院内の掃除や整理整頓、その他の雑用をしなければならないのだ。

この当番は院長を除く全従業員に回ってくる。

1日バッチリ働くことになるが、診療や手術も無くて普段よりも仕

事の質が軽いらしいので休日手当では貰えないそうだ。

しかも、振替休日も無いし、契約時にもそんな話は聞いていない。

「そんなの会社が苦しい時には当たり前じゃん。」と思った方は要注意。

あなたはすでに、資本家による洗脳を受けて都合の良い労働者になっています。

労働の対価が貰えないような状況ははつきり言って異常です。

何よりも、この病院の経営は全然苦しくないのです。

それはともかく、動物病院も民間の小企業なので労働条件は法令遵守されていない所が多く、この病院も例に洩れないようだ。

この頃から段々と夢が煌めきを失っていく感覚にとらわれるが、『まだ獣医師の仕事とは関係無いところだから。』と思い、持ちこたえる。

もつとも、まだ入ったばかりの新人には、休診日といえど病院は任せられないそうで、1日ゆつくり休みを貰った。

というか、起きたらすでに日が暮れていた。

少しずつ慣れてきたとはいえ、さすがに疲労がたまっていたようだ。

初めての診察

そして休日明け、院長が突然言う。

院長「そろそろ新人先生にも診察してもらおうかな。」

病院によって異なるが、新人はしばらくの間は診療をさせてもらえないことが多い。

下手すれば一年経っても診療させてもらえない病院もあるらしく、1週間程度ではまだ診療は任されないだろうと思っていたので、あまりの早さにちよつとビックリした。

（え？いきなり？大学の時、先生方の診療を見てたからできないこともないけど…、ホントにいいのか？）

少し戸惑ったが、経験を積むチャンスだし、せっかくやらせてくれると言われたのでやってみることにした。

院長「先生は確か、動物病院の実習も行ってたんだよね？じゃあれ、任せたよ。」

そう言われて真つ白なカルテを手渡された。

初診の患畜だ。

そして、独りで診察室に入れられる。

研修も付き添いもなく、いきなり独りでの診療が開始する。

ちよつと心細かったが、大学病院で診療の手伝いをしていた甲斐もあってそこそ順調に進む。

症状を聞いて、普段の飼育環境を聞いて、軽く身体チェックをして、必要な検査を考えて、飼い主さんに説明して…。

『じゃあ具合が悪いみたいなんで、血液検査とレントゲン検査をさせてくださいね。待合室でお待ちください。』

そう言つて患者を預かり、検査を始めようとすると…。

院長「おい、おっさん…。ちょっとこっち来いや…。」

院長が険しい顔をしながら奥の部屋で僕を呼んでいる。

（えっ？おっさん呼ばわり？なんかまずいことしたか？てゆうか、人格変わってない？）

戸惑いつつも部屋に入るといきなり院長が怒鳴り始める。

院長「お前、なに勝手に検査始めようとしてんだ！？ボケ！！オレは何も聞いてねえぞ！！ここはオレの病院なんだから、ちゃんとオレに説明して許可を取れよ！バカが！！」

（えゝ！？診療任せるって言わなかった？）

確かに言っていることは正しい。

初めてのことだし、責任者への確認は必要だっただろう。

しかし、カルテを渡すだけで後は放置しておいてそれは無いのではないか？

「事前に確認しろよ。」と一言言ってくれても良かったのではないか？

いきなり一方的に怒鳴られるほどの過失だっただろうか？

ちよつとムカツときたのを抑えつつ、病状を説明し、検査予定の項目を伝えると…。

院長「そんな検査で何が分かるってんだ！？バカが！！危うくオーナーに無駄金使わせるところだったわ！！やっぱお前に診察はまだ早いな…、雑用でもしながらオレがやるのをよく見とけ！！」

(…ウザッ！！)

軽く殺意が湧いてくる。

目尻や唇が怒りで震えていたかもしれない。

こんな気持ちは初めてだ。

診察終了後、院長が語り始める。

院長「ホント、診察って見るよりも難しいんですよ。民間の病院では、大学病院みたいに何でも検査させてもらえないから検査項目を絞るしかないですね。だから最初は自分なりに必要な検査を考えながら、実際の僕の診察と比べて答え合わせをして練習してみてくださいね。」

人格が外向け用に戻っている。

これはこの病院流の洗礼らしく、「診療は見ているよりずっと難しいから、自分がやっているつもりになって院長や先輩のやり方をよく見て練習しましょう」という事なのだそうだ。

いきなり理不尽に怒鳴られて『なるほど、僕を立派に育ててくれるためだったのか。』などと素直に納得できるわけも無いが、確かに今まではどこか他人事のように診療を見ていた感もあり、至らない部分があった点は反省する。

それにしても悪意を感じるやり方だ。

果たして怒鳴る必要があったのか？

院長の日頃の憂さ晴らしも兼ねているのではないか？

てゆーか、絶対兼ねてる！！

ちなみに先輩獣医師の時は、検査項目は院長の考えと合っていたらしく、その先の診断や治療のことまで聞かれてダメ出しをされ、同

じ流れになったそうだ。

その時、先輩も殺意を抱いたという話を聞いてちょっと親近感が芽生えたが、そんなものはすぐに無くなることになる。

病院の実態

そんなわけで最初の1か月間は雑用メイン。

狂犬病ワクチンやそれとは別の伝染病の予防ワクチン、心臓寄生虫予防などの簡単な診療を任せられつつ、通常の診療も院長や先輩のやり方を見て勉強する。

時折、院長に聞かれて答え合わせをするが相変わらずダメ出しを喰らい、「バカが!!」とか「アホが!!」とか「グズが!!」とか「マヌケが!!」とか「役立たずが!!」とか「給料泥棒が!!」とか「使えん奴だな!!」とか言いたい放題言われる。

僕たちが入社して2週間も経った頃からは、院長はもはや本性を隠す気は全く無いらしく、自由気ままに怒鳴り続けている。

どう考えても憂さ晴らしで怒鳴っていて、僕以外の従業員も含めて最低で1日1人、機嫌が悪い時には従業員全員が毎日犠牲になることもある。

しかも、特に標的になるのはやはり、仕事がおぼつかず、権力も弱く、世渡りも未熟な僕と新人看護師たちの院内最下級格の3人組だ。怒鳴られ続けるというのは非常にストレスとなるようで、他の2人の目が日に日に濁っていく様子がよく見て取れたが、その目に映る僕の目も濁っていつているように見えたのは果たして気のせいだろうか？

ちなみに、反射的に怒鳴る時は別として、じっくり怒鳴ろうとしている時は怒鳴り声がなるべくオーナーに聞こえないようにと奥の部屋に呼ばれるため、次第に院長が居なくてもその部屋に入るのは恐怖を感じるようになる。

わざわざ奥の部屋に呼ぶのもオーナーに短気でよく怒鳴る院長だと思われたくないとか、近所の人も来ているから世間体を大事にしたとか小っちゃい事を気にしているのだろうが、それならそもそもすぐ怒鳴る性格を何とかしようとは思わないのだろうか？

また、この院長は特にお金が好きみたいで、新人看護師がお釣りを間違えて多めに渡してしまった時は診察終了後に30分近く怒鳴り続けていた。

当然、看護師は最初の10分くらいで泣いていたが、その後も「仕事舐めてんのか!？」とか「泣いて済まされる問題じゃねえ!」とか散々喚き散らした後に損害分をしっかりと給料から引くと言っていた。(もちろん、後日、本当に引かれていたらしい。)

もはや院長としてどころか、人として関わり合いになりたくない部類の人間だと確信した瞬間だった。

この頃から僕は院長との接触をできるだけ避けるようにし始めた。とはいっても、狭い病院内で毎日顔を合わすのでほとんど効果はなかったが…。

ところで、この病院の問題児は院長だけではない。

先輩獣医師も院長ほどではないがウザいのだ。

「院長の機嫌を保って怒鳴らないようにする」という名目があるとはいえ、院長にひたすらゴマをすり、他の従業員を小バカにしたネタで院長の機嫌を取る。

また、他の従業員に責任転嫁して自分が怒鳴られるのを回避しようとする事もしばしばある。

そして、本人の居ない所では院長や従業員の陰口を叩き、鬱憤を晴らすのだ。

まさに、世渡り上手の手本のような人物なのである。

さらに、院長不在時には院長と同じような高圧的な態度で看護師に接する。

院長がジャイアンなら、先輩はスネ夫。

「美味しんぼ」で言えば富井副部長を彷彿とさせる人物だ。

当然看護師たちには嫌われており、僕もあまり好きではなかったが、僕に対しては同じ獣医師として親近感を抱いていたらしく、診療の相談には素直に応じてくれたので殺意が湧くほど憎い人ではなかつ

た。

責任転嫁されたり小バカにされたりが無ければ良い人という印象を持っていたかもしれない。

もつとも、“最低の人物”が近くに居るせいで良く見えていただけかもしれないが…。

さらにダークホースの問題児として、見学の時に仲の良さそうに見えた2年目以上の看護師たちが挙げられる。

看護師連中は何がウザいかというと、院長の前ではせかせか働くが、居なくなつた途端に仕事をしなくなる。

やるべき仕事をやっていなければ当然院長に怒鳴られるのだが、その確率が一番高いのは新人たちなので、彼女たちは安心して休めるというわけだ。

したがって、その分の雑用はもちろん、僕を含めた新人3人がやらなければならぬ。

まあ、新人なら雑用するのは当然だと思うし、今の段階では大した害とも思えなかったから構わないが、院長の前ではやる気を見せるところが何ともいやらしい。

それと、この病院では当たり前前の事のようにだが、この看護師たちももちろん本人の居ない所でお互いの悪口を言い合う。

さつきまで楽しそうに話していたと思ったら、本人が席をはずした瞬間に「で、あいつってさあ…。」

そう、この病院の従業員は、仲が良さそうなのは表面上だけで心の中ではお互いが罵り合っている状態なのだ。

戦国時代か、ここは。

要はこの病院、新人以外がみんなウザい。

その諸悪の根源は、短気で、器が小さくて、ケチで、神経質な院長で、皆そのストレスから回避するためにこんな風になってしまった被害者なのだろう。

1年後には僕もこうなってしまうのかと思うと気持ちが悪くなって

くる。

変わらずにいられると良いのだが、そんな自信は微塵も湧いてこない。

勤務1か月目にして早くも病院の裏事情が見え、自分の人を見る目の無さを痛感し、全てを投げ出して二ートにでもなりたい気分だった。

しかし、『自分で選んで就職した以上、すぐに辞めるのはみつともないし、最初は誰でもこんなもので、次第に慣れるだろう。』と、思っ

って踏みとどまった。

友達にも相談しようかと思っただが、臨床系の友達はブログやホームページを見る限りでは忙しいながらも充実した毎日を送っているようで、とてもそんな相談に乗っている余裕はなさそうだった。

臨床以外の仕事を選んだ友達からは「まだ始まったばかりだし、もう少し頑張ってみたら？」という声が多かった。

『他人事だから適当に言ってるんじゃないか？』などと疑心暗鬼になったりもしたが、食い下がったところで余計な心配をさせるだけだ。

しょうがないから憂さ晴らしにネットの掲示板に病院の愚痴を書き込む。

見ている人が少ないようで反応も薄かったが、臨床獣医の愚痴専用掲示板みたいなものもあり、全国に同じような境遇の人が居ることも分かって少し気が和らいだ。

初めての給料日

かくして怒涛の1か月が終わり、ついに待ちに待った給料日。

バイトでの給料は何回も受け取ったことがあるが、20万近くの額になる給料を受け取るのは初めてで、自立しているという実感が湧いてくる。

最近沈みがちだった気分も自然と軽やかになる。

我が病院での給料の受け渡しは、振込みなんていう手数料のかかる手段が取られるはずもなく、現金を手渡しで渡される。

1人ずつ部屋に呼ばれ、院長からのありがたい(?) お言葉を頂戴しながら受け取るらしい。

僕の番になって部屋に入ると、院長が給料袋を渡しながら言う。

院長「とりあえず、1か月ご苦労様でした。はつきり言つてこの額は、君よりも遥かに仕事ができる先輩看護婦さんたちよりも多いので、病院としてはかなりの痛手です。まあ、今はまだ全然使い物にならないけど、これはこれから頑張ってもらうための投資だと思つて渡すわけだから一生懸命勉強するように。」

世の中には一言も二言も多い人間がいるが、この院長は最初の一言以外が全て“多い”部分だ。

もつとオブラートに包んだ言い方はできないものなのか？

精一杯優しく言つてこれなのか？

それとも、これもこの病院流の洗礼なのか？

浮かれ気分は見事に打ち砕かれたが、ともかく初給料ゲットだ。

明細を見ると、基本給は20万ぐらい。

研修獣医の平均的な初任給の額だ。

昔は開業前の修行という意味合いが大きかったらしく、月給10万前後の病院が多かったらしいが、最近では一応、労働者とみなされ

て20万前後出すところが増えてきたようだ。

ただし、それでも、サービス残業の時間が毎日半端ないので、時給に換算すると…、泣きそうになるのでやめておこう。

また、未だに15万程度の病院もたまに見かけるが、その病院に勤めようと思う獣医師はどれぐらい居るのだろうか？

ちなみに、動物看護師は平均初任給が15万前後。

皆さんが想像していたよりもずっと安かったのではないだろうか？

動物病院で儲かっているのは大抵、院長だけなのだ。

給料袋の中には、基本給から雇用保険と所得税が引かれた19万ちょつとが入っていた。

働いている方は「あれ？」と思つた事だろう。

病院…というか、会社で給料から天引きされるのはそれだけではないはずである。

ある程度大きい会社なら厚生年金やら健康保険やらに加入しており、会社側の負担を除いた従業員負担分も天引きされるはずだ。

しかし、動物病院は個人経営の小企業。

そのような、従業員のために病院の利益を削る真似はしないところもある。

我らがドケチ院長も、当然の如くそんな負担はするはずもなく、法的に必須なもの以外は各人自己負担で頑張れというスタイルだ。

したがって、国民健康保険や国民年金の分もそこから払わなくてはならないのだ。

さらに、家賃や車のローン、生活費などの毎月の必要経費を除くと、もう数万円しか残らない。

『おお…、結構減るなあ。』と思つたが、これはまだ序の口。

この後、月給はさらに減少していくことになる。

ともかく、思っていたよりも額は減つたが、『まあ、初任給なんてこんなもんだろう。これで両親にプレゼントでも買って喜ばせよう。』

と気持ちを切り替え、その日は病院を後にした。

祝日？何それ？

そしてゴールデンウィーク。

僕の勤務する動物病院は、たとえ祝日であろうと週1日の休診日以外ならば休診にはならない。

それはゴールデンウィークやお盆、正月も例外ではない。

その理由は院長曰く「病気は平日休日関係なくやってくるからだそうだが、それなら何故この病院に休診日が存在するのか？謎である。」

もはや院長が敵にしか見えなくなっていた僕にとっては、儲けを少しでも多くするための詭弁にしか思えなかった。

ただし、オーナーも旅行に出かける人が多いようで、病院に連れてこられる患畜の数もさすがに減るため、いつものような人数は要らない。

というわけで、病院は従業員たちに任せて、院長は一家で海外旅行へ。

…死ねばいいのに！！

いや、死ななくてもいいから病院を続けられないほどの重症を負ってくればいいのに！！

そして、残された従業員は年3日しかない有給休暇を各人1日ずつ、交代で無理矢理使われる。

今、さらっと「有給休暇は年3日」と書いたが、気付いた方はおられるだろうか？

「少ない！！」という点はこの場合、問題ではない。

下手すれば有休など無い動物病院もあるのだから。

問題はゴールデンウィーク、お盆、正月の年3回の世間的な長期休暇に対して有給休暇の日数も年3日、しかもそれは本人の意思とは無関係に取らされるということだ。

つまり盆と正月にも同じ現象が起こり、自分の取りたい時には有休は取らせてもらえないのだ。

そう、求人広告の見栄えを良くするためのお飾りの“有休”である。果たして、こんなものを「有休」と言って良いのだろうか？

ちなみに「病気などで休む場合は？」との疑問をお持ちのあなた。ご安心を。

その時は日割りで給料が引かれるだけである。

「週休2日」は嘘っぱち、「有休年3日」は形式的、言及の無かった祝日については当然の如く通常勤務…。

いったい我が病院の休日数はどうなってしまうているのか？

大手企業などの休日数は年120日前後で、土・日・祝日と夏季・冬期休暇を合わせるとだいたいこんなもんだ。

さらに有休が年20日ほど貰えるらしい。

中堅企業や大きい動物病院はちよつと減って年110日ほど。

祝日が休みではなかったり、夏季・冬期休暇が短かったりするのだから。

有休も5〜10日とちよつと少なめで設定されているみたいだ。

そしていよいよ真打ち登場。

“オーナーに優しい” 我らが動物病院の年間休日数は…、年100日ほど！！

祝日が休みではなく、夏季休暇も冬期休暇も無く、有休も年3日。しかも、休診日当番があつたりするので数字上の休日数ほどは休めていない。

さらに、日々の業務は大抵12時間以上の労働を強いられるのだ。もちろん、休憩時間は含まないで12時間以上だ。

はつきり言って給料の額に見合っていないと思う。

患者とオーナーには優しいかもしれないが、従業員にとっては厳しい病院である。

そもそもオーナーに優しくするなら、もっと従業員を増やしてロー

テーションを組み、休診日をなくしたり、夜間診療をすれば良いはずだが、「管理が面倒」とか「採算が取れなくて利益が減る」とか思っているのか、そんな話は一切出てこない。

まあ、病院によっては週休1日だったり、有休すらないところもあるらしいから我が病院はまだマシらしい。

ちなみに、「我が病院」などと書くと、プライドの高い院長には「お前の病院じゃねえよ！オレの病院だろ！！」とつつこまれるだろうが、「院長の病院」とか「僕が勤める病院」とか書くのは面倒なのでこの先も「我が病院」でいく。

まあ、そんなこんなで色々と問題になりそうな労働条件だが、労働基準法の適用については前に紹介したとおりだ。

確かに、下を見ればもつと酷い職場はあると思う。

しかし、「だからお前も我慢しろ。」とか「もつと悲惨な人が居るのに愚痴をこぼして情けない。」とか言われる筋合いは無い。

何故、わざわざもつとひどい労働条件の職場と比較して自分はまだ恵まれていると思わなければならないのか？

快適に働きたいと思うことは賢い考えで忌むべき事なのか？

より頑張っている人が居るなら、自分もそれに合わせて頑張らなければいけないのか？

ましてや、僕は国家資格の中でも取得難易度が高いと言われている獣医師免許を持っているのに、もうちょっと待遇が良くてもいいのではないか？

そんな想いが頭の中を駆け巡る。

「若造のくせに生意気を言うな。」とお叱りの言葉があるかもしれないが、特に最近の若い獣医師は少なからずこういう思いを持っているだろう。

ただでさえ人材不足なのに、いつまでもぞんざいな扱いを続けている病院の院長は気を付けるがいい。

そのうちに若手が入ってこなくなり、病院が潰れてしまう危機に瀕

するだろう。

待遇の改善が無理なら、せめて従業員に慕われる優しい院長であれ
！！

…話が横道に逸れて色々と思痴ってしまったが、とにかく、小さい動物病院はなかなかシビアな勤務時間の所が多いのだ。

元気になった動物とオーナーの笑顔だけが心の支えとなる職場である。

そして、『週休1日で有休も無しだと年の休日数が50日かあ…、そんな病院でも頑張れるほどやる気がある人はすごいね。僕は到底そこまで頑張れないなあ。』と他人事のように哀れんでいた状況をこの後、実体験する事になるのもまた先のお話だ。

脱落者

ということ、有休を無理矢理使われ、休みが分断されている上に帰省ラッシュが起こっているために帰郷もできず、あつという間に過ぎ去って全然“黄金”という感じのしないゴールデンウィークが終わった。

院長に怒鳴られないのはありがたかったのだが、多くの人がのんびり休んでいる時に普通に働くのはなかなか精神的にくるものがある。「ウィーク」はこの病院の従業員にとって、「週」ではなくて「弱る」という意味の方がより相応しい。

しかし、そんなことは気にならなくなるような事件がゴールデンウィーク明けに発生。

新人看護師のうちの1人が来なくなったのだ。

電話で辞めると言ってきたらしい。

理由は「もう限界」だそう。

そりゃそうだ、僕も辞めたい。

院長は「最近の若い奴は根性が無い!!」とか「誰かいじめたんじやねえだろうなあ!」とか言って従業員に当たり散らしていたが、その場の誰もが「お前のせいだよ!!」と心の中でつつこんだに違いない。

さらに、先輩獣医師が相槌を打ちながら辞めた看護師の悪口を言つて院長を一段とヒートアップさせるので、先輩以外の従業員への被害がどんどん拡大する。

ホントにウザいコンビなので、『事故とかで早く死んでくれないかなあ。』と心から願う。

興奮した院長は「お前らは辞めるとか言わんだろうな?」みたいな内容の事を脅迫めいた言い方で言ってくる。

とてもそんな事を言える空気ではないし、病院内は治外法権なので領主である院長に何かされても文句は言えないため、とりあえず調

子を合わせて難を逃れる。

もっとも、八つ当たりを受けている時点ですでに災難に遭っているわけだが…。

怒鳴られる

さらにこの頃から、初診患畜を中心に本当に診療を担当させられる事になった。

この1か月間、院長や先輩の診療をこっそりと見学しつつ勉強はしていたが、そんなに成長はしていない。

答え合わせでも相変わらず散々な言われようだったのに、何故いきなりの実戦投入なのかが分からない。

そんなこっちの事情はお構いなしにカルテを渡されるのだが、前回の事はトラウマになっており、もはや診療してみろと言われても怒鳴られる恐怖と失敗する不安の感情しか湧いてこず、ビクビクしながら診療を進める。

オーナーの話や身体検査から推察すると、よくある軽い体調不良のようだ。

院長や先輩がやっているのを見ていた限りでは、こういう時はいきなりあれこれ検査をするのではなく、作用の軽い薬で様子を見るのがこの病院らしい。

（今回はほとんど言いがかりみたいなもんだったが、勝手に進めようとして酷い目にあつた。今回はちゃんと事前に確認を取っておこう。）

院長や先輩が出していた薬を同じように処方することにし、院長に確認を取りに行く。

『院長、この患畜なんですけど…』

院長「おい！！見て分らんか！？オレはオレの患者を診察中なんだ！！お前の診察の面倒まで見れるかよ！！バカが！！自分が診始めた患者なら自分で責任持てよ！！」

(…意味が分からない。前回、確認しろって言ったのは誰だよ!!)

仕方がないのでそのままカルテを完成させ、薬の調剤や会計は看護師に頼んで次の診療に入る。

次はワクチン接種の診療だったので、ほっとして身体検査やワクチンの説明をしている中、突然、院長に奥の“拷問部屋”へ呼ばれる。元から歪んでいた顔をさらに歪ませているので、怒っているのがよく分かる。

さっきの患畜のカルテを持っている。

院長「おい、何だこのカルテ？この薬の量で、何でこんな安い値段になるんだ？」

「あ…、院長のカルテを参考にしたんですが…。」

院長「アホが!!そりやよく来る患者だから割安にしてんだろぅが!!カルテの分厚さで気付けよ!!グズ!!だいたい、先輩には確認取らなかったんか!？」

「……取ってないです。」

院長「ほう?なら、お前の勝手な判断で初診患者にこんなサービスしたんだな!?じゃあ病院の受けた損害分はお前に払ってもらうかな!!全く手間ばつかかけさせやがって!!」

(…。)

もう、《思考回路はショート寸前》。

余計な事を考えると精神崩壊しそうだったので、この件に関してはもう考えるのをやめた。

ちなみに後日談だが、本当に給料から天引きされた事は書くまでもないだろう。

しかも原価換算ではなく、オーナー用価格で…。

ワクチン説明の途中だったので診察室に戻る。

オーナーが不安そうな顔をしているので、『この診察とは関係のない話だったので安心してください。』と声をかけて説明を続ける。できるだけ笑顔を作ったつもりだが、オーナーに笑顔に見えたかどうかは自信が無いが、もう考えない。

そもそも診療を中断させてまで言うような緊急の要件ではない気がするが、もう考えない。

この日は幸い平日で患者数も少なく、その後は特に問題も無く診療が終わったが、もう考えない。

翌朝、最悪の寝覚め。

夢の中でまで院長に怒鳴られて目が覚める。

職場に猛烈に行きたくない気分なのだが、これはいわゆる五月病だろうか？

ともかく昨日みたいな事が起こらないように祈りながら病院に向かう。

しかし、我が暗黒の運命はそんな安息の日々など与えてはくれない。今日も初診で軽い体調不良の患者がやって来る。

さすがはよくある症状なだけある。

もうこの件で怒鳴られたくないのでカルテの確認をちゃんと取りたいが、院長も先輩も手が空いていない。

仕方がないので他の雑用をやりつつ様子を窺っていると、院長の診察が一段落つきそうな気配。

すかさず確認を取りに行く。

『院長、この患者なんですが…』

院長「おい！！このボケエ！！こりゃ、ずいぶん前に来た患者だろうが！！どれだけ待たせるつもりなんだ！！こんなももう独りで判断できるだろが！！いつまで経っても役に立たん奴だな！！」

(……。もうやだ……。こんなのやだよ……。)

突然だが、「マジシャンズセレクト」という技術をご存知だろうか？
最初はほとんど説明せず、まず相手に何かを選択をさせて、相手が
選んだ後から都合の良い説明を付け加えて自分の思い通りの展開に
持っていく技術だ。

院長はこの技術を持っているらしい。

マジシャンは人を楽しませるためにこれを使うが、院長は怒鳴って
ストレス発散するためにこれを使う。

恐らく今回のことも、確認を取らなかったら取らなかったで、「昨
日言ったばかりなのになんで確認しないんだ。」と怒鳴られていた
だろう。

院長の機嫌が悪ければ、何をどうしようと怒鳴られることは回避で
きないのだ。

やっと気付いた。

確認したら怒鳴られる。

確認しなくても怒鳴られる。

勝手にやったら怒鳴られる。

でも言うことを聞いても怒鳴られる。

怠けていたら怒鳴られる。

でも頑張っても怒鳴られる。

何をやっても怒鳴られる。

生きてる限り怒鳴られる。

多分死んでも怒鳴られる。

何をやっても結果は同じなら、行動するだけエネルギーの無駄だ。

怒鳴られないように努力するのも技術の研鑽とかに励むのももう止
めよう。

そんなことをしてもどうせ怒鳴られるんだし、無駄に疲れるだけで
虚無感がじわじわ湧いてくる。
体がだんだん重くなる。

心がどんどん沈んでく。

僕はどっちかというと明るい方の人間だったが、この頃からあまり笑わなくなった。

問題の解決は新たな問題を生む

そんなこんなで最初は軽く鬱になりかけたが、しばらくして少し持ち直した。

診療をやるようになってから院長に怒鳴られる機会が増えたが、慣れてくれば多少はマシになる。

先輩は多少忙しくてもカルテの確認をしてくれるし、威張る事はあっても怒鳴る事は滅多にないのでどんどんチェックしてもらった。

院長のキレやすいポイントも分かってきたし、診療にも慣れてきたのでスムーズに事を進められるようになってきた。

だからといって病院勤務が楽になるかといえばそうでもない。

慣れたといっても怒鳴られるのはストレスになるし、問題が後から後から次々発生してくるからだ。

「マーフイーの法則 : 問題の解決は新たな問題を生む」である。しかも、我が病院では1つ解決することに2、3個増えるので厄介だ。

動物看護師は診療の手助けをしてくれる、獣医療にはなくてはならない存在だ。

カルテの整理、問診、患畜の保持、怪我の消毒、爪切り・耳掃除などの簡易処置、手術の助手や薬の調合など携わる仕事は枚挙に暇がない。

当然、新人看護師よりも先輩看護師の方が仕事も速いし処置も上手い。

治療についての知識も新人獣医の僕より持っている事も多く、非常に頼りになる存在だ。

陰で散々悪口を言われているらしいが、そんなことは気にせずに手伝いを頼んでいると、なんだか周囲の空気が澁んでいくような気配を感じた。

もしかやと思つたらやつぱり院長登場。
もちろん、キレている。

院長「おい！！お前、誰に手伝いさせてんだ！？お前がベテランさんを使うなんて10年早ええ！！オレが診察できねえだろうが！！新人は新人を使えよ！！」

『あ…、すいません。』

（あゝ、はいはい。すみませんでしたと。ベテラン看護師の補助じゃないと診察できないって、あんたの腕が悪いつて事ですか？そもそもこんな所に10年も居ねーよ。）

表面上は申し訳なさそうに謝るが心の中では軽く流す。

真正面から受け止めてはいけない。

内容を深く聞いてはいけない。

どうせ気分で怒鳴っているだけなのだから。

ということ、僕が手伝いを頼めるのは新人看護師のみにってしまつた。

しかし、この件はこれで決着ではない。

処置に慣れない新人看護師と診療に慣れない新人獣医師。

仕事の進みは当然遅いが、それを見逃してくれる院長ではない。

院長「しかし、診察が遅いね、君は。僕なんか君が1件診る間に2、3件診てますよ。高い給料払ってるんだから、ちゃんと給料に見合つた仕事をしてくれないと困るんだけどねえ？」

『あ…、はい…。頑張ります…。』

（……ハハハ。そうですね。ベテランコンビと新人コンビを比べたら、そりゃスピードに差が出ますよね？当たり前じゃん！！バカか！？）

怒鳴らない時は怒鳴らない時で嫌味たっぷりのネチっこい言い方し

かできない院長。

正直、イラっとくるが何とか受け流す。

それにしても、本当に人をイラつかせるのが上手い院長だ。

ナメック星でのフリーザ様もこんな気持ちだったに違いない。

だが、これでもまだ終わりではない。

診療が少し混んできて、看護師たちもみんな他の事で手が離せない状態の時の事。

僕は怪我で来院した患畜の診療をしていた。

見たところ、簡単な処置が必要だけど1人ではできそうにないその時、ちょうどベテラン看護師の手が空いたみたいなのだが、どうせすぐ院長が補助を頼むに決まっているので声はかけられない。

仕方がないので新人の手が空くまで1人で何とかやろうとして手間取っているところに院長登場。

もちろん、キレている。

院長「そんな処置1人でできるわけないだろ！！バカが！！ベテランさんが空いてるんだからベテランさんに手伝ってもらえよ！！このグズ！！」

（出た！！必殺「マジシャンズセレクト」！！ えっと…、確か前にベテランさん使ってたって言ってましたよね？矛盾してますよね？もうボケたんですか！？忙しいからって他人に当たるなよ！！）

簡単な処置ですぐに終わりそうだし、僕もできればベテラン看護師に頼みたかった。

しかし、手伝ってもらっていたら手伝ってもらっていたで「前に使ってたって言っただろ！！」と怒鳴られていただろう。

事実、この後似たような状況でベテラン看護師に補助を頼んでいたら当然の如く怒鳴られた。

さすがは「マジシャンズセレクト」、常に相手にハズレくじを引かせる事ができる。

そういえば書き忘れていたが、怒鳴られている内容の幾つかは1回や2回の出来事では済んでいない。

ただでさえ権力があって意見されにくい院長が、怒鳴る理由をいくらでも作り出せるマジシャンズセレクトの技術を身につけているので、同じ事柄でも何度も何度も繰り返し怒鳴れるのだ

怒鳴られるのは最初の一回だけで、次からは改善すれば良いという話ではないところがまた救いが無くて泣けてくる。

もはや僕にできる事といったら、どっちの選択肢が「怒鳴られる程度が軽く済むか」を見極めて選ぶ事だけなのだ。

結局は怒鳴られるところが非常にストレスの溜まるポイントである。

まあ、そんな感じで、解決しても解決しても新たな問題が発生してくる毎日にイライラが募っていたある日、新人看護師がオーナーから質問を受けたのだが答えが分からなかったそれで、僕に助けを求めてきた。

基本的な内容で、獣医ならもちろんベテラン看護師でも知っているような内容だ。

答えとオーナーにも分かりやすい説明の仕方を教えていたところに

院長登場。

もちろん、キレている。

院長「おい、嬢ちゃん！！誰に相談してんだ！？こいつは獣医師免許取ったばかりで何の経験も無い獣医でも何でもねえただのおっさんだろが！！そういう相談はオレにしるよ！！」

（。すぞー！！コラア！！おっさんはお前だろ！？いい年こいて、言っただけの事と悪い事も分かんねえのか！？このクソジジイ！！獣医じゃないと思っただけなら診療させんな！！）

ついに受け流し作戦失敗。

おっさんにおっさんと言われるのもムカつくが、何よりも獣医師免

許を頑張つて取った事も、これまでの努力も、全て否定されたような気がして我慢しきれなかった。

病院内で一番偉い自分が頼られなかったという事が逆鱗に触れたらしいが、あまりの言い草にこちらも怒り心頭。

顔はしかめっ面になっていたに違いないが、声に出さなかったただけでも褒めてほしい。

そもそも、院長に聞いたたら怒鳴られる可能性が高いので、一番怒りそうにない僕に聞くといい新人看護師の行動は当然の選択だろう。

彼女も院長に聞いたら聞いたで「今、忙しいんだ！」とか言われて怒鳴られたことだろうが、そうしなくてもやっぱり怒鳴られるところが可哀想でしょうがない。

ちなみに、。の中の言葉は獣医師として不適切だったので伏せ字にしました。

各人で想像してお楽しみください。

ぎゅうぎゅうの口の感の狂った短気のデブ

ここまでで分かるとおり、「短気で」「ケチで」「嫌味で」「器が小さく」「わがままで」「神経質で」「金に汚く」「精神が未熟で」「すぐに怒り」「自己中心的で」「細かい事をやたらと気にして」「自己顕示欲が強く」「気が短く」「他人に厳しいくせに自分に甘く」「虚栄心の塊で」「カツとなりやすく」「子供っぽく」「器が小さい」という人間失格な性格のくせに外面は良く、自分は人格者で皆に慕われる良い院長だと勘違いしているこの《ぎゅうぎゅうの口の感の狂った短気のデブ》はこの後、さらなる小物っぷりを披露してくれる。

獣医療の世界では、従事者が患畜に咬まれたりひつかかれたりという事故が多発する。

こちらは治療しているつもりだが、動物にとっては自分が弱っている時に見知らぬ奴が近づいたり、痛い事をしたりしてくるので、威嚇したり反撃したりするのは当たり前だ。

したがって、診療に臨む際は攻撃を食らったりしないように十分注意するが、どうしても不意の一撃を食らう事があるのだ。

大抵は唸ったり牙をむいたり予備動作があるのだが、たまに何の前触れもなく攻撃してくる奴がいるのが厄介だ。

僕もそれで手を咬まれて出血した事があるが、その時、院長は笑いながら「トロいやっちゃのー（笑）。早よ消毒して診察に戻りーな（笑）。」と言って、病院の消毒薬と絆創膏を無料で振舞ってくれた。

さらに、抗生剤までタダでくれるというのだ。

しかも人用の抗生剤を。（獣医療では人用の薬を動物に応用したりもするので備蓄がある。）

そこまでされると逆に何か要求されそうで怖いが、断っても面倒な

事になりそうなので素直に受け取っておく。

そしてその後は、労災とか傷病欠とかの話は皆無で普通に働かされた。

今考えると、普通はまず人の病院に行かせてほしい考えるところだが、「獣医師が減ると自分の診療が増えて疲れる」と瞬時に判断した院長は、薬や絆創膏を出す事で病院に行く必要が無い状況を作り出し、僕の意識がその方向に向かうのを阻止したのだろう。

この恐ろしいまでの瞬間計算力と悪行センスは時代劇の悪代官さながらだ。

時代劇ならここらで誰かが助けに来てくれそうだが、現実では都合良く水戸黄門や暴れん坊將軍みたいなヒーローが現れたりはないので地獄の統治は永遠に続く。

ともかく、この件は一般の人から見るとおかしい点があるかもしれないが、怒鳴られなかっただけでも儲けものだ。

また、患畜に直接接する看護師も当然咬まれたりする危険が高いわけで、僕の診療中に動物を抑えてもらっていた新人看護師が咬まれた事もあった。

そんな時には当然院長登場。
もちろん、キレている。

院長「お前、ちゃんと見てやってたのか！？ちゃんとした持ち方させてたら咬まれるわけないだろが！！お前の注意が足りんだ！！このバカが！！」

（ちゃんと見てたに決まってるだろ…。注意したところで避けられる速さじゃねえよ…。）

相変わらず無理難題を吹っ掛けてくる院長は放っておくとして、この時は負傷者が女性ということもあって人間の病院で診てもらったことになった…。 “診察終了後”に！！

診察時間中は応急手当だけ施されて仕事を続けさせられたのである…。

（恐らく経費で）治療費を出したことは称賛に値するが、出血するほどの傷を負った女性を平然と働かせ続ける神経は、一体どうやってら培うことができるのか？

この冷徹で図太い精神は、戦時中なら重宝される場面もあったかもしれないが、残念ながら今の世の中では「人として最低」という称号を手に入れる時にしか使えないだろう…。

以上のような、男なら負傷しても問題無いし、女性が負傷しても診察終了までは応急手当で済ますという院長の人でなしっぷりには呆れて物も言えない。

しかし、院長の小物っぷりを何よりも如実に語る話はこの後の院長自身が負傷した事例だ。

院長は基本的に、常連さんの大人しい動物しか扱わない。

したがって、怪我をすることはまず無いのだが、相手は動物、何が起こるか分からない。

ある日の診療中。

「スパーン！！！」

病院内にいい音が響いた。

診察室から手を押さえつつ院長登場。

もちろん、キレている。

院長「何でちゃんと抑えとかないんだ！！このバカが！！」

一緒に出てきた中堅看護師を怒鳴っている。

そして僕と先輩を見つけると言う。

院長「オレ、ちょっとこの怪我じゃ診察ができませんから病院で診てもらってくるわ。後は任せる。」

そして診察時間中に診療を待っている3〜4人のオーナーを残して病院を出て行く。

今一つ状況が理解できないが、オーナーを待たせるわけにもいかないので、残った従業員で何とか病院を回す。

一段落した後、中堅看護師に当時の状況を聞いてみると、まず、ワクチンを打つために患畜を保定するよう命じられ、院長の言う通りに優しく“緩めに”保定した。

次に、院長がワクチンを注射すると犬が暴れて院長の手に噛み付いた。

ビックリした院長は何故か反射的に中堅看護師の頭を叩き、そのまま診察室を出て行ったという。

そして、人の病院へ…。

戻ってきた院長はあざができただけの手に湿布を貼って、痛そうに擦りながらオーナーと話をするだけで、その日はもう診療することは無かった…。

女を叩く!!

あざごときで仕事を休んで通院!!

その後の仕事放棄!!

他人に厳しく自分に甘い!!

つくづくどうしようもない奴だと感じるのは僕だけだろうか？

そもそも、ちゃんとした持ち方をさせて、注意して見てやっていたら咬まれるわけ無いのではなかったか？

患畜が普段は大人しいからといって油断し、緩めの保定を自分で指示しておいて咬まれたら中堅看護師のせいにするとは…。

ここまで小物だと、呆れるどころか笑いが込み上げてくる。

というか、ここは笑い所なので是非笑ってください。
僕も笑うしかなかったです…、自分の人を見る目の無さを…。

まだ序の口

ちなみに、診療関係の苦労話はまだまだある。

診療を担当するようになると当然、血液検査やレントゲン検査、点滴や注射などの検査や治療を行う機会も増えるが、消耗品を使う時は要注意だ。

こう書けば勘の良い人はもう何となく気付くだろугが、我が病院では消耗品を使って失敗したら給料から天引きされるシステムとなっている。

失敗分はオーナーに請求するわけにいかず、そのまま病院の損害に繋がるからだそうだ。

血液検査用チップ、ウイルス判定キット、レントゲンのフィルム、注射器、注射針…。

安い物はやり直しの回数が少なければ免除されるが、原価で1000円を超える物はしっかりカウントして自己申告する。

自己申告なので院長が見ていない時はある程度誤魔化せそうだが、見ている前で失敗した時はどうしようもないし、見ていない時でも他の従業員が告げ口する危険がある。

告発すれば院長の印象が良くなり、その従業員は怒鳴られ難くなるからだ。

我が病院内は気を抜いた奴から喰われていく弱肉強食の世界なのだ。そして、検査や治療の回数も多いため、1か月間全く失敗しないという事は無い。

したがって、毎月の給料がどんどん減っていくに連れ、やる気もぐんぐん無くなっていくのだ。

ちなみに、何故こんなせこいシステムになっているかというと、院長曰く「お金がかかると慎重に、失敗しないように注意してやる癖がつき、技術の向上にもつながるから。」らしい。

素直に「お前らのミスによる損害をオレが受け持つなんて真っ平御

免だからだよ。」と言えばまだ可愛げがあるのに、それらしい理由をわざわざ考えて従業員から搾取するなんて本当に小物ですなあ。

さらに、診療をやり始めると他にもやらなくてはならない仕事が増える。

従業員の休診日出勤については前に述べた通りだが、獣医師にはそれプラス急患の診療当番も回ってくるのだ。

夜間や休日の急患の扱いについては各病院で対応が異なってくるが、我が病院では、休診日は対応するが夜間は対応しない事になっている。

その理由は院長曰く「休診日はホントの急患が多いが、夜間は緊急の状態じゃない患畜や無理難題をふっかけてくる飼い主、後で金を払うと言ってそのまま逃げる飼い主が多いため。」との事。

それもあるかもしれないが一番の理由は恐らく、「夜中に自宅下で他人にゴソゴソ動いてほしくない。（我が病院は院長の自宅が2階に併設されているため）」というものだろう。

まあ、理由などはどうでも良いが、夜間の診療もしない奴が「病気は平日休日関係なくやってくるから。」とか語るとは笑わせてくれる。

それはともかく、そういうわけで休診日には急患が来た時のために院長以外の獣医師が対応できる体制を取っておかなくてはならないのだ。

看護師が休診日当番で僕が急患当番の場合は、自宅待機という半拘束状態だが、どうせ疲れて家で寝ているのでさして問題ではない。

もし急患が来ても、看護師に補助してもらるので何とかなる。

問題は僕が休診日当番の場合だ。

獣医師の休診日当番は、自動的に急患当番も兼任することになっているのだ。

急患の診察や治療は独りでやらなくてはいけないし、院内の整理整頓や掃除、その他の雑用も急患が来たからといってノルマが軽減さ

れることは無い。

また、こつそり看護師を呼んで補助を頼もうものなら、「何勝手に従業員呼んでんだ！？院長気取りか！！」と怒鳴られるらしいので、応援も頼めない。

そんな時間的制約の中で診療をすれば、どうしても普段より粗がある診療となつて翌日には必ず怒鳴られるため、精神的にかなり追い詰められる“休日”となる。

「院長はどうした？」と思われる方が居られるかもしれないが、そろそろお気付きだろう。

わざわざ休みの日に働いたり手助けしてくれるような院長ではない。当然のように外出しているか、在宅中でも絶対に下りてこない。

さらに、診療の相談をするだけでも「オレは今日、休みなんだぞ！！」と怒鳴られ、無視される。

僕も本来は休みのはずなのに、何故神経をすり減らしてまで無償労働しなくてはならないのか？

ちなみに、休診日に診療する場合は、オーナーから診療費とは別に休日料金も徴収するが、僕には一切入ってこないし、病院からの休日診療手当てみたいなものも無い。

その理由は「休日の診察は、自分で開業した直後の独りで何でもやらなければいけない状態の練習になる。タダで病院の機材を使わせて練習させてやるんだから、むしろ授業料を払ってほしいくらい。」との事だ。

ふーん、あつそ。

言いたいことは山程あるけど面倒くさいのでやめとこう。

ともかく、そんな八方塞がりの状態なので、休診日当番の時の診療後にはやっぱり事件が起こる。

ある休診日に、かなり具合が悪い患畜が急患でやってきたので診察し、検査し、点滴をする。

本当は預かって様子を見たいところだが、院長に確認もせず入院

させると怒鳴られるし、入院させて良いかを聞いても怒鳴られる。しかも返事は貰えないので、相談しても怒鳴られ損だ。

悩んだ結果、点滴もしたし、すぐに急変するような状態ではなさそうだったので、翌朝にまた来てもらうように言ってその日は帰ってもらう。

そして翌日。

朝っぱらから院長登場。

もちろん、キレている。

院長「おい、カルテ見たぞ。この症状、オレなら。。。の病気を疑ってその検査もやるけど、それをやってないって事はその病気の心配はまったく無いんだな？」

「あ…、えつと…、……あります。」

院長「じゃあ何でいきなり点滴なんかやってんだ！！ボケ！！検査結果の数値が狂うだろが！！しかも点滴してすぐに帰しやがって！！これで死んだらお前が責任取ってくれるんだろうなあ！？ああ！！？」

（そこまで言うなら自分が診るよ…。だいたい、「休みだから相談も禁止」ってどうしようもねえじゃねえか！！）

休みの日に出勤させられ、手当ても振替休日も無く、孤独に病院の雑用や掃除、急患対応をし、翌日出勤したら朝っぱらから感謝の言葉も労いの言葉も無くただ怒鳴られる。

このストレスを想像してもらえるだろうか？

世間一般の感覚に置き換えれば、休みの日に公園に遊びに行ったら強制的に清掃のボランティアを独りでさせられる中、近くで突然お年寄りが倒れたので応急手当を行って救急車まで見送り、その後も頑張つて日が暮れるまで掃除して疲れきった体で「さあ帰るか。」

と思つたところに先ほどのお年寄りの家族が現れ、「何故病院まで付き添っていつて面倒を見てくれなかったのか！？この人でなし！

！」と文句を言われるといったところか。

というか、世間では似た様な状況にはならないと思われるので、置き換えに無理が生じているのは百も承知だ。

それ程にありえない状況が現実起こっていて、激しいストレスがかかってくるというのを分かってもらえれば十分。

理解してくれる人がどこかにいるはずと思えば少しは心の傷も癒える…。

入院できるのは…

また、休診日に勝手に患畜を入院させれば怒鳴られるのは分かりきった事なのだが、通常の診察日でも患畜を入院させようとすると一悶着起きる。

人と同じく、動物でも時間のかかる検査や点滴が必要になる場面は多々ある。

その間、オーナーにずっと待っていてもらうというのも時間の無駄なので、それらが日中で終わる場合は一時預かりをして夕方迎えに来てもらうという事がよくある。

この一時預かりならば、診察時間内なので従業員が頻繁に様子を見て、『容態が急変してないか』とか『点滴は順調か』とかをチエックすることになるので、院長には負担がかからないため、まったくお咎めは無い。

むしろ、一時預かり料金を徴収できるので、「できるだけ検査や点滴を勧めて入院用畜舎を埋め尽くせ。」という指示が出るくらいだ。ところが、日中で検査や点滴が終わらないような場合は当然、入院の話が出てくるが、その話になった途端に院長は一転してシビアに患畜の選別をし始めるのだ。

ある時、手の施しようが無いくらい状態の悪い瀕死の患畜がやってきて、オーナーと相談した結果、入院してダメ元でできる限りの治療を試みるようになった。

オーナーも、その患畜の具合がかなり悪いというのは十分理解しているようで、『夜の間は頻繁に様子を見ることもできないし、翌朝気付いたら死んでいたという可能性も十分あり得るがそれでも入院治療という事で良いか？』をいう条件も了承してくれた。

それらを踏まえて院長に入院の許可を求めに行くと…、もちろん、キレている。

院長「何でそんな今にも死にそんな奴を入院させんだ！？よく考えるよ！！バカが！！もう死ぬに決まってるだろ！？最期の時ぐらい飼い主に看取らせてやろうって優しさはねえのかよ！！第一、入院させたら飼い主が了承しても夜中に様子を見ないわけにはいかなかったら！その夜中の様子見や世話は誰がすると思ってるんだよ！？ああ！？お前が泊まって様子でも見てくれるってのか！？おお！？」

「……はい、泊まります。」

院長「アホウが！！そういう問題じゃねえんだよ！！無駄な治療や入院をさせんなって言うてんだ！！バカ！！誰も見てない時に死んだら訴訟問題に発展する事もあるんだぞ！！分かってんのかよ！？飼い主も、治療しないと「非情な人間」と思われそうで嫌だから仕方なく治療してくれて言うてるだけだろ！？」「静かに看取ってるのも愛情です。」とか言つときゃ、どうせ治療しない事になるに決まってるんだよ！！もういい！！お前じゃ話にならん！！オレが話つけてくるわ！！お前はさっさと次の診察行つて来い！！ボケエ！！」

（オーナーが治療を希望してんだよ！！優しくないのはどっちだよ！！しかも、「泊まるのか」って聞いたいて、『はい』って言うたら「そういう問題じゃねえ」って、何が言いたいんだ！？」「そこまではできません。」とでも言うと思ったのかよ！？お前じゃねえんだ！！人をくびるのも大概にしろ！！）

その後、院長に説得されたオーナーは自宅で看取ることを決め、痛み止めの飲み薬だけを持って帰っていった。

診察終了後、院長が穏やかな口調で語る。

院長「いやー、ホントにね、最期の時に治療するかしないかは明確なラインが無くて難しいんですよ。ただ、最終的にはやっぱり飼い主さんに決めてもらうしかないんです。そこで重要なのがしっかり

説明して納得してもらって事なんです。それにはコツがあるんですよ。あの飼い主さんも最初は治療していいものか半信半疑だったのに、僕の説明を聞いた後はちゃんと納得してもらって家で看取ることになりました。先生と僕は何が違うと思いますか？」

「…説得力のある説明ができるかできないかですか？」

院長「違うわー！それじゃオレの口が上手いだけみてえじゃねえか！…！…そうじゃなくて、しっかり患畜の事を考えてあげるって事なんです。飼い主さんにも伝わるんですよ、そういうのは。先生の診療方針は病気だけを見ていて、患畜を見ていないんですよ。自分の身に置き換えて考えてみれば分かります。先生だったら、無駄な治療を続けて病院で孤独死するのと、最期の方は家族に看取られて安らかに眠るのとどっちがいいですか？」

「…僕は治療の可能性に賭けてみたいですけど…。」

院長「そりゃ、お前だけだ！…！…そうじゃなくて、世間一般の人は孤独死よりも家族に看取られて成仏したいと考えるもんなんです。動物だって人と同じなんですよ。だから、次からは病気じゃなくて、しっかり患畜を見て診療方針を決めてあげてくださいね。」

なるほど。

確かに僕は、病気を何とか治そうと意気込むあまり、患畜の容体は二の次で無意味な治療をしようとしていたかもしれない。

「治療は必要無い」というオーナーの真意も（本当にオーナーがそう思っていたかは分からないが）考えすら及ばなかった。

しかし、院長が本当に患畜の事を考えて診療方針を決めたのかは疑う余地が十分にある。

「もう死ぬに決まってるんだろ。」は患畜の事を考えている時はなかなか出ない言葉だろうし、院長が何よりも気にしているのは「夜間に患畜が死んで訴訟問題に発展すること」であるのが彼の言葉の節々から伝わってくるのがお分かりいただけるだろう。

また、最初は治療を希望していたオーナーが、院長の説明後には何

の遺恨も無く治療を諦めたというのは、やはり院長の説得が功を奏したからに他ならない。

「説得力がある」というのはなかなか的を射た意見だったと思うのだが、何故それが「口が上手いだけ」と捉えられて怒鳴られなくてはいけないのかが分からない。

そもそも、話の内容云々の前に「オーナーにとって、院長と若い獣医師ではどちらの意見に信用が置けるか」という要素の方が大きい気がするが、院長はどうあっても「患畜の事を考えた」という点で自分の意見が採用されたことにしたいらしい。

わざわざ「患畜のため」と強調するのは、従業員に自分が思慮深い優しい院長だとアピールしたいからとかの理由だろうが、従業員からの嫌われ様を見ると、残念ながらこの作戦はまったく効果を発揮していないと言わざるをえない。

それにしても回りくどい言い回しをするものだ。

途中にわざわざ問いかけを挟んできているのは、「一方的に諭すだけでは、相手の意見も聞かないで持論を展開する自己中野郎と思われる。」とでも考えたのか？

あるいは、質問の答えまで全て予想して思い通りの語りをする事で、物事を見通す力を持った見識の高い人物を気取るつもりだったのか？

いずれにしろ、院長の中の正解と僕の中の正解が食い違っていたため、結局話のテンポが崩れただけで、最終的には「一方的に意見を押し付ける自己中野郎」みたいになっている。

しかも、自分の答えと万人の答えが一致しているという自信がよっぽどあったようで、思うような答えが返ってこなかったために一瞬キレている。

自分にとっての常識が誰にとっても常識であると考えているとは、どこまで自己中心的であれば気が済むのか。

ちなみに、その患畜はその日のうちに亡くなったそうだが、翌日にオーナーから「最後の瞬間を家族で見てあげれて良かった。院長先

生によろしく。」という感謝の言葉が病院に寄せられた。

その言葉を聞いた時の院長の「なっ？」って感じの得意顔がひたすらムカついたが、機嫌が悪くなられても困るので『さすがです。お手本にします。』みたいなお世辞を言っておく。

ともかく、我が病院に入院できる資格があるのは夜間に死ぬ可能性がほとんど無い軽症患畜のみなのだ。

それにしてもこの院長、あまりにも訴訟問題に怯え過ぎではないか？確かに訴訟問題は怖い。

昔よりも厳しい判決が下るようになってきているし、それだけで廃業に追い込まれる場合もある。

しかし、それはオーナーにしっかりインフォームドコンセントをすることで回避できることではないのか？

この時はそんな疑問を抱いていた…。

だが、全てが終わった今なら言える…、残念ながら院長は正しい。オーナーにしっかりインフォームドコンセントをすることの難しさと訴訟の恐怖は、僕もこの後、実体験することになるのだ…。

訴訟対策はいくらやってもやり過ぎるという事は無い。

訴訟の可能性が少しでもありそうなら、できるだけ避けて通るべきだ。

不要なリスクを負ってまで患畜を治療する必要は無いのだ。

助かりそうにない重症患畜は自宅で静かに息を引き取ってもらうのがベストである。

獣医師も所詮人間…、熱意や理想だけでは食べていけない。

あなたがこの先治療を拒否されても、どうかその獣医師を怨まないでやってほしい。

彼らも自分の生活や人生がかかっているのだ…、気楽に冒険はできないのだ…。

怨むなら簡単に訴訟ができる世の中を怨んでほしい。

……僕は何を書いているんだ…。

こんな事が書きたいんじゃないんだ…。
申し訳ない…、ちよつと感極まって変な事を書いてしまった。
今のはどうか忘れてほしい……。

手術デビュー

また、診療と同時に、簡単な手術の執刀も任されるようになる。

『なかなかやらせてもらえない病院もあるけど、我が病院は臨床経験1か月やそこから簡単な手術ならさせてもらえるようになるんだぜ！！ラッキー！！ヤッハウ！！』…なんてことは無く、当然トラブルが付きまとう。

初めての手術の時、前日にいきなり「明日の手術、執刀してもらうから。」とだけ言われた。

（おお…、いきなりだ…。何回も助手をやったし、よっぽどの事をしない限り死なない手術だけど、失敗したら怖いな。注意しながら頑張ろう。それにしてもいよいよ執刀か、ドキドキ。）

そんな事を考えながら学生時代の専門書を見て予習し、翌日を迎える。

手術は昼の休診時間にやるので、高まる緊張を抑えつつ午前の診察を終え、手順を最終確認しながら声がかかるのを待つが、一向に始まる気配が無い。

勝手に始めて良いわけもないだろうし、どうなっているのかを院長に確認しにいこうとすると、わざわざこちらから出向くまでもなく院長登場。

もちろん、キレている。

院長「おい、もう昼だぞ？いつ手術始めるつもりなんだ？」

『えっ、もう手術始められるんですか…？』

院長「はあ！？おい、おっさん！！何寝ぼけてんだ！？バカが！！オレはまだ今日の術式を聞いてねえぞ！！お前、オレの病院で勝手

な術式の手術をするつもりかよ！？ああ！？前にも言ったが、ここはオレの病院なんだから、ちゃんと事前に確認取れよ、オレに！！このドアホー！！」

（ああ…、そうだった…。診察の時は気を付けてたのに、手術の時までは気が回らなかつたなあ…。でも「やる前に術式を説明しろ。」の一言ぐらいあっても良かったんじゃないかなあ…？そもそも、もつと色々と相談しやすい雰囲気の“思慮深い優しい院長”だったらこんな事にはならなかつただろうになあ…。）

回避のチャンスがあつた理不尽ギレを受けると非常に悔しい気持ちになる。

まあ、相手がマジシャンズセレクトの使い手である以上、回避できるわけないのだが。

というか、「執刀してもらうつから。」の一言だけで、話しかけたら十中八九キレル院長に「術式を確認しなきゃ！！」と思える奴は果たしてこの世に何人くらい居るのだろうか？

ともかく、専門書通りの一般的な術式を説明しようとする。

『皮膚を。。。の辺りから切開して…』

院長「おい！！難しい専門用語で誤魔化すなよ！！分かりやすく絵とかで説明しろよ！！」

難しい専門用語は使っていない。

一般的な専門書には普通に載っている単語だが、院長はなぜかこの“普通の獣医師なら新人でも知っている言葉”を知らないようで、イメージが掴めないらしい。

仕方がないから、あまり得意ではないが絵を描いて説明する。

院長「お前…、こりゃ、へったくそな絵だな…（笑）。何がどこか分からん…（笑）。ほんでこの術式はどうせ専門書のやり方だろが

「！！うちの病院のやり方を言えよ！！」

無理矢理絵を描かせといてバカにする神経も疑うし、分からないとか言いつつも何となく分かってるし、笑ったかと思えばいきなり怒鳴り始めるし…。

本当にコイツはどういう風に接していけば良いのかが分からない奴だ。

しかも、簡単な手術なので「うちの病院のやり方」も何も、専門書と一緒に術式だった気がしたが違うらしい。

『えっ？このやり方だと思っただんですが…。』

院長「お前…、本当にどうしようもないな！！今まで何見てたんだ！？せっかく、手術の助手もさせてやってたのに全部無駄か！？やる気無しか！？向上心ゼロか！？ホント出来の悪い弟子だわ！！オレは教えんぞ！！早く先輩にでも聞いてこい！！ボケエー！！」

（ああ…、ダメだ…。もう堪えられないよ…。）

何か…、やけに悲しくなった。

頑張ってたつもりだったんだけど、そんなにやる気無いように見えただのかなあ？

そこまで言われるような事したかなあ？

男でも辛い時には泣いていいかなあ…？

そんな想いが頭の中を駆け巡るが泣いても問題は解決しないので、腕を組んでふんぞり返っているだけの院長に背を向けて検査で忙しそうな先輩にわざわざ聞いてくる。

先輩曰く、切り始めの位置がちょっと違うらしい。

それを院長に説明すると、院長は「そうだろうが！！ちゃんと勉強しとけよ！！分かったんならさっさと始めろ！！」と言って2階に上がっていく。

後は、検査が一段落した先輩が麻酔管理をやってくれて、ベテラン

看護師の助手で手術し、無事に終了した…。

教えてもらうのは最初から期待していなかったが、どうでも良さそうな細部にこだわって怒鳴った上に、何でそうしなければならぬかの説明も全く無いまま、まさかの放置プレイとは…。

コイツは本当に悪い方の予想の上を行くのがうまい奴だ。

“うちの病院流の術式”が専門書に載っている一般的な術式と（本当にちよつとだけ）違う理由も、恐らく「この病院の独自性を出したかった」とか「オレ流に改良した」とかのくだらない理由だろうが、傍から見ても分からない程度の違いで、こつも怒鳴られるものだろうか？

しかも術後、皮膚の縫い目を見て「こりやまた汚ねえ縫い方だなあ、おい。この子も可哀相に（笑）。」と一言貶すのみ。

こつして、手術は無事成功したのに苦手意識が芽生えるという摩訶不思議な結果に終わった手術デビューは幕を閉じた。

犬の格差社会

診療や手術の話題でいえば輸血の話もしなければなるまい。

人と同じように、獣医療でも病気や怪我による貧血の場合や大出血が予想される手術では輸血を行うことがある。

人の場合は輸血パックの備蓄があるみたいだが、輸血の機会が少ない動物病院には輸血パックの備蓄はまず無いので、大抵は輸血直前に健康な動物から新鮮血を調達することになる。

まずは血液を少し採って適合検査、使えそうなら必要量を輸血用パックに採血する。

もちろん、供血動物の生命や健康に全く影響を及ぼさない量を、だ。また、大抵の動物病院には院内犬や院内猫が居り、輸血が必要な場合は彼らがまず第一候補になる。

当然、我が病院にも院内犬が居り、犬の輸血が必要な時は活躍してくれるのだ。

彼は小さい頃に捨てられて衰弱していたところを近所の人に発見され、我が病院に連れて来られて治療を受け、回復した後はそのまま院内犬として立派に働くことになったそうだ。

…こう聞くと素晴らしい美談に思えるのだが、実際には彼は悲惨な毎日を過ごしている。

回復後、引き取り手の無かった彼はそのまま病院で暮らす事になるのだが、院長家にはすでに血統書付きの大変可愛がられているワンちゃんが居た。

元ノラ犬で雑種なため、愛情が注がれるはずもない彼の世話は従業員に丸投げされ、食事や散歩、治療などの生活レベルは必要最低限をやや下回り、生かさず殺さずの状態で飼い続けられ、愛想が悪いために従業員からも嫌われていじめられたりストレス発散の玩具として扱われ、血液が必要な時は限界ギリギリでふらつく位まで血を抜き取られる。

それに比べて2階にいるワンちゃんは、たっぷり愛情を注がれ、美味しい食事をたらふく食べ、快適な環境で過ごし、治療も予防も必要以上に受け、丸々太って血液もたくさんあるはずなのに輸血用の血液を採られた事は1回も無くて…。

そう、格差社会は人間だけでなく動物の世界にも存在するわけだ。

個人的な意見を言わせてもらえば、捨て犬などを飼う気も無いくせに可哀想とか言って病院に連れてきて治療費もその後の面倒も全て病院に丸投げしておきながら善い行いをした気になっている偽善者がそもそもの元凶だ！！

よく覚えておくといい。

里親の見つからなかった彼らは大抵、保健所行きか病院で悲惨な一生を送るのだ。

その後の生活まで面倒を見る覚悟が無いなら、捨て犬や捨て猫を病院に持つてこないでもらいたい…。

可哀想と言いつつも自分では何の損害もリスクも負わず、ただ病院に連れていく事しかない奴は間違いなく偽善者だ！！

話がやや逸れたが、彼に対する非道な仕打ちについての院長の言い分はというと、「うちで飼ってやらなかったら保健所行きだったんだぞ。血ぐらい貰っても罰は当たらん。」だそうだ。

もう「採血量を間違えた」ってことでわざと死なせてやった方が彼にとっては幸せなんじゃないかと思ったりもするが、死なせたりすると院長がブチキレて面倒な事になるのは分かりきった事であり、すぐに別の可哀想な犬が保健所あたりから連れて来られて結局同じだし、僕にそれをする勇氣があるはずもないので、彼はこのまま一生ギリギリの生活をしつつ、血を抜かれ続けるのだろう…。

自宅の犬と病院の犬とで、天と地ほどの差別をする院長は獣医師として当然失格だと思うが、それを救おうとしない僕もまた獣医師失格なのだろうか…？

マイナスばかりの往診

また、臨床獣医師の診療の場は病院内だけに留まらない。

多くの動物病院は、病院に患畜を連れて来られないオーナーのために往診も行う。

もちろん我が病院でも行っており、緊急でない限りは昼の休診時間に行くことになる…、お昼休みは当然の如くお休みしている院長以外の獣医師が、だ。

元々、昼の休診時間も手術や掃除などの雑用三昧でどうせ働かされているので、往診に行くこと自体はさほど苦痛ではない。

苦痛なのは病院の往診車があるにもかかわらず、自分の車で往診させられる事なのだ。

往診車は毎回、「院長や家族が他で使う用事がある」とのことです。往診に使えないのだが、毎度毎度そんな都合良く用事があるわけはなく、本当のところは「自分の車を他人に運転させたくない」だの、「動物を乗せて汚したくない」だのが本音だろう。

ちなみにこの「往診車」、普通のワゴンタイプの軽自動車で専門的な設備は一切積んでいない。

どう考えても、「往診車」ってことにして病院の経費で自家用車を買ったとは思えないのだ。

まあそれはともかく、素直に納得はできないが、病院の絶対権者が「使えない」と言っている以上、往診車は使えない。

仕方がないので、自分の車に往診用バッグを積んで往診に行く。

しかし、病気や怪我の程度が軽く、行った先での処置だけで済む場合は良いのだが、重症患畜は検査などのために病院に連れて帰らなくてはならない。

さらに、大抵の重症患畜は立ち上がる力が弱っていて糞尿垂れ流しの状態で放置されていることが多いので、そういう患畜を車に乗せると鼻を突く刺激臭が車内に充満し、匂いが染み付いてしまうため、

乗せるのは躊躇してしまう。

だが、患畜の命を救うためと我慢し、車に乗せて病院に連れ帰って検査や治療をしていると、2階で休んでいた院長が様子見で下りてきて軽快に喋る。

院長「うわっ！！臭っせえなあ、コイツ！！先生の車、匂い染み込んでんじゃない？お気の毒に」。うちの車じゃなくてホント良かった（笑）。検査と治療はこれでいいから後は頑張ってね。おお、クサッ！！」

そして、鼻をつまんでコミカルな（つもりだがこちらとしては異常にイラつく）動きで先輩獣医やベテラン看護師の笑いを取って（といつても、表面上合わせているだけで心の中では貶されているとも知らないで）2階の自宅に帰っていく。

もはや、つつこみどころが満載過ぎてつつこむ気も失せるが、一つだけ言わせてもらおう。

死ねばいいのに！！

ところで、往診の場合は通常の治療費に加えて「往診代」という特別料金を徴収することになるのは想像に難くないだろうが、これは誰の懐に入るのか？

当然、病院：というか院長の懐に“100%”入っていく。

つまり、「往診手当」みたいなものは無いのだ。

しかも、この糞尿臭にまみれた我が愛車は、駐車場料金まで取られている始末。

勤務中は病院が近くに借りている従業員用駐車場に停めているのだが、この守銭奴院長が無料で停めさせてくれるわけがない。

どうせ経費で安上がりしているくせに「通常料金よりも安くしてありますから。」と恩着せがましい事を言って駐車場代を徴収し、渋ると「だったら自分で借りればいいんじゃない？どうせうちより

高いけど。」と足元を見る発言をしてくるらしい。

ちなみに、通勤用のガソリン代も支給されていることは支給されているのだが、“安くしてある”駐車場料金よりもさらに安いので交通費のトータルではやっぱりマイナスになるのだ。

何故、お金を取られてまで通勤に使っている自分の車をマイナス要素ばかりの往診に使わされなければならないのか？

院長曰く、「往診は、限られた道具で診察や治療をする勉強になるから行かせてやってる。お前の勉強のために行かせてやるんだからお前の車で行くのは当たり前。」

大抵の人間は経営に携わると金に汚くなるようだが、コイツは元々そうだったと思えないくらいの守銭奴っぷりである。

水面下の努力

さらに、日々の診察終了後には夜の手術、掃除・片付け、反省会など、ただでさえやる事は多いが、勉強会がある日はもう泣きそうになる。

獣医師は常に新しい知識を学んでいないと最高の治療ができないため、近隣地域の病院の獣医師たちが知識の共有を図るため、定期的に集まって夜の勉強会を開くところも多い。

そして、我が病院ももちろん地域の勉強会に毎回参加しているのだが、他の獣医師たちの話をただ聞くだけならともかく、うちの院長はさらに無理難題を押し付けてくる。

見栄のためだか何だか知らないが、我が病院は勉強会ごとに最低一つの症例を発表することになっているらしいのだ。

発表するのは院長だが、原稿を作るのはもちろん先輩や僕だ。

診療や雑用で忙しいのに細かい点まで訂正を受けて何度も作り直し、勉強会直前にやっと仕上げるわけだがその間の自分の仕事はほとんど後回しになっているため、翌日以降にまとめてやることになる。

しかし、院長からの特別な配慮は何も無く、「仕事が遅い」と遠まわしに嫌味を言われ、ミスがあれば躊躇無く怒鳴られる…。

正直、勉強会の内容も疲れていてほとんど頭に残らないが、その事でまた院長に「やる気を出せ!!」だの「根性が無い!!」だのと言われると「お前のせいだよ!!」と思わず叫びたくなってくるのだ。

それを堪えて謝るのが、またストレスになって吐き気を催すんだあ…、H A H A H A…。

院内犬の心配をしてる場合じゃないよね…。

また、知識の入手先としては専門書や獣医関連雑誌の存在も大きい。珍しい病気などは専門書を見ないと検査や治療法が分からないし、

雑誌などからは最新の治療法や流行っている病気などの情報が得られる。

ただし、専門書も雑誌も需要が少ないため、やたらと値段が張るのだ。

新人の獣医師は、数万円もする専門書をおいそれと買うことはできない。

しかし、多くの動物病院には大抵そういう書物が病院のものとして置いてあり、病院で勉強する分にはあまり困らないはずなのだ…。

が！！何度も書いたと思うが、我が病院は他とは違うのだ！！もちろん、院長は病院の経費でそういう本を購入している。

しかし、そのほとんどは院長の自宅である2階に貯蔵されている。そこは当然、院長一家以外の人間が踏み入ることは許されない聖域である。

したがって、従業員は1階に置かれた十数年前の専門書や古雑誌で期限の切れかけた知識を頼りに診療をしなければならないのだ…、院長に「古いやり方をしとるのぉ。」とバカにされながら…。

「本ぐらい読ませてくれても良いのでは？」という当然の疑問が湧いてくるが、院長曰く「自分でお金を出して買った方が無駄にならないように必死で内容を覚えるはず。その結果、知識の向上にもつながる…（もういいよ！！その理論！！）」

それっぽい理屈を言っているが、どうせ本心は「自分の金で買った本を他人がタダで見るのは損。」とか「従業員が知らない最新の知識を披露すればもつと尊敬される！！」とか思っているのだろう。

本当に小物すぎて、何でこんな院長の下で働かなきゃいけないのかと思うと泣けてくる。

まあ、軽率に病院を選んだ僕がいけないのだが、もうそろそろこの罪は許されてもいいのではないだろうか。

凍える夏

——とにかくにも、以上のような悪い意味でのドラマチックな展開となった悪夢の3か月が終わりました。

どうですか、この院長…。

最悪っぷりは満足していただけました？

もうそろそろエピソードが出尽くしたと思うでしょ？

でもね…、まだまだあるんですよ！！

ここまできたらこの後も是非見ていつてください。

ちよつと一休みしますか？

必要無い？

じゃあ早速続きといきましょう！！——

7月。

世間ではボーナスを貰ってウキウキ気分の会社員も多い時期かと思うが、我が病院ではそんな浮かれ気分な奴は存在しない。

何故なら、我が病院ではボーナスの字も出てこなかったからだ。聞くところによると、ボーナスは事業主が従業員の士気を上げるためや日常業務の苦勞に報いるために出すものだそうで、そんな無駄な出費を我が院長が行うはずがないのだ。

經理の事は良く分らないが、従業員のボーナスは必要経費ということ、割安で支給できたりはしないのか？

必要経費として支給しても余分な出費となり、利益が減るのが嫌で出さないだけなのか？

いずれにしても、毎年海外旅行を楽しむだの、自家用車3台保有（“往診車”を含む）だの、休日はいつもお出かけして外食だのと豪遊するようなお金や儲けがあるのなら、少しは従業員に還元してくれても良いのではないだろうか？

従業員も過酷な労働環境で働き、ボーナスや各種手当ても貰えず、ミスを責められては懲罰金を徴収されるばかりではやりきれないだろう。

従業員の皆さんはとも言えないと思うので、もはや無関係の僕が代わりに言おう。

『院長、アンタ従業員からさんざん搾取して儲かってんだろ！？ちつとは還元しろよ！！それともなにか？儲けは全部自分の力か？自分独りで病院やれてると思ってるのか？従業員は雇ってやってる感覚か？ふざけんな！！そんな扱いをいつまでも続けてるとみんな病院辞めるぞ！！』

ふーっ、ちよつとスツキリ！！

当時言いたかった事言っただし、最後の一文は最終的に実現するしね…、フフフ。

まあそんなこんなで、テンションが上がらないまま暑い夏が始まるわけだが、病院では（特に僕にとって）身も凍えるような恐ろしい事態が待ち構えていた…。

ダブルインパクト

超繁忙期も過ぎてやや落ち着いてきた頃、二つの衝撃に襲われる。まずは軽めの衝撃。

ある日の雑談の中でベテラン看護師が言った。

「先生、3か月持ち堪えたね！！私、絶対そろそろ辞めると思ってた。最近元氣無かったし、去年入った先生もちょうど今頃、うつ病になって辞めたしね。」

うつ病！！！！

職場の人間関係やパワーハラスメントなどのストレスから気分が塞ぎ込み、自分自身の可能性や将来に希望が見出せなくなり、この世の全てが意味の無いもの to 思え、全ての事柄に対してやる気が出なくなり、次第にこのまま死んだほうが楽かもと思い始め、最後にはむしろ死のう to 考えるようになる病氣である！！（個人の感想です。）

うつ病に罹った人たちの気持ちはよく分かる…、何故なら僕もこのあと罹るから！！

その先生も相当苦しんだに違いない。

頑張っても結果は出ないし（出るけど出てない事にされる）、ひたすら怒鳴られ続けるし、周りは敵だらけだし、院長は師事するに値しない小物だし、未来は見えないし…。

元は明るかった先生が最後には笑顔が無くなって体調を崩し、心配した家族が病院に連れて行ったら重度のうつ病と診断され、仕事を休むことを勧められたそうだ。

原因は間違いなく院長の言動。

これは傷害罪にならないのか？

そういえば、前々から勤務獣医師が4年目の先輩1人だけというのがおかしいとは思っていたのだ。

実際は、どうやら毎年1人くらいは採用されるらしいのだが、大抵は院長の言動に耐えられずに辞めていくらしい。

もちろん、看護師も含めてだ。

やはり、ここはそういう職場だったのだ!!

強靱な精神力を持ち合わせない常人が踏み込んではいけない魔の領域だったのだ!!

僕の判断は完全なる失策だったのだ…。

ともかく、それは過去の話だから、衝撃は軽め。(全然軽くないけど!!)

それよりも問題だったのは先輩獣医師の「オレ、今月で契約終わりだから。」発言。

(なん… だと…? 辞めるだど!!?)

微妙に絡みづらい先輩ではあったが、診療の良き相談役としては頼れる存在だった。

そんな彼が居なくなると、獣医師は僕と院長のみ。

そうなれば、相談も質問も全て直接院長にしなくてはいけないし、診療する件数も院長と接する時間も多くなるし、機嫌を取る人間が減るので院長の不機嫌な時間が増える。

当然、怒鳴られる回数も大幅にアップするだろう。

そんな地獄がすぐそこまで迫ってきているというのだ!!

かといって、先輩を攻めるわけにもいかない。

先輩は臨床獣医師の世界で研修期間の目安とされている3年を見事に勤めあげ、病院の忙しい時期も過ぎた今が絶好の辞め時なのだ。

3年を過ぎると、一般的には「開業する」、「他の病院で勤務」、「同じ病院で勤務」のどれかを選ぶことになるが、我が病院では3番目の選択肢を選んだ者は未だかつて居ないそうだ。

先輩も、他の病院でもう2、3年勤務しつつ勉強し、その後に開業するらしい…。

そうこうするうちに7月も終わり、退職金も感謝や労いの言葉も無く、院長の「僕が一人前にしてあげたんだから、この世界で失敗するはずが無いですよ。」という、ひたすら恩着せがましい送別の言葉と安っぽい（てゆーかホントに安い）花束を胸に先輩は病院を去っていった…。

合掌。

さらなる地獄

8月。

先輩が居なくなっただけからは、まさに生き地獄。

今まで先輩がやっていた仕事がほとんど回ってくる。

診察、治療、手術が増えるのはもちろん、薬剤、医療器具の注文や出入り業者の対応に加え、院長の車の洗車などの雑用まで全部やらなければならなくなる。

今までは精神的にいつぱいいつぱいだったただけだが、今度からは時間的にも肉体的にも《いつぱいおっぱいチェリーパイ》。

もう休み時間は休めない。

だがしかし、「毎日12時間以上連続勤務」とか、「昼食の時間は5分しかない」とか、「時々めまいがするようになる」とか、「そんな状況でもやっぱり院長は手伝わない」とかそんな些細な事は問題ではないのだ。

一番の問題はご承知のとおり、院長に今まで以上に怒鳴られ続けるストレスフルな生活が始まったことである…。

医療機器の注文の時、時間節約のためにできるだけ少ない時間で仕事をこなそうと思い、よく使う注射針と注射器を多めに注文した。

先輩は何故かいつもチマチマ注文していたので、このまとめ注文で効率アップ！…と思いきや、先輩がそれをしなかった理由はちゃんとあった。

品物が届いたところで院長登場。

もちろん、キレている。

院長「おい、おっさん！！何でこんなにたくさん注文してんだ！？置く場所がねえだろうが！！このバカ！！ちゃんと先を考えて注文しろよ！！！」

置き方を少し工夫すれば、置く場所はいくらでもある。

しかも、いつも1週間くらいで無くなるので2週間分注文しただけだ。

多過ぎると思えない。

そもそも、注意されていたわけでも指示されていたわけでもないのに、いきなり怒鳴るような事だろうか？

しかし、院長には院長の美学があるらしく、2週間分の注文は美学に反するらしいのだ。

結局、半分は返品することになり、1週間後にまた持ってきてもらった。

業者からは「もう少しまとめて注文してもらえるとありがたいんですけど。」と言われるが、院長曰く、「こっちは客で金を払ってるんだから、そんな業者の都合など知らん。」とのこと。

さすがは院長、「金が全て」的な考えと立場の弱い者には容赦しない態度を隠そうともしないところが逆に清々しい。

診療もカルテの確認無しで、独りで任される事が多くなる。

不要な検査はせず、最低限の検査と薬でまずは様子を見るといふ患者にもオーナーの財布にも優しい方針でやっていると、院長登場。もちろん、キレている。

院長「お前、何やってんだよ！！もつと色々と検査しないと儲からんだろ！！その使えん脳みそ、何とかしてくれよ！！オーナーもいんな検査結果を見れば安心できるし、検査すればするほど丁寧な診察だっと思うんだよ！！薬ももつと適当なサプリメントとか混ぜて出せよ！！金かける事が愛情だと思ってる飼主も居るんだ！！バカが！！お前に診察を任せると売り上げが落ちるから、オレがいつまで経っても安心して休めんだろが！！」

そう、動物病院もビジネスなので儲けを出さなくてはいけない。

院長の言う事も一理あるのだが、こんな拝金主義の院長がオーナーの間では丁寧で優しい診療をしてくれる先生として通っているのが気に食わない。

怒鳴っている内容も、結局は自分が休んでいても十分な利益を出せる獣医師を育てようとしているだけで、決してオーナーや患者や僕のためを想っての事ではないのだ。

さらに後日、言われた通りに検査を少し増やしていたら院長登場。もちろん、キレている。

院長「お前…、言われた事をそのままやるだけか！？そんなん口ボツトでもできるわ！！脳みそ腐ってんじゃねえのか！？あの飼い主若い夫婦だろ！？金持ってなさそうってのは一目瞭然だろうが！！そういう奴は検査少なめにしてやらないと支払いが滞るだろ！！バカが！！お前、代わりに払ってくれるんか！？もつと考えて診察しろよ！！ドアホ！！」

言われてみればそうかもしれないと思うが、診療を始めて数か月の人間にその判断を求めるのは少々酷ではないだろうか？

言われた通りにしてないと誰かさんに怒鳴られるのでそうしているだけだったのだが、それでもやっぱり怒鳴られるあたり、やるせなくて精神がじわじわと蝕まれていくのを感じる。

というか、診療ができるロボットがいるなら是非見てみたいものだ。もはや綺麗事を言わなくなっているのは内部の人間として認められた証だろうか？

はつきり言って全然嬉しくない。

また、診療が増えたと当然、自分が担当していた患者の死にもよく出会うようになる。

オーナーのペットに対する扱いはピンからキリまであり、ほとんど

世話をしないで餌をやるだけという人から、まるで自分の子供のように可愛がっている人までいる。

そのため、同じ病気や症状でもオーナーによって検査や治療法を変えねばならないし、中には治療が長引くと面倒くさいしお金もかかるので安楽死を望むというオーナーもいる。

安楽死に対しては各獣医師ごとに自分の意見があるだろうが、僕の考えとしては、オーナーに嫌々飼われて愛情を注いでもらえない生活を送るくらいなら早く楽にしてやった方が動物のためだと思うし、オーナーが望むならその決定に従うのが獣医師としての務めだと思う。

自分の手で殺すと後味が悪いとか、尊い命を奪うことは誰にも許されないなどの自身の理由から安楽死はしないという獣医師は職務放棄も甚だしいと思う。

こんなドライな考えのため、僕は患畜を安楽殺する事には何の躊躇いも無いのだ。

だが、治療して治そうとしていた患畜の死は別だ。

治療をしていた患畜が死んでしまうと、僕も当然ショックを受ける。たとえその病気が末期ガンとか重度の内臓疾患とかで手の施しようが無い状態だったとしても、治療する以上は少しでも長く生きてほしいと思うし、死なせてしまった後のオーナーの悲しむ姿を見ると役に立てなくて申し訳なく思えてくる。

しかし、僕は感情表現が薄いため、気分が落ち込んでいても上手く泣いたりあからさまに悲しそうな顔をしたりはできず、その後の作業を淡々と続けたりしてしまう。

その様子が気に入らなかったのか、機嫌が悪かったただけなのか、院長が問いかけてくる。

院長「君さあ…、どうしてそんなに普通でいられるの？君じゃなくて僕とかもつと偉い先生が診てたら治せてたかもしれないんだよ？君にもつと技術と知識があれば治せたかもしれないんだよ？何で悲

しんでないのかなあ……。何で飼い主さんに申し訳ないと思わないのかなあ……。何でもっと向上心を持たないのかなあ……。分かつてる？
。。ちゃんは君が殺したんだよ。」

分かつてる。

悲しんでる。

もっと知識や技術が欲しいと思ってる。

院長にはショックを受けてないように見えたため、命の大切さを自覚させようと厳しい言葉を使ったのかもしれないが、この言葉でますます気分が沈んでいく。

僕はそんな非情な人間に見えているのかと思うと激しい自己嫌悪に陥る。

かといって、オーバーリアクションで悲しんで見せるのも得意ではないのでどうしようもない。

院長の言う通り、本当は悲しんでないんじゃないか？

患畜の死を軽く受け止めているんじゃないだろうか？

患畜の死の悲しみを上手く表現できない僕は臨床に向いていないんじゃないだろうか？

そんな事を思わせる院長の言葉だった。

はじめの1歩

手術に関しても、今まで先輩がやっていた難易度が中くらいの手術を執刀する機会が増えた。

普通なら技術が向上して願ったり叶ったりなのだが、新しい手術の度に術式確認の段階から酷い目に遭わされるのであまり乗り気はない。

戸惑いながら返事をしていたら突然、院長の顔が歪んでいく。
もちろん、キレている。

院長「おい、おっさん！！何だ、そのやる気の無い返事は！！お前にやらせると時間はかかるし、失敗のリスクも負わなきゃならんし、オレに得な事は一つもねえんだぞ！？それでもお前を育てるためにわざわざ技術向上の機会を与えてやってんのに、喜んでやってみようと思わんのか！？このボンクラが！！」

働き始めた頃の気力があれば「はい、ありがとうございます。」とか「はい、頑張ります。」とか元気よく言っていたと思うが、この時点ではそんな気力はもう無くなっている。

その気力を奪ったのは他でもない院長だ。

「お前を育てるため」とか恩着せがましいことを言っているが、早く単独で任せられる手術を増やして自分が休める時間も増やしたいだけだろう。

ギブ&テイクが成り立つ関係なのに、なぜ一方的に怒鳴られて恩まです押し売りされなければならないのか？

しかも、この後の術式確認でまた怒鳴られ、絵を貶され、一通りのストレス解消をされてからようやく手術が始まるのだ。

手術中も、麻酔管理と術式の監督のために院長が側に立って見ているので、緊張して細かいミスを多発するのだが、そこでも当然怒鳴

られる。

ここまでされたら、技術を身に付ける以上に、嫌な記憶しか残らない。

院長が「育ててやっている」のは、手術に対するトラウマの方だろうか？

また、手術は昼か夜の診察をしていない時間帯に行うため、院長は自分が手術で執刀する時以外には暇を持て余していることが多い。さらに、簡単な手術ならもう安心して任せられると判断されているようで、手術中は2階の自宅で休んでいるか、手術室で高みの見物をしているかのどちらかで、いずれにしても手が空いていて上機嫌なので怒鳴ることは滅多に無い。しかし、怒鳴らない代わりにたつぷりバカにされることになる。

院長「おいおい、君いゝ、そんな手つきで大丈夫か？お爺さんが手術やってんのかと思ったよ。僕ならもうちょっと上手く手術できるんだけどなあ。僕の病院の看板背負ってんだから綺麗に手術してよ？そんな手つきじゃベッドで彼女を喜ばせられないでしょ？あつ、彼女居ないからそんな心配無いか！！アハハハハ！！」

さらつと下ネタが入っているのは上機嫌な証拠だが、それにしても下品な野郎だ。

何でこんな卑小な存在が散々儲けて悠々自適に暮らせているのか？この世には神など居ない事を確信する。

ちなみに、助手に入っているベテラン看護師（女）も話を合わせてわざわざ下品な下ネタで僕を小バカにしていたが、元々下ネタ好きなのか、調子を合わせないと院長が不機嫌になるので仕方なく言ったのかは分からない。

いずれにしろ、標的は院内ランク最下位の僕なので2人とも言いたい放題なわけだが、怒鳴られるよりはマシなので手術に夢中になっ

ているフリをしてシカトする。

この病院に入って以来、忍耐力だけは異常に鍛えられたが、これは喜ぶべきことだろうか？

さらに、手術終盤では言う事が無くなってきたのか、自慢めいた事を言い始める。

院長「それにしても君は執刀が遅いね。僕ならこの程度の手術は10分で終わらせますよ。センスの違いなのかなあ？まあ、今回は僕の腕を見せてあげますよ。ハハハ。」

ぶっちゃけ、センス云々よりも十年以上の経験の差だとは思うが、自分の執刀センスに自信があるわけでもないのに気にしない事にする。

むしろ、十年以上続けている手術が新人より上手いのは言うまでもない事で、それを自慢げに口にする時点で己の器の小ささを認めているも同然という事実はこの小物は何故気付かないのだろうか？頭はいいかもしれないけど、コイツ本当にバカです。

それにしても、メスやハサミなどの鋭利な刃物が手元にあるときに人をイラつかせるような事を言うのはやめてほしいものだ。

うっかり手元を狂わせてしまいそうになる…。

ともかく、手術する度に怒鳴られ、貶され、バカにされ…、毎回繰り返されるこのストレスに耐えてまで技術の向上を図ろうとするぐらゐの根性がないと獣医師ではないというのなら、やっぱり僕は獣医師失格だ。

さらに後日、予告通り、院長が同じような手術を執刀するのを見学した。

センスが良いらしいのでお手並み拝見だ。

日頃慣れている手術だし、万に一つも失敗するような事はあるまいが、「なるべく失敗して恥をかけばいいのに。」と不謹慎な事態を

祈りつつ見ていると、さすがは院長、大口を叩いただけあって、手つきが丁寧で軽やかだ。

センスが良いかどうかはともかく、長年の執刀経験は伊達ではないようだ。

今は軽快に喋りつつ上機嫌で執刀しているものの、いつ機嫌が悪くなってもおかしくないのが、助手のベテラン看護師はベタ褒めを続け、僕も苦手ながらに感嘆の言葉を発するなどをして機嫌を取る。

そんな中、気分を良くして油断したせいか、院長が少し手間取る場面があった。

突然無口になった院長の顔がみるみる紅潮していく。

もちろん、キレている。

院長「おい！！引つ張り過ぎだ！！このボケ！！そんなに引つ張ったら術者のオレが手術しにくいだろう！！何年助手をやってんだ！？バカが！！」

見ていた感じではベテラン看護師は普通にしていたし、後から聞いてもいつも通りやっていただけでそんなに引つ張ってはいなかったそうだった。

手術を急ぐあまり、院長の思い通りスムーズにいかなかっただけの可能性が高いが、不調なのは全て他人のせいにはしないと気が済まないらしい。

しかも、ミスしたわけでもなく、ただ手術の流れが少し滞っただけなのにいきなり自分のせいにされて怒鳴られるなんて、頑張っただけ嫌を取っていたベテラン看護師も浮かばれまい。

そもそも、新人獣医師と院長とでは、経験年数や執刀回数が比べものにならないほど違うので、手術時間や技術に開きがあつて当然なのは自明の理だ。

勝ったところで誇れる事でもない。

なのにわざわざ勝負を挑んできた拳句、上手くいかなかったのを他

人のせいにして当り散らすとは、この小物はいったい何がしたかったのだろうか？

「まあ、この件は僕が怒鳴られたわけでもないし、別にいいや。」
と思った時点で自分の心が腐り始めていることに気付く。

仲間意識も思いやりの欠片も無い言葉だ。

ほんの3か月前までは他者を犠牲にして自分が助かるような人間にはなりたくないと思っていたのに、早くもその「はじめの1歩」を踏み出していたのだ。

しかし、そうでなくてはこの病院で生きていけない。

他人を庇って怒鳴られたり、怒鳴られた者の苦しみを共感したりしていると、あつという間に精神に異常をきたしてしまうのだ。

「よく考えたら、人生なんてどんな綺麗事を言っても、結局は他人を犠牲にしないと生きていけないよね。」などと勝手に言い訳をして自分をなんとか納得させる事にした。

ちなみに、手術が順調に進んでいたとしても院長が予告した10分で終わらなかったであろう事は書くまでもない。

獣医の医療ミス？

さらに、手術に関してはとんでもない事件があった。

人でもそうだが、稀に異常に麻酔にかかりやすかったり、麻酔に対して激しいアレルギー反応を起こす患畜がいて、実際に麻酔をかけてみないと分からないケースがある。

もちろん、全ての手術において細心の注意を払いながら麻酔をかけるが、気付いた時には手遅れという事故が起きることもあるのだ。

そして、運悪く、僕が手術した患畜でこの事故が起きてしまい、患畜を死なせてしまったのだ。

全てのオーナーには手術前に必ず、事故が起こる可能性の説明を十分に行い、手術の同意書にもサインをしてもらっているので、通常はそんなに大きな問題には発展しない。

しかし、この時は術前の説明で、僕が『大丈夫』と言ったことが問題となったのだ。

手術前、いつも通りに術前の注意事項や麻酔のリスクを説明した。

しかし、オーナーがあまりにも心配そうにしていたので、ついっかかり『手術自体は簡単で、まず失敗する事も無いので大丈夫ですよ。安心してください。』と言ったのがまずかった。

オーナーはそれを聞いて、「死ぬなんて事はありえない」と認識し同意書にサインしたのだという。

それを聞いた院長は、もはや人間のものとは思えないほど不細工にひん曲がった顔をして僕の方に向かってくる。

もちろん、キレている。

院長「お前、何で『大丈夫』なんて言ったんだ！？このバカ！！飼主なんて都合のいい事しか聞いてねえんだから、そんな言ったら、いくら麻酔の危険性を話しても頭に入らねえに決まってるだろ

「！！」

『あ…、その…、あまりにも心配されてたんで…。』

院長「だからって「安心してください」とか「大丈夫」とかを言うなよって言うてんだ！！ボケ！！そんなこと言っというて今回みたいに大丈夫じゃなかったら訴訟問題に発展するんだぞ！！あの飼い主、「死ぬとは思わなかった」って言うてんじゃねえか！！どうすんだよ！！？ああ！！？飼い主には最悪のパターンだけ説明しというて余計な希望は持たせんよ！！そうしとけば最悪の事態になっても「ああ、やっぱり」で終わるし、普通に成功したら「奇跡的に大成」みたいにになるだろが！！」

『あ…、でも…、あのままだと手術自体を止めそんな雰囲気で…』

院長「だからそれは説明の仕方次第だろが！！口答えばかりしやがって！！このタコが！！やらないともっと大変な事になるって言えば大体やるって言うに決まってるだろ！！それより「死ぬとは思わなかった」って言うてんのはどうすんだって聞いてんだよ！！？おお！！？」

『えっと…、麻酔にかかりやすい体質だったっていうのを説明して…』

院長「だからそんなの記憶にねえって言われるだけだ！！ボケ！！とりあえず手術代を無料にして謝るしかねえだろが！！お前が出る」とまたややこしくなるからオレが説明してくるわ！！当然、給料から引いとくからな！！ホントに手間ばっかかけさせやがって！！このカスが！！」

『……。』

「手術への不安」といえば、同じような場面を何かの医療漫画で見たことがあったが、漫画の主人公は成功率が非常に低い手術なのはつきりと「大丈夫です。手術はきつと成功させてみせます。」と言っていた。

そして「リスクをしつかり説明するのは確かに重要だが、患者さん

の不安を取り除いて手術に望んでもらうことが一番大切なんだ。」
とも言っていた。

そして、その患者の不安は主人公への信頼で掻き消え、それが功を奏して手術は成功する。

僕もそれを思い出して『大丈夫。安心してください。』と言ったのだが、やはり僕は主人公の器ではないらしい。

漫画の主人公は不可能と言われている手術でもまず成功させてしまうので、どんな綺麗事でも言えるのだが、現実ではそうは問屋が卸さない。

オーナーにリスクをしっかりと理解してもらう事も、オーナーとの信頼関係を簡単に築く事も、手術を確実に成功させる事も、たとえ手術が失敗したとしてもオーナーに納得してもらって万事解決する事も、全てが思ったよりもずっと難しいのだ。

現実的には院長の言う通り、最悪のパターンを伝えるだけにしておいた方が遥かに効率的で訴訟リスクも少ないのだ。

それを理解できずに漫画と現実を混同し、名医にでもなった気分が気軽に『大丈夫』と言った愚か者は、全てが上手くいく夢を見ているのかもしれない。

《ところがどっこい…… 夢じゃありません……！！ 現実です……！！！！これが現実……！！》

綺麗事や奇跡ばかりの漫画など、もう信じない。

話を元に戻すが、動物病院もビジネスなので、通常は手術の成否に関わらず手術代を徴収する。

しかし、今回はこちらの説明に落ち度があったという事で治療費は請求しないことになった。

そして、その「病院の受けた損害」は当然、オーナー価格で僕の給料から天引きされる。

だが、今回は院長も未熟者に説明を任せてしまったという責任を負って、半額は病院が負担するとの事だった。

一見、明日にでも地球が滅亡しそうなくらい珍しい寛容な態度に見えるが、オーナー価格ということは麻酔代や機材使用費も原価の数倍は取られるので半額でもお釣りが来るし、何よりも不思議なのは技術料まで取られている事だ。

執刀したのはもちろん僕なのだが、何故かこの技術料も半額分は病院に“賠償”することになる。

確かに、院長の指示の下で「この病院流」の術式を行ったので病院に還元されるべきものなのかもしれないが、元々タダみたいなものを平然と徴収できる神経が分からない。

まあ、簡単な手術だったので元の手術代が安く、さらにその半額なので2万円くらい引かれるだけで済んだが、結局は儲かっているくせに恩着せがましく「半分は病院が負担しました。」などと言って寛大なつもりでいるこの“生ゴミ”とは、もう信頼関係は築けない。もうどんな気遣いをされても恩など感じない。

僕は世間を知らず、恩を知らず、我慢を知らず、権利主張だけはしつかりする最低の典型的な「最近の若者」だろうか？

だが、こんな“生ゴミ”を師匠として尊敬しなければいけないなら、僕は「最低」で一向に構わない。

この頃にはもはや、世間の評価や体裁を気にする余裕は失せている。

訴訟問題

ちなみに、訴訟問題に関して言わせてもらえば、オーナー側が悪い面もある。

確かに、動物だからといって患畜をずさんに扱っている動物病院もあり、そういう所は訴えられてしかるべきであろう。

しかし、多くの動物病院は動物医療に真摯に向き合っているはずで、ミスをわざと起こしているわけでもないし、十分注意もしている。そういう状況でも、やはり人間のやる事なのでミスは起こってしまうのだ。

獣医師も、我が子も同然のペットをもつと深く注意していれば避けられたミスで失うというオーナーの悲しみは分かっているはずだ。

「何故、家の子だけが…」と言って泣き崩れられるオーナーを見ると、誰でも申し訳ない気持ちになるだろう。

真面目な獣医師なら、もう二度としないよう気を付けるに違いない。しかし、我が子を失った悲しみで我を忘れて怒り狂う一部のオーナーにとっては、そんな獣医師の反省の気持ちなど知った事ではないようなのだ。

そう、訴訟で解決しようとするのである。

ひとたび訴訟が起こると、病院は深刻なダメージを受ける。

病院のイメージが圧倒的に悪くなり、新規はもちろん常連のオーナーまで来なくなる場合があるからだ。

本当に悪い事をしていた病院にとっては自業自得で良いお灸になるが、誠実にやっていた病院には災難以外の何物でもないだろう。

そんな大事件に発展する訴訟を軽い気持ちで起こされては堪らないのだ。

本当に辛くて訴訟しか考えられないならともかく、ちょっと納得がいかない点があるからと言って気軽に起こされては困るのだ。

今、訴訟を考えているオーナーの方は、一度、冷静になって考えて

ほしい。

本当にその動物病院は潰してやりたいほど酷い事をしたのか？

獣医師は反省した態度も見せず、今後も同じような事故を起こしそうなのか？

怒りに任せてとにかく誰かを傷つけないだけではないのか？

冷静に考え、相手の獣医師の人生が滅茶苦茶になる事も考慮に入れて、それでも他の手段が思い付かないなら、もはや避けては通れないのだろう。

訴訟を起こしてスッキリするべきだ。

また、オーナーの中には人と同じレベルの医療を要求してくるくせに、治療費や手術代だけは動物並みが当たり前であり、人並みの高額医療費などもつての外という人が居る。

予防にお金をかけなかったくせに、病気になってから病院に連れてきては治して当然のように振舞う人が居る。

そして、そういうオーナーは大抵“生ゴミ”の言う通り、自分に都合の良い話しか覚えていないのだ。

こういう傍若無人なオーナーも、深慮せずに訴訟を起こしやすい要注意人物である。

ここまで酷くなくても、「治って当たり前と思っていなかったか？」、「説明はちゃんと聞いていたか？」、「獣医師に期待し過ぎていなかったか？」…。

訴える前にもう一度、自分自身の行動もじっくりと思い返してみてほしい。

あまりにも簡単に訴訟を起こされると、獣医師側としては訴訟を避けるため、ミスをするような危険を冒さない…、つまり厄介そうな治療に関わらないのが一番という結論に達してしまうのだ。

そんな事態になったら、獣医師もオーナーも患畜も、誰も得をしないだろうから…。

…こんなオーナー批判のような内容は、獣医療に携わる人間が本来書いてはいけない事だが、僕はもう臨床獣医師ではないので、あくまで問題提起として書かせてもらった。
何かの議論の参考にしていただければ幸いだ。

正論

本題に戻ろう。

先輩の代わりという事なら”生ゴミ”の機嫌取りもしなければいけないが、僕は世渡りやお世辞が苦手で上手くできなかったので”生ゴミ”の機嫌が悪い日が続いた。

当然、機嫌が悪い日は怒鳴りやすいので要注意なのだが、最上級に機嫌が悪い時は怒鳴りやすい上に必要以上にしつこく間違いを追求されるので精神の消耗が激しい。

以下はそのやりとりの一例だ。

“生ゴミ”「おい、何だこのカルテ。この検査は何の病気を疑ってやるつもりなんだ？」

「えつと…、○○と□□です。」

“生ゴミ”「なるほどな！！じゃあ××の可能性は無いわけだ！！検査もしないでそれが分かるなんて先生すげえな！！たいしたものだ！！」

「あつ…、いや…。……その可能性もあります…。」

“生ゴミ”「はあ！？『あつ』じゃねえよ！！『あつ』じゃ！！もつと深く考えて検査しろっていつも言ってるだろ！！バカ！！何回同じ事言わせりや気が済むんだ！？この能無しが！！」

「…すいません。」

××の可能性に気付いてないと分かっている質問してくるところや、最初に褒めてくるあたりが相変わらずいやらしい感じだが、いつもはここでどこかに行くので大して問題とはならない。

最上級の場合はここからが本領発揮だ。

“生ゴミ”「謝れって言うてんじゃねえんだよ！！何回言ったら覚

えんのかって聞いてんだ！！ボケ！！おお！？

『はい…、あの……。』

“生ゴミ” 「な・ん・か・い・言・っ・た・ら・お・ぼ・え・んだ！？」

『…1回で十分です…。』

“生ゴミ” 「できてねえじゃねえか！！タコ！！2、3回は言ってるわ！！ああ！？何回なんだよ！？」

『…3回で十分です…。』

“生ゴミ” 「3回も同じこと注意しなきゃいけないのかよ！？めんどくせえ奴だな！！この頭、ちゃんと脳ミソ入ってんのか！？そもそも患畜の事を真剣に考えて治療しようと思ってたら、こんな事にはならねえよ！！××は大した病気じゃないってか！？病気にしかかっても大丈夫ですってか！？ああ！？」

『いえ…、。○と□がよくある病気なんで、××の可能性までは考えが回らなくて…。』

“生ゴミ” 「言い訳すんなよ！！よくある病気とかじゃなくて、可能性と重症度で考えろよ！！万が一××だった場合は早めに対処せんといかんだろが！！ボケ！！」

『はい……、あの……。』

“生ゴミ” 「違っかって言ってたんだ！？ああ！？下向いたままボソボソ喋りやがって、ちゃんとオレの話聞いとんのか！？コラ！？オレ、何か間違っただこと言ってるか！？なあ！？」

『……。』

“生ゴミ” 「なあ！！なあって！！返事しろ！！都合悪けりや無視すんのか！？いいご身分だな、おい！！ボサツと突っ立ってないで早くオーナーに説明して検査しに行けよ！！グズが！！」

この間、カルテで頭をペシペシ叩かれたり、胸を小突かれたり、足をコンコン蹴られたりして、ちよつとあざができる程度の軽い暴行を受けていたとかそんなのは些細な事なのでどうでもいい。

問題なのは、“生ゴミ”の気が済むまでこの答えの無い答え合わせが終わらない事と診療待ちのオーナーがどんどん溜まっていく事だ。ここまで機嫌が悪い時は大抵、嫁とケンカしている時だが、家庭の事情を仕事に持ち込んで八つ当たりしやがるとは見下げ果てた奴だ。憂さ晴らしで一つのミスをいつまでもゴチャゴチャ言われたのでは堪らない。

しかも、診察終了後にクールダウンし、言い過ぎたと反省してフオーを入れてくることもあるが、その内容がまたイラつかせてくれる。

“生ゴミ”「いや、ホントにね、厳しい事言ってるのは分かってるんですよ。先生はまだ経験が浅いし、僕みたいにはできないのは分かっているんです。でもオーナーは同じ金額を払うわけだし、ベテランでも大学卒業したてでも獣医さんは獣医さんなんです。経験なんて話はこっちの事情ですから、その部分でオーナーに損をさせるわけにはいかないんですよ。だから、先生ならきつとそこそこできるようになると信じてるんで、これから僕と同じレベルの医療を求めていくつもりです。頑張っけて付いてきて下さいね。ハハハハハ

ー

正論だ。

さりげなく自分が上という自己顕示が入ってはいるが、言っている内容は全くもって正しい。

ただし、正論を言うことがいつも正しいとは限らない。

時間と場所と場合を考える必要があるし、正論を無視して柔軟に対応しないと状況が悪化するケースもある。

正論を述べる人間はいつもそうだが、正論を言っている自分は正しいと信じて疑わず、正論を展開する事がこの世における最善の行為であり、秩序を無視する外道たちの邪論に正論で立ち向かう自分はまるで聖人であるかのような錯覚に陥っている。

彼らはしばしば正論を振りかざしては我を押し通し、場の雰囲気を打ち砕き、周囲の空気の澱みに目もくれない暴挙に打って出るのだ。しかし、人間社会とは他者との関係をメインに成り立っているため、その間に漂う微妙な空気を感知し、相手を思いやり、時には自分の正論を胸にしまつてでも周囲との和を保つ必要がある。

それができないこの“真面目で正しい”社会不適合者予備軍は、周囲の人間が事態を収拾するために折れる事によって社会の中で何とかやっていけるのだ。

日々、そんな厄介者と接さなければならぬ周囲の人間は人一倍精神を摩耗している事だろう。

彼らは周囲の人間に見放された時、自分が社会不適合者になるとは露知らず、今日もせっせと周囲の人間を苛んでいるのだろう。

そして、我が病院のキングオブ社会不適合者が何よりもただけな点は、自分の悪事を正当化させるために正論を利用してという事だ。

この“生ゴミ”は個人的なイラつきを、その原因とは無関係で立場が弱く反論の余地の無い人間に当たって解消するという行為を、正論を言うことで正当化しようとしているのだ。

反論させずに自分の意見を押し付ける上、己の悪事まで正当化しようとするとは何事か。

しかし、信じられない事だがこれにより、彼はいつも自分は正しく、悪い事をしているとはまったく思わず、人に嫌われたりするわけが無いと確信している。

「オレ、何か間違ったこと言ってるか？」はそれを象徴する“生ゴミ”の口癖の一つである。

間違った事は言っていないかもしれないが、間違った事を行っているのだ。

拳句の果てに、穏やかな口調で丁寧語を使って喋る事により、温かな人物を装っているつもりらしいが、どういう神経をしていたらこれほど短気な人間が温和なつもりでいられるのだろうか。

『驚くほど短気な人格破綻者のくせに、自分はいつも清く正しい温和な院長であると思いつ込んでいるこの厚かましいまでの倒錯ぶりが異常にイラつくのは僕だけか?』と思っていたら他の従業員も皆そう思っていたらしい。

裸の王様とはまさに“生ゴミ”のためにあるような言葉だ。

週休2日

先輩が病院を去った事による害はまだある。

休診日の急患対応は“生ゴミ”以外の獣医師がやることになっているが、その獣医師が1人の場合はどうなるのか？

当然、1人で全ての日を担当しなければならない。

急患対応日は自宅待機であるために遠出もできないし、そこそこ急患が来るし、来なくてもいつ呼び出されるかという恐怖に震えながら一日を過ごすのでとてもゆっくり休めるものではない。

しかも、これも当然の事だが、休診日は今まで通り“生ゴミ”に話しかける事すら禁止な上、翌日には診療の不手際を容赦無く責めてくるので、もうどうしようもない。

つまり、休診日はもはや僕にとつては休日ではなくなったというわけだ。

これで、お盆休みも台無しだ。

“生ゴミ”から何かしらの配慮があるはずも無く、むしろ「大変だね〜。頑張つてね。」というイラつかせる事が目的としか思えないような表面的な応援をしてくるだけ。

助けてくれないならせめて、人を不愉快にさせるような言動だけでも憤んでほしいものだ。

人を不快にさせるだけで何の役にも立たないなど生ゴミ以下、まさに汚物ではないか。

ただ、不幸中の幸いなのが、超繁忙期を過ぎたということで僕にも従業員が交代で休む“週2日目の休日”が与えられた事だ。

かくして、週休2日のはずなのに休めるのは週1日という世にも奇妙な勤務生活が始まった…。

とはいえ、今までは週休1日でそのうち2回に1回は急患対応がまわって来ていたため、週休0.5日みたいなものだったので、それに比べると休日は増えた事になる。

良いんだか、悪いんだか。

見た目は大人 頭は子供

そんなこんなで、先輩が辞めてからあつという間に1か月ちよつとが過ぎた。

先輩が辞めた分、信じられないぐらい仕事量が増えたが、僕にはまだ余裕がある！！

なぜなら同期の新人看護師がまだ1人残っており、増えた雑用も誰でもできるような仕事は任せられるので、まだ負担が軽いからだ！！と油断していたら、さらなる非情の鉄槌が我が身に振り下ろされることになる。

そう、このもう1人の新人看護師が辞めると言い出したのだ。

思い返せば、先輩が辞めた頃からしんどそうにしている回数が増えていた気もするので、予兆はあった。

僕も診療方面で忙しくなった分、雑用を押し付け過ぎたかもしれないという申し訳なく思う気持ちが進み上げてくる。

“汚物”に直接申し出るとは何とも勇気のあることだが、それだけ限界だったのだろう。

「なぜ？」という問いは、もはや愚問であろう。

だが、その原因である張本人はやはり愚かなようで、この質問を本人にぶつけ始める。

“汚物”「はあ？何で？せっかく色んな仕事もできるようになってきたのにもったいない。仕事が楽しくなるのはこれからだぞ？まさか誰かにいじめられてるとかか？君たちも何とか言ってやってよ。」

今まで散々「仕事ができん奴だ！！」とか「役に立たん！！」とか怒鳴っておいて、こういう時だけ「仕事ができる」はないだろう。それとも、この“汚物”の言う「仕事」とは、「昼の休診時間に真夏の炎天下で小一時間ほど病院の周りの雑草をひたすら耄らせる」

という憂さ晴らしのために申し付けたであろう苦行のことを指しているのだろうか？

それならば、確かに納得だ。

あれは本当によくやったと思う。

脱水症状や熱射病にもならず、無事に戻ってきて笑顔で元気良く「終わりました！」と言ったのを見た時には、思わず涙しそうなくらい感動したものだ。

思い付きの憂さ晴らしで言いつけられ、命に危険が及んでもおかしくないような嫌がらせを乗り越えてなお笑顔でいる事など、僕には絶対にできない。

そんな純真で元気いっぱいだった娘が…、今や……。

それにしても、説得が怖いくらいに下手。

最初にこの説得を聞いていてあまり引き止めるつもりも無いのかと思っていたら、後から聞いた話ではこれで精一杯優しく説得してたんですと……！

あと…、「誰か」じゃなくて「お前」だよ、いじめてたのは……！

早く気付け……！

最終的には周りの従業員に頼ってるし……。

この頃から何となく気付いたが、この「汚物」は基本的に精神年齢やコミュニケーション能力が小学校ぐらいで止まっているのだと思う。

自分がいつも一番でなければ気が済まず、気に入らない事があったり自分の思い通りに事が進まなければ怒鳴り散らし、手に負えない事態になれば逃げる。

どうやら「汚物」は、彼の自慢話から推察するに、学生時代から人付き合いが苦手であり人と接してこなかった上に、研修期間も優しい院長の下で伸び伸びと修行したらしい。

そして動物病院の院長になり、外界から半分隔離された職場で他人と接する機会がますます減り、その職場では自分より上の立場の人間が居ないため、挫折や他者との衝突を糧とした精神的成熟やコミ

ユニケーション能力アップの機会がほとんどなかったのてこうなつてしまったようだ。

他人事なら「可哀相な人」で済ませられるが、こっちは被害者なのでそんな温かい目で見守ったりはできない。

はつきり言つて、こんな精神的に未熟な輩は人の上に立つ資格など無いだろう。

もつとも、かく言う僕も人の上に立てるような人格者ではないのでこの”汚物”を反面教師として精進したいと思う。

反面教師という点においては、この”汚物”は非常に優秀な教材となるのだ。

ともかく、新人看護師は「家庭の都合」で退職すると言っていたが、その疲弊しきつた死人のような顔を見れば、本当の理由は本人の健康上の都合だということがよく分かった。

今頃はまた昔のように元気を取り戻していると良いのだが…。

（これで残った新人は僕だけ。こうなつたらもうヤケクソだ！！やれる所までやってやる！！）

朝の準備

こうして凍えるような恐怖の夏も終わり、現在の我が病院における
”汚物”以外の従業員は獣医師が1人、動物看護師が4名。

おお！！僕が見学に来た頃の人数に戻った！！

違うのは獣医師が先輩から僕に、そして病院の主が「院長」から「
汚物」に変わった事くらいだ。

この病院はこれが一番バランスの良い従業員数なのかというと、そ
んなわけではない。

日々の作業量の多さは微塵もその通りだと思わせてくれないのだ。
さすがにこれだけ人手が減ると、先輩看護師たちもサボってばかり
はいられないので雑用も色々とやってくれるようになったが、それ
でも手の届かない部分がどうしても出てくる。

特に朝はやる事が盛りだくさんで、診察開始前の15分程度で全面
ガラス張りの病院入り口の指紋だの汚れだの水コリだのを全て拭き
取り、オーナー用の駐車場をゴミ一つ残らず掃き回し、診察室の掃
除や整理整頓を済ませ、入院患者の身体検査を一通り行い、薬や治
療器具の注文を終わらせなくてはならないので、独りでは到底不可
能な作業量なのだ。

看護師たちも、動作が今一つ緩慢なのが気になるが、トリミングの
準備や受付、待合室、入院畜舎の掃除と整理整頓、スケジュールの
チェックなど、それなりにやる事があって忙しそうなので手伝いを
頼めるような雰囲気ではない。

しかも、オーナーが来てない時や診療が途切れた時は、暇を持て余
した”汚物”が観葉植物の陰になっている部分などの細かい箇所の
汚れを探したり、院内や駐車場をじっくり見回って掃除の不十分な
箇所を見つけては怒鳴るので、少したりとも手が抜けないのだ。

とはいっても、時間も人手も無いんだからできないものはしょうが
ない。

怒鳴られるのを覚悟で細かい部分を諦め、あとは”汚物”の機嫌が悪くない事を祈るのみ！！

そして、さらに困るのは、診察開始前からオーナーが診療を待っているパターンで、その場合はある程度の準備ができ次第、すぐに病院に入ってもらって診察を始めなくてはいけないので、てんてこ舞となる。

そんな朝を迎えて診察開始時刻もとうに過ぎた忙しい最中、のろのろとしたダルそうな動作で大きなあくびをしながら2階からゆっくり下りてきた”汚物”は、検査などであたふたしている従業員を見回して言う。

“汚物”「おい！！お前ら、挨拶も無しかよ！！」

（挨拶してほしいなら、せめて診察開始前に下りて来い！！）

朝の準備も手伝わず、診察開始時刻にも下りて来ず、やっと面倒くさそうに下りてきたと思ったら忙しく働いている人間に向かっていきなり怒鳴りながら挨拶を要求する。

これが良識のある人間のする事だろうか？

ましてやコイツは、従業員の手本となるべき病院の長である。

相手は上司だし、世間ではこれが当たり前という事ならもはや何も言わないが、少なくともこんな対応をするような奴を尊敬しようとは思わない。

そして、案の定、診療が落ち着いてちよつと時間ができた時に病院内を見回し、入院患者のカルテを見ていた”汚物”が突然こっちに向かってくる。

もちろん、キレている。

“汚物”「おい、入院中の。。。ちゃんの今日の体温書いてねえけど、当然測ってるんだよね！？」

『元気そうだったし、他の準備があつたので測つてません。』

“汚物” 「はあ！？お前、ふざけんなよ！！1年目のくせに何、手え抜いてんだ！！ボケ！！体温なんて基本中の基本じゃねえか！！元気そうでも測るだろ、普通！！頭おかしいんか！？」

『体温を測つてると朝の掃除がとて間に合わないので無理です。』

“汚物” 「看護師がいっぱい居るだろ！！掃除ぐらい頼めよ！！アホウが！！」

『他の人たちも忙しそうで、とても頼めません。』

“汚物” 「何、口答えしてんだ！！ボケ！！やる気か！？ああ！？人に頼めんのだったら、お前がささとやればいいじゃねえか！！コラ！？」

『ささつとやったら、汚れが残つて院長に怒られるのでできません。』

『“汚物” 「オレのせいだよ！？舐めた事ぬかしやがつて！！このクソが！！じゃあ、お望み通り、じっくり掃除させてやるよ！！おまえの出勤時間は明日から8時だからな！！遅れやがったら承知せんぞ！！」』

ちよつと反抗してみたが、だんだん手や足が出るようになってきて、しまいには報復として出勤時間を30分早められたので、もうギブアップ。

「出勤が30分早くなつたぐらいどうって事ないじゃん。」と思つた方は大間違い。

我が病院は、診察開始の15分前くらいにならないとドアの鍵を開けてくれない。

診察開始は9時、元々の出勤時間は8時半。

普段から15分くらい締め出しを喰らつていて病院周囲の点検やゴミ拾いをさせられているが、それが30分伸びたところで院内に入れなければ出来る事はほとんど変わらない。

反抗した報復として、ただ無駄に勤務時間が増やされただけなのだ。

翌日、もしかしたら鍵を開けてくれているかもいうと淡い期待を抱きつつ病院に到着したが、ドアは非情にもガチャガチャと音を立てるだけで開きはしない。

その代わり、ほうきとちりとり、雑巾とバケツが外に出してある。なるほど、駐車場の掃除と外の窓拭きでもしてろって事か。

診察開始前の15分間の忙しさは、駐車場の掃除と外の窓拭きが無くなったくらいでは大して変わらないが、ドアが開かない以上は他にできる事も無いので、とりあえず掃除と窓拭きをやっておく。

頃は風も寒くなり始めた秋の初め。

2階の暖かい部屋で黙々と朝食を食べながら高みの見物を決めこんでいる”汚物”の視線を感じつつ、かじかむ手を時折温めながら寒風吹きすさぶ屋外でただ独り、掃除と窓拭きをドアが開くまで続ける。

こんな日がこれから毎日続くのかを思うと、孤独感のせいかやたらと風を寒く感じる。

秋浅き 2階は何を する人ぞ

学会

10月や11月には、勉強の秋という事もあってか、大きな学術発表会が開かれることが多い。

臨床獣医師の業界でも、全国区の獣医師が集まる発表会が開かれたりするが、見栄を張るのが大好きな”汚物”は当然、その発表会でも発表する。

去年から1年間、地域の勉強会に出してきた中でもとっておきの演題を発表するのだ。（応募すれば大抵誰でも発表できるので、全然凄い事ではないが。）

もちろん、申し込みをしたり、発表会委員と連絡を取ったり、発表内容をまとめたりするのは僕だ。

普段は不要な雑務が増えたり、地域の勉強会以上に細かい点を指摘をされて訂正を重ねるので、他の仕事がどんどん溜まっていくのは言うまでもなく、発表会後が思いやられる。

発表内容はというと”汚物”の得意分野の症例紹介なのだが、専門用語のオンパレードで何が何だかよく分からない内容となっている。それもそのはず、この「専門用語」は人の医療ではそこそこ使われており、獣医療でもこの分野を得意とする人間は知っているが、特にその分野に興味があるわけでもない獣医師にとっては全く馴染みがない言葉が多いのだ。

何故そんな獣医療では一般的でない言葉を使いたがるのかといえば恐らく、その分野特有の言葉を使うことで”汚物”がその分野に精通しているかのような錯覚に陥れるからであろう。

しかし、その分野だけの発表会ならともかく、全般的な発表会でそんなちんぷんかんぷんな発表をするとは独りよがりにも程がある。

以前、僕の一般的な専門用語を聞いて「難しい専門用語で誤魔化すな。」と言っていた人間が、自分の得意分野においてのみ、あまり一般的ではない専門用語をさも当然のように使い、分からなかった

場合には「何でそんな事も知らんのだ！！このモグリが！！」と怒鳴ってくる、もう呆れて矛盾を指摘する気も起こらなくなる。

発表会の意義は、表向きは現在行っている方法が正しいかどうかの検討や個人の有益な知識を他の仲間にも伝えて、その業界をより発展させようという意味合いがあるが、所詮は発表者の名誉欲や自己満足を満たすための機会として利用される事が多い。

“汚物”もその流れに従って自己満足の知識を披露しているだけなので、この件に関しては”汚物”だけが悪いというわけでもないが、普段の診療で忙しい人間を巻き込まないでほしいものだ。

そして発表会の日。

僕も「勉強のため」という理由で強制的に参加させられたが、ずっと“汚物”の荷物持ちなため、自分が見たい発表は見られないので勉強も何もあつたものではない。

そしてもちろん、病院は臨時休診なわけで、自己満足の発表のために病院を休みにするコイツが「病気は平日休日関係なくやってくるから。」とか語るとは…（以下略）。

また、獣医師の世界は狭いので、大きな発表会では昔の知り合いに思いがけず会ったりもする。

”汚物”も研修時代の仲間に出会ったようだ。

“汚物”は、病院外では善人を装うので物腰も柔らかで話し方も丁寧、一見、和やかに会話が交わされているように見える。

しかし、話はすぐに途切れ途切れになり、相手も視線を伏せがちであまり発言せず、数分もしないうちに別れていく。

相手も寡黙な人なのかと思っていたら、その後別の人とは楽しそうに会話していた。

やはり、一緒に働いたり過ごしたりするとどんなに隠しても本性がバレてしまうようで、”汚物”は昔の同僚にもあまり好かれてはいないようだ。

他にも、普通は学会や勉強会を通して知り合った他の獣医師と話し

たりもするものだが、それ以降の“汚物”は人と話すこともほとんど無く、休憩時間なども周りの人々が談笑している中で独りだけぽつんとイスに座って資料に目を通していただけなので、周囲の雰囲気から完全に浮いてしまっている。

コイツには知り合いや友達が少ないという事が改めて確認できた。

この“汚物”に嫌悪感を抱く僕は正常という事が証明されて嬉しいのだが、こんな奴でも相性が良い人間は居るようで、昼食時に“研修時代の戦友（笑）”とやらと3人で食事をする事になった。

この“戦友（笑）”がまた、小物の雰囲気を漂わせるテンションが高めなお調子者のデブという感じで、何処となく“汚物”と通じるものがあり、嫌悪感を抱かせてくれる。

まるで「ジュラシック・パーク」に出ていたネドリー（恐竜の胚を横領しようとしたシステムエンジニア）みたいな感じの奴で、コイツとも一緒には働けなさそうだ。

最初の紹介では、何故か僕が「1年目だが、副院長」と紹介される。確かに、現在の病院内では院長の他に獣医師は僕だけなのでそれはそうかもしれないが、普段は散々、「獣医じゃない。」とか「頼りにならない。」とか言ってくるくせに、こういう時だけ思ってもいなくせに「副院長」と紹介されるのは冗談でも気に食わない。

面白い事を言っているつもりなのか？

ハイテンションデブも「もう副院長！？すごいねえ！！グププ！！」

とか言つて、つまねえ事で気持ち悪く笑ってんじゃねえ！！

どうせ1年目では「副院長」なんて扱いをされるわけねえって分かってんだろ！？

その後も、食事をしながらこの“汚物”同士は全然不幸に思えない不幸自慢や明らかに誇大表現をした苦勞話を楽しそうに語り、「自分の方がより大変な状況で頑張っているアピール」をしていたが、その話の中で特に気になった言葉が「研修医に人権は無い」だ。

“汚物” A「僕らの研修時代は給料も安くて、朝から晩まで扱き使

われて、怒られてばかりで……。大変でしたよね？今の人たちは、給料はたくさん貰えるし、丁寧に教えてもらえるし、技術も進歩しているし、勉強の機会も多いし、ホントに恵まれてて幸せ者です。そんな状況を作った我々に、もっと感謝してくれてもいいんですよ？」

“汚物” B「そうだそうだあ！！（笑） 昔より働きやすい環境なんだし、使えないんだからその分もっと頑張つて働けえ！！（笑）」

研修医に人権は無い！！（笑） グププ！！」

“汚物” A「そうそう。もっと言ってやって下さいよ。この子は全然成長しない上に反抗ばかりするんですよ。ハハハハハ。」

「ハ…… ハハ…… ハハハ……」

なるほど、人権が無いという事なら今までの扱いも納得できるものばかりだ。

人権の無い労働者という事は、僕はさしずめ「奴隷」といったところか。

これも冗談で言ったんだろうが、普段の扱いと照らし合わせると冗談には聞こえない。

また、「給料が安く」「朝から晩まで働き」「怒られてばかり」で昔の研修時代は大変だったという事だが、少なくとも我が病院では今でも同じ状況である。

しかも、技術の進歩は確かにそうかもしれないが（というより、技術の進歩に”汚物”は関係していかないのでは？）、丁寧に教えてもらった記憶も勉強の機会をたくさん与えてもらった記憶も無い。

むしろ、嫌味を言われたり、憂さ晴らしの嫌がらせを受けたり、搾取をされたりしてマイナス要素が加わっているので、どう考えれば「恵まれてて幸せ」などと言えるのか全く分からない。

ともかく、「人権が無い」という事なら人のために作られた法律の制約も受けないと思うので、それを認めている”汚物”は、「何をされても法的手段に訴える事はできない」という事も認めているわ

けだ。（昔なら奴隷を物扱いするようなひどい法律があったみたいだが、今は無いみたいだし。）

もう後先考えなくても良くなる“お礼参り”の時にやってみたい報復は色々と思いつくので、その時が今から楽しみだ。

復讐ノートにしっかりメモしておこう。

ちなみに、発表会に参加すると大抵は資料代や参加費で万単位のお金が必要となってくるが、我が病院は強制参加のくせにそれらの費用は当然全額自腹である。

理由はもちろん「お前の勉強のためだから」。

アンタはそれしか言えんのか！？

こうして秋が徐々に深まっていく中、すでに埋まりようもないほど深くなった”汚物”と僕との間の溝もさらに深まっていくのだった。

ヒロ

そして12月。

世間がボーナスやら忘年会やらクリスマスやら冬休みやらで浮かれ気分の中、我が病院では普通にいつも通りの毎日が繰り返される。

“汚物”は、年末年始の海外旅行のためになるべく多くの金を稼ぎたいのか、いつになく張りきっていて、やたらと手術や入院を入れてくる。

もちろん、僕でも対応できるような軽症患畜だけをしっかりと選別して、“汚物”の手間は増やさずに、である。

我が病院では、「師走」であろうと師匠は走らないのだ。

その分こっちは異常に仕事が増えて、いつか過労死するんじゃないだろうかと不安になる程だが、使い捨ての「奴隷」が過労死したところですぐに替えが用意できるとでも思っているのか、“汚物”からの何らかの配慮は相変わらず無い。

仕方がないので、怒鳴られるのは覚悟の上で、後でもできる仕事を後回しにして何とか遣り繰りするが、やっぱり予想していたところで怒鳴られる。

怒鳴られるポイントをある程度予想できるようになったのは良いが、回避しようがないので余計にストレスが溜まる。

そんな忙しさやストレスのため、僕には恋人など作る余裕はないし、できたとしても遊ぶ余裕もないのでやがては心がすれ違い、結局辿り着く先は同じだろう。

もちろん、12月だけでなく他の月でも忙しさやストレスは大変なもの、易々と恋人を作れるような環境ではないのだ。

一番最近、恋愛感情に近いものを感じたのは夏の炎天下草率い事件の時の新人看護師に対してであるが、その方向へ続く道は前述の通り、すでに絶たれている。

そんな状況下にもかかわらず、“汚物”は僕も含めた恋人のいない

従業員に新しく恋人がでやしないかと常に心配している。

さらに、恋人がいる従業員に対しては続いているかどうかを頻繁に聞いてくる。

何故か。

それは昔、「恋人が他の土地へ引越すので自分もついて行く。」

とか「恋人と会える時間が少ないのが耐えられない。」とか「結婚するから。」とかの理由で辞める人が結構いたらしい。

さらに、院内の看護師と付き合うことになり、看護師が辞める時に一緒に辞めて他の病院に移ってしまった先生もいたようだ。

その結果、“汚物”の中では「恋人がいる」「早く辞める」という公式が出来上がっているらしく、事あるごとに恋人の有無をチェックしたり、獣医師と看護師との仲が進展しないように干渉したりしてきては、それとなく辞めないようにほめかしてくるのだ。

特に5月の連休や、6月、12月、3月の終わりは仕事に一区切りがついて辞めやすい時期なので、チェックが一段と厳しくなってくる。

だが、よく考えてみよう。

確かに「恋人」は辞める原因の一つになるかもしれないが、他の原因は考慮に入れなくても良いのだろうか？

もっと大きな要因があるのではないだろうか？

そう…、答えは分かりきっているのだ…。

周りの全員がその原因に気付いているのに、何故本人だけが想像だにしないのだろうか…。

また、恋人確認のやり取りもなかなか笑わせてくれる。

“汚物”「。。。さん。そのアクセサリー、かわいいね。彼氏からのプレゼント？」

看護師「あ、はい、そうなんですよ。」

“汚物”「てことは、彼氏いるんだね。僕の話術に嵌まってうっかり喋っちゃったねえ？僕、こういう事をさりげなく聞くのが得意な

んですよ。だから、何でもお見通しです。」

看護師「アハハ…（苦笑）。」

“汚物”「あ、でも、結婚とかはまだだよな？今の若い人は結婚とか彼氏の転職に付いて行くとかで辞めちゃう人が多くてさ。契約の途中で辞められると困るんだよね。〇〇さんは大丈夫だよな？」

（だから辞める原因はお前だって！！恋人とかは口実だって！！何で分からない！？）

コイツの話を聞いていると「話術に嵌まる」とか「さりげない」とかの言葉の定義が分からなくなってくる。

世間一般において、この程度の「話術」は恋人確認の常套手段であり、聞かれた看護師も別に隠そうとしてはいないので正直に答えただけだと思うが、会話能力の低い“汚物”にとっては「デスノート」のＬとライト並みの高度な駆け引きをしたつもりにならなっているのだろう。

「何でもお見通し」とかほざいているが、周りの従業員は「彼氏がいる」と聞く以前から何となく気付いていたのに、「お見通し」「じやなかったのは“汚物”だけだ。

そもそも、新しいアクセサリを付けて来るとほぼ必ず前述の質問が来るので、全然さりげなくないし、嘘をつこうと思えばいくらでもつける。

事実、彼氏とのペアリングをネックレス状にして付けていた看護師に「これは親からのプレゼントです。彼から貰ったら左手の薬指に付けますよ。」と言われただけで、全く疑うこともなく「彼氏は居ない」とあっさり信じていたくらいなのだ。

引っ掛けとすら認識していない相手を引っ掛けたと言って独りで喜んだり、嘘にあっさり騙されたりしているコイツはまさにキングオブピエロ。

いや、「ピエロ」は固有名詞らしいから正しくはキングオブクラウンか。

いや、「キングオブクラウン」だとこの勘違い野郎は「王（冠）の中の王」と間違えて喜びそうだから、バカにする表現としてはやっぱりキングオブピエロが良いか。

会話能力が未熟な奴が相手だと、バカにするのにも一苦労だ。

こんなだからこの後、起こる事態も見通せないんだよ…。

「この後、起こる事態」…そう、彼氏のいる看護師が病院を辞めるという事態を…。

クリスマスプレゼント（笑）

年末。

疲労困憊の従業員とは対称的に、気持ちはずでに海外に行っていて上機嫌の”汚物”のもとに、浮かれ気分をぶち壊す素敵なクリスマスプレゼントが届けられる。

中堅看護師の1人が病院を辞めると言い出したのだ。

彼女は我が病院に勤めて4年目で、仕事もまあまあ頑張るし、周りの状況をしっかり判断して”汚物”だけは怒らさないように行動できる、この病院にしては優秀な人材だ。

彼女が辞めるとなれば、病院にとっては大きな痛手だろう。

彼女は面倒事を避けるため、”汚物”には彼氏がいることを隠しており、辞める理由は建前上は「親の体調が悪くなつて、しばらくは時間に融通の効く仕事に変えたいから」だが、本当の理由は同棲している彼氏が4月から転勤になるので、それに合わせて色々と準備をしたいからの事だ。

年が明けると3月末まで言い出しにくそうなので、一区切りのついた年末にと思ったそうだ。

「恋人がいる」早く辞める」とか、「12月の終わりは辞めやすい」とかが分かっている警戒している割には、まさにその条件で辞められるという空回りっぷりが何とも”汚物”らしくて面白い。

そして、これ以上従業員が減るとなると、もはや笑っていられる事態ではないのだが、普段はどつしりと構えた不遜な態度の”汚物”がこういう時だけは異様に焦る姿を見せてくれるので愉快痛快怪物君だ。

さすがはピエロ。

それではイッツショータイム。

“汚物”「えっ？えっ？辞める？契約終了まであと3か月あります

よ？その後も当然更新してもらえと思ったのに……。親御さんが大変なのは分かりますけど、責任は最後まで果たす……。それが仕事つてもんです。例えば午後だけとかで働けないのかな？いきなり辞めるって言われても準備に時間がかかるし、こんな時期に他に雇ってくれる所も無いでしょ？それとも何か不満があるとか？君たちも何とか言ってやってよ。」

いやー、動揺しているだけあって、今回もなかなかつつこみどころ満載ですね。

まず、特に書類等も無くて口約束だけだった上に諸条件を散々一方的に改悪している労働契約において、労働期間だけはしっかり守ってもらえると思っている事がすでにかなりおめでたいのに、「その後も当然更新」とかはもう空想の世界にでも行っちゃったのかと心配になってくる程の戯言だ。

こんな病院、契約更新してまで続けたがる奴の方が珍しいだろう。また、あざごときで職務放棄をしたような奴が仕事を語るのも愚の骨頂。

「責任」なんてどの口が語るのか。

さらに、「午後だけ」とか言っているが、その「午後」の労働がほぼ毎日日付の変わるまで続くので、結局親の看護はできなさそうで意味が無いし（嘘だから元々看護しないけど……）、「半日勤務だから給料は今の半額」とか言い出しかねないので、そんな怪しい申し出を易々と受けるような危機感の無い奴はこの病院には居ない。

「準備」とかも言っているが、いったい何の準備が必要なのか？

色々と手続きがあるのかも知れないが、恐らく「嫌がらせをする準備」がメインだと思うので、そんなのに時間をかける必要無し！！唯一、「1月頃に雇ってくれる所が無い」というのはまあまあ正しいかもしれないが、その後の「不満があるかどうか」とかは不満の原因の張本人が聞いちゃダメだろ。
で、最後にはお決まりの他力本願。

「何か言ってやって」って、嫌だよ。

言うとしたら「4年間、お疲れ様でした。」だけど、それだとアンタ怒るだろうが。

まあ、そんなつつこみどころより何より笑えるのは、恋人がいるという疑いを全く持っていない事だ。

指輪を大事そうに身に付けていたら、普通は怪しむところだろう。お笑い芸人の世界では「押すな」は“押せ”の意味だそうだが、この“汚物”が言っていた「何でもお見通し」とは“実際には何にも見通せてませんよ”を意味するというボケだったのか？

ボケで言っていたのだとしたら不覚にも少し笑ってしまったので、さすがはピエロと褒めておこう。

いずれにしても、この病院においては辞めると言い出した以上はすぐにでも辞めるのが最良の選択だが、優しい彼女は“汚物”の稚拙な説得工作でも同情や責任を感じてしまったようで、1月末までは今まで通り働くことになってしまった。

しかし、我が病院ではそんな慈悲の心を出そうものなら無惨にも仇で返される事となる。

翌日…。

（なんじゃ、こりゃああああ！！）

“汚物”が新しく作り直した1月の病院の予定表を見て驚いた。

間違いないく嫌がらせだろうが、休診日当番が全て彼女の担当になっている！！

“汚物”曰く、「もう辞めるって事なんで、辞めた後はゆっくりできるだろうし、最後の1か月はちよつと頑張ってもらう事にしました。」

個人分の休日に残されているため、週に1日は休めるようではあるが…。

「週休1日ならそんなにしんどい事はないじゃないか。」と言われ

ればそうかもしれないが、何よりも酷いのは辞める時期を説得で伸ばしておきながらこんな仕打ちをする事ではないだろうか？

ましてや、建前上は「親の看病をするために辞める」と言っているのに、その看病の時間を大幅に削るなど、人の心を持っているならばできるはずがない。

やはり、この「汚物」は人の心を持たない悪魔や鬼の類だったのだ。「汚物」が周りに居ない時に「これ…、酷いですよね？」と聞いてみたら、彼女は「いいの。何となく予想できてたから。それより意外とすんなり辞めれて良かったわあ（笑）。」と喜んでいた。すんなり…、かなあ？

彼女はこの病院の瘴気にすっかりやられてしまっているようだ。それにしても、何故こんな酷い仕打ちが平然とできるのだろう？「汚物」のことだから「契約終了前に辞めるんだから、その分働いてもらうのは当然。」とも思っているのだろうか？

法律上では、遅くとも辞める2週間前には退職の意思を申し出なければならぬそうだが、こんな嫌がらせを受けるなら絶対即日で辞めてやろうと決意した瞬間だった。

ちなみに、この予定変更によって彼女が頑張る分、他の看護師たちの1月の休診日当番は無くなったわけだが（僕はずっと急患当番だけどね！）、他の看護師たちもこんな風に仲間を犠牲にした形で休みが増えても嬉しくないだろう…、と思いきや普通に喜んでいた。《てめーらの血は何色だ！？》

ともかく、こうして爆弾処理を無事に（？）済ませた「汚物」は、従業員たちに病院を任せて何事もなかったかのように海外に旅立って行った。

そして、残された従業員は大晦日の夜までしっかりと働かされ、激動の一年間を頑張り抜いた事へのお互いの賞賛と、正月明けに突然の「裏切り行為」をしないよう念入りに牽制し合いつつ解散していった…。

1月1日

新年、元日。

さすがに我が病院といえども、今日は休みだ。

今日だけは休診日当番も急患対応も無い本当の休日で、他の従業員も皆ゆつくり過ごしているはずだ。

しかし、そんな最良の一日だというのに、僕は朝から最悪な気分である。

何故なら、初夢がいつも通りの夢だったからだ。

そう、いつも通りの「汚物」に怒鳴られる夢」である。

たまにならまだしも、ここ最近ほぼ毎日この夢を見ている気がする。

というか、それ以外の普通の夢をしばらく見た記憶が無い。

これは結構ヤバイ状態なんじゃないだろうか？

寝汗も尋常じゃないぐらいかいていて、枕や足元のあたりがびっしょりだ。

悲しい事があった時の表現で「涙で枕を濡らす」という言葉があるが、「寝汗で枕を濡らす」場合はどういった状況の表現となるのだろうか？

それにしても病院でならともかく、自宅で、しかも元旦くらいは「汚物」との係わり合いを避けたいところなのに、他人の夢にまで平然としゃしゃり出てきやがるとはホントに空気が読めない奴だ。

人を好きになった時は、夢の中でも会えると嬉しいのでその人の夢を見るというのは分かるが、嫌いな場合はどういう理屈でその人の夢を見てしまうのか？

しかも、自分の思い通りになるはずの夢でも怒鳴り散らされるなんてあんまりだ。

現実だけでなく、夢の中でまで嫌な思いをしてストレスを溜めては体に障るだろうに、どうして味方であるはずの我が脳髓はこんな夢

を見せるのか？

脳というものは実に不可解で神秘的な臓器である。

ちなみに、夏ごろに辞めた新人看護師も怒鳴られる夢をよく見ていたそうで、起きたら泣いていたという事がよくあったそうだ。

彼女は本当に「涙で枕を濡らして」いたのである。

この世には、夢の内容によつて精神状態を解析する「夢分析」なるものが存在するそうだが、我らの精神状態や如何に。

といつても、聞かなくても何となく結果は分かっているのだが…。

ともかく、子供の頃は初夢に縁起物が出てくるかどうかとか、どんな内容だったかとかで1年の良し悪しを占つて喜んでいたが、年を取ることにそんなものには関心を持てなくなっていた。

しかし、「今年だけは」とワラにもすがる思いで良い夢を期待して眠ったというのに、神様はやはり困った時だけ泣きついても救ってくれないようだ。

この世には神も仏もない事を再確認する。

どんどん気持ち荒んでいくなあ…、初夢で好きな子が出てきたら告白するとか思っていた時代が懐かしいわい…。

なに？

初夢は大晦日から元旦にかけて見る夢じゃなくて、元日から2日、または2日から3日にかけて見る夢だつて？

そんな違いは些細な事だよ。

逆に考えるんだ！！

「明日も明後日も同じ夢を見るんだから、どれにしたって同じ事さ」と考えるんだ！！

我ながら言っていて悲しくなる状況だが、とりあえず今年も最悪な一年になりそうだということだけは分かった。

初夢占いは結構当たるといふ事か…。

本当の地獄

新年は2日から早速仕事始め。

幸いな事に「裏切り者」は出なかったものの、人数が少ない事に変わりはない。

なお、“汚物”はまだ海外旅行から帰って来ていないが、最近は僕がそこそこ診療をできるようになったため、ヤツは難しい症例を除いたほとんどの診療をしなくなっていたので、いたとしても戦力には含まれない。

そして、今月末にはさらに従業員が減るのだ。

今の状態ですでに限界なのに、これ以上減ったらどうなるものか？
たいして期待もできないが、“汚物”が何らかの対策を立ててくれる事を願おう。

診療的には、この時期は寒くなって動物でも風邪や体調不良が増えるとか、いくつかの持病が悪化しやすいとか、飲水量が減って尿結石が発症しやすいとか、何だかんだで相変わらず忙しい。

そうこうする内に旅行から帰ってきた“汚物”も勤務を開始するが、相変わらず面倒そうな診察や治療は自分ではやらないくせにやたらと怒鳴り散らしてくる。

バカの一つ覚えみたいに「確認取れよ！！オレに！！」と「そんな自分で判断できるだろ！！」ばかりを繰り返すのだ。

ご想像の通り、この2つはマジシャンズセレクトを使う限り、診療がある度に常にどちらか一方を使えるので使用頻度が一番高い言葉なのだ。

診療方針を確認しなかったら「確認取れよ！！」、確認したら「自分で判断……」。

もちろん、経験のある症例ではわざわざ確認しないようにしたり、初めての症例では相談するようにしているのだが、怒鳴られるかどうかはそんな過去の経験などには全く起因しない。

“汚物”の機嫌が悪いかどうかだけが唯一の要因となるのだ。

明らかなミスがあるならともかく、機嫌が悪いというだけで怒鳴られた時はもうはらわたが煮えくり返ってしょうがない。

そもそも、従業員を差し置いて自分だけ海外旅行を楽しんできたのだから、機嫌もしばらくの間は良くて当然のはずなのに、一日と持たずに怒鳴り始めるとはどういうことか。

コイツの癩癪癖はもはや、短気とかの性格のレベルを通り越して病気のレベルにまで昇華されていると言えるだろう。

1週間近く海外で遊んできた挙句に、その間、病院を支えていた従業員を感謝の言葉も無しに何の躊躇いもなく怒鳴るなど、常識人のする事とは到底思えない。（確か、前にも同じような事を書いたと思います、大切な事なので2度書きました。）

先輩獣医や看護師たちは、よくもまあこんなヤツの下で何年も働き続けられたものだ。

性格的には一癖も二癖もある取っ付きにくい人たちばかりだったが、そこだけは尊敬に値する。

まあそんなこんなで、元々スズメの涙程度だった正月のおめでたい気分及早速止めを刺されつつも月日は過ぎ去り、いよいよ例の中堅看護師の辞める日が近づいてくる。

しかし、どうせ”汚物”のことだから「君たち、これから忙しくなっちゃうねえ」。頑張らないとね。」などと、他人事のようにヘラヘラしながら励ましてくるだけだろうと諦めていたが、何とバイトを雇う事にしたらしい。

しかも、2〜3人同時に雇う予定で募集をかけているとのこと。何と素晴らしい知らせなのだろうか！！

…突然だが、「パンドラの箱」という逸話をご存知だろうか？

よく知られているのは、【神から絶対に開けてはならないと言われて渡された箱をパンドラという女性が開けてしまった。その箱の中

には、この世のあらゆる厄災が封じられており、それらはあつという間に世界中に飛び去ってしまった。パンドラは慌てて箱を閉め、後には希望だけが残った。」というストーリーだろう。

結末の意味については諸説あるようだが、気になる説は「希望」は絶望的な状況の中で、無駄な努力を続けさせる原因となる「厄災」の一つであり、最後に箱の中に残っていたが、それが無いと人は生きていけないため、パンドラが箱から出した。」というものである。これを聞いた時は「希望が厄災かあ…、それなら確かにパンドラの箱に入っていたのも納得できるし、面白い考え方だなあ。」と感心する程度だった…。

しかし！！今なら言える…、この説が一番正しい！！

「従業員が増える予定」と聞いた時、僕は愚かにも「やったぞ！！それならまだ頑張れる！！」と希望を持った。

従業員が増えれば仕事の負担も減るし、何よりも”汚物”の憂さ晴らしの矛先が増えて僕が怒鳴られる回数が減る。

となれば、俄然元氣も湧いてくるというものではないか！！

しかし、よくよく考えると、この「希望」が無ければ…、つまり従業員が増えなければ「過労による体調不良」とか「精神の限界」に陥り、辞める事ができたかもしれないのだ。

この地獄から開放されるチャンスだったかもしれないのだ。

こんな好機を逃していながら希望を持って喜ぶとはとんだ大失態だったが、この頃はもうそんなことに気を回せる余裕が無いくらい消耗していたのだからしょうがない。

しかも、バイトの雇用で状況はさらに悪化することになる。

結論から書くと、これから何人もバイトが入ってくるのだが、そのほとんどは”汚物”の言動に耐えられずに1か月以内で辞めてしまうのだ。

せっかく仕事を教えても、すぐに辞めてしまうので無駄に時間が浪費されるだけで、むしろ手間が増えるぐらいだし、バイトの不手際

は何だかんだで僕のせいにされるので、結局怒鳴られる回数もそんなに減らない。

さらに、生き残ったバイトたちも、給料が時給なので余計な出費を抑えるために診察時間以外はすぐに病院を追い出されるため、正社員の代わりは到底務まらない。

何故なら、正社員の労働時間の割合は診察時間外の“無償労働”の方が遥かに大きいからだ。

やはり、正社員の抜けた穴は正社員が雇われない事には埋まらないのだ。

一方、“汚物”はバイトを雇った事で人手は十分と考えているので、以前と変わらない量と質の雑用や診療を要求してくる。

この自称“何でもお見通し”野郎は相変わらず周囲の状況がまったく見通せていないのだ。

要するに、手間や忙しさは増したのに、表面上の人手は減らないため、特に辞める理由が無い状況には全く変わりがないというわけだ。下手な希望さえ持たなければぬか喜びして余計に落胆する事もなかっただろうに、深く考えずにやる気を出した愚かな自分が呪わしい…。

やはり、「希望」は「厄災」の一つで間違いないようだ…。

ちなみに、もちろんバイトだけではなく、正社員でも募集をかけているようだが、動物看護師の正社員は給料や待遇が前述のとおり“アレ”なので、なかなか応募が来ないのだ。

そうこうする内に1月も終わり、どんどん労働環境が悪化する泥船のようなこの病院を、1か月に及ぶ嫌がらせと引き換えに中堅看護師は巣立っていった。

これで残った奴らは基本的に仕事をしない看護師たち。

《これからが本当の地獄だ。》

絶望

2月、季節は雪のチラつく冬枯れの頃。

この時期になると、朝の病院外の掃除は健康に悪影響を及ぼしそうなレベルに達するが、「ちゃんと厚着をすれば心配無い」との理由で”汚物”からは当然の如く何の配慮もない。

もちろん、以前ちょっと反抗した際のペナルティーも継続中だ。

この時期の早朝に、毎日独りで小一時間も野外の掃除をしていると、身も心も凍てついていく感覚にふと襲われる瞬間がある。

一昔前、《キラキラ雪の中、ふるえてドキドキしてた。全てがくずれても何も見えなくてもそれでもいいから、このまま埋もれて春になつたらいいなあ。》みたいな感じの歌詞の曲があつた気がするが、今まさにそんな気分だ。

もつとも、僕の場合は《ふるえてドキドキしてた》理由には怒鳴られる恐怖から来るものも含まれており、《全てがくずれても…》というのは「死んで楽になれるならそれでもいいや。」という心境からである。

こんな精神的にも肉体的にも寒々とした状況下では、風邪やインフルエンザに罹らない方がおかしい気もするが、生憎、僕は昔から体が丈夫で発熱する事も滅多に無く、休む事もままならない。

もつとも、我が病院では風邪やインフルエンザに罹っても、体温が39 未満なら出勤させられるらしく、そう易々とは休めないようなのだ。

（なるほどね）。病院で一番偉い御方がご精勤なさっていらつしやる時に、熱が出たくらいで自分だけ休んで楽をするわけにはいかなしもんね。それに獣医療関係者なんだから自分の命や健康が危険に晒されようと、病気でもつとしんどい思いをしている動物たちを早く治してあげなきゃいけないからね。しかも病欠だと給料引

かれちゃうから損だしね」。

…って、おい！！」「39 未満なら出勤」って、殺す気か！？その程度の発熱で働かせても死ぬことは無いから大丈夫とでも思っているのか！？てゆーか、お前はいつも2階で休んでて接触時間が少ないからいいかもしれないが、半日以上一緒にいる他の従業員にうつたらどうすんだ！！）

まあ、よっぽどの正直者でない限り、しんどい時は「39 以上」という事にして休むと思うが、“汚物”自身が発熱した時は恐らく37 でも休むはずなのに、ホントにコイツの他人に対する厳しさはマダンテなみだ。

もはやコイツは鬼である。

比喩表現などではなく、まさに鬼である。

鬼と呼ばれるのにこれほど相応しい人物はそうは居ないだろう。

なぜならここは地獄の病院、鬼が居るのがよく似合う。

ことわざにある「地獄で仏」とかいう幸運な状況など、現実では滅多にお目にかかれない。

「地獄で鬼」、これが現実。

そんな非情な現実を目の当たりにしつつも辞められる程の決定打を見出す事もできず、ただただ怒鳴られ続ける日々が続いていく。

「そんなに嫌なら辞めればいいじゃん。」という意見も確かにあるう。

しかし…

違う…！！分かってない…。あんた…、まるで分かってない…！！そりゃあ…、自分の意志を押し通してキツパリ辞める事は素晴らしい…。しかし…、状況をしっかり把握して辞めるタイミングを窺う事も同様に素晴らしい…！！うまく辞めれずとも…、人から見たら…、臆病…、軟弱に見える意志…、優柔不断…、だとしても…、

輝きだ……！！かけがえのない人生なんだ……！！だからどんなに慎重過ぎて……、ただジタバタしただけの決断だとしても……、それを……、咎める権利は……、誰にもないっ……！！

……まあ、つまり、大人の世界は「嫌だから辞める。」でまかり通れるほど単純なものでもない事を皆さんはご承知のはずだ。

その後の人生設計や生活資金、再就職先、世間体の問題、両親の想いや期待、残される同僚の気持ちや労働環境、辞める際の手続きや雇用主との交渉……。

それらを総合的に勘案し、関係者の全てがある程度納得するような理由を見つけ、かつ周囲への悪影響が最小限に抑えられるタイミングで辞職を申し出てこそ立派な大人と言えるのだ……！！

……もつとも、大義名分も無しに辞めると言えるほど勇気が無かったのも事実なのだが……。

それはともかく、働いている獣医師が実質1人では診療をこなし続けるのには限界がある。

しかも、雑用の負担が増えたはずなのに相変わらずのんびり働く看護師たち。

さらに、今までの仕事に加えてバイトの面倒までも見なくてはならなくなっただ。

今まででさえ怒鳴られるのを覚悟で緊急性の低い仕事を後回しにしていたのに、さらに別の仕事が増やされたらどんな状態になるかは書くまでもないだろう。

しかし、僕にはまだ希望が残されている……。

4月になれば新卒の獣医師が入ってくるはずなのだ……！！

バイトでも看護師でもなく獣医師が入ってくる……、これがどれほど嬉しい事かお分かりいただけるだろうか？

雑用の負担が減り、憂さ晴らしの矛先が増えるのは看護師が増えても同じだが、獣医師が増えれば診療の負担も減るのだ……！！

診察、検査、治療、手術、往診、急患当番…。

これらが軽減されれば、仕事量も怒鳴られる回数も圧倒的に減るはずだ…！

今よりもずっと働きやすい環境となるだろう…！

もちろん最初は何も任せられないだろうが、ゆくゆくは半分とまでは行かないまでも2割、3割は負担してもらえはるはずだ…！

でも、そんな事よりも何よりも一番嬉しいのは、同じ職業の仲間が増えるという事だ…！

獣医師ならではの色々な苦勞も分かち合えるだろうし、専門的な話もできる。

将来の夢を語り合ったりもできるだろうし、診療の喜びも悲しみも共感できることだろう…！

親の気持ちが本当に理解できるのは自分にも子供ができて親になった時らしいが、あの他者を見下していた感じの先輩獣医師が僕にだけは優しくかった理由が…！《「言葉」でなく「心」で理解できた…！》

（ようやくこの悪夢みたいな労働環境から抜け出せるんだ…！思えば1年間、短いようで長かった。これ以上劣悪な労働環境はまず無いだろうし、これ乗り越えればこの先どんな困難にも立ち向かえる気がしてきたぞ…！いや、待て。喜ぶのはまだ早い…。去年の先生がそうだったように、”汚物”にやられてうつ病になるかもしれないし、その前に嫌気がさして辞める危険だってある。そんな事になったらまたこの1年の繰り返しだ。もう、独りで耐えきる精神力など残ってないぞ…。やっと訪れる希望の光なんだ…！”汚物”からしっかり守りつつ、大切に育てよう…！）

…このやたらと希望に満ちた感じの力強い説明や、やけにハイテンションな心理描写から、カンの良い方はすでに気付かれた事だろう…。

そう…、新人獣医師は入ってこない。

辞める心配など最初からする必要は無かったのだ…。

3月下旬の某日、”汚物”が軽快に話し始める。

“汚物”「いやゝ、大変なことになっちゃったよ先生ゝ。実はさゝ、獣医さんずっと募集してたんだけど、今年度は就職希望が無くってさゝ。来年度も僕と先生だけで頑張らないといけなくなっちゃったみたいなんだよゝ。獣医さんが来ないなんて初めてなんだけどねゝ。まあ、今のままで病院は十分回せてるから問題ないよねゝ（笑）。」

フフ…、フフフフフフ…。

人は、どうしようもなくなった時には笑いが込み上げてくるものだ。そして今がそんな時だ。

“汚物”は極めて軽いノリでとんでもない内容をカミングアウトしてくれたものだが、この軽さは事態をあまり深刻に捉えていない気持ちの表れだろう。

“汚物”には僕がまだ平気なように見えていたのかもしれないが、僕はもう本当に限界なのだ。

最後の希望まで奪われて働き続けるほどの気力は、今の僕には残っていないのだ。

そういえば、臨床獣医師を目指す学生は、就職を考えている病院に見学や研修に行くことが多々あるが、今年、我が病院に来た学生は1人もいなかった。

したがって、何となくはそんな予感がしていたのだが、それを認めてしまったては精神が耐えきれないので考えないようにしていたのだが、しかし、はつきりと言われてしまったてはもうおしまいだ…。

絶望である。

努力をする機会すら与えられず、始まる前に終わってしまう。希望を抱く事すら許されない。

未来が見えない…。

人が自殺を考える時はまさにこんな気分なのだろう。

その後、看護師たちとの内緒の談笑で「急募で既卒の獣医さんを募集する事もできるけど、既卒獣医を雇うと給料の支出が痛いんだわ。忙しいのは悩み所だけど経済面では助かるし、既卒の募集はやる予定無いなあ。あつ、先生には内緒ね。壊れるかもしれないから（笑）。」とかいう内容が普通に聞こえてきた事も、すでに生ける屍となっていた僕には何の感情も引き起こさなかった…。

小休止

——物語の中では、ついに1年が経ちました。

「パンドラの箱」のところで「人は希望が無いと生きていけない」というくだりがありました。これは正解だと思います。

そして、この時点で僕は全ての希望を失い、絶望の中を当てもなく彷徨う事になりました。

ただ、安心していただきたいの、今、これを書いているという事は、僕はまだ生きているという事です。

最後にはちゃんと復活するんで心配ご無用。

ただし、ここから先しばらくは当時の気持ちが続ってきてリンクしてしまう分もあり、ひたすら無気力かつ暗い文調となります。（その方が雰囲気も出るだろうし。）

したがって、ある種の精神状態の人には非常に良くない影響を及ぼす文章となっているかもしれませんのでご注意ください。

それでは、絶対に引き込まれない自信のある方だけ、続きをどうぞ

…。

2 周目

4月…、新年度…。

専門学校卒の新しい看護師が3人…、正社員で入ってきた…。

見た感じは普通の女の子たちのようで…、特に精神的に強そうでもない…。

この子たちもどうせすぐ辞めることだろう…。

“汚物”は相変わらずの様子で…、最初こそ穏やかなものの…、1週間もすれば元通り怒鳴り散らし始める…。

入った直後はキラキラしていた新人看護師たちの目が…、どんどん腐った魚の目のようになっていく…。

社会人としてのはじめの一步が大失敗だった事を悟ったのだ…。

だが…、もはやどうしてやることもできない…。

『適当な辞め時を自分で見つけて辞めるがいいよ…。』

心の中でそつとつぶやく…。

診療は相変わらず多忙を極めるが…、僕の診察能力は1年前に比べると格段にアップしているし…、スピードも以前と比べものにならないほど速くなった…。

しかし…、実に悔しい事だが…、難しい症例の診療は経験がものを言うため…、どうしても”汚物”に頼らざるを得ない事態も出てくる…。

もちろん…、スピードも”汚物”の方が上だ…。

なので…、機嫌が良い時には「1年経つても、ちつとも使い物にならないなあ、副院長殿（笑）」とか冗談を言っている”汚物”も…、機嫌が悪い時は「1年も投資してやったのに、まだこの程度かよ！お前、今までで一番出来の悪い弟子だわ！！どうしていつまで経ってもこんな事もできないのだ！？」と罵声を浴びせてくる…。

今の僕はもはや…、悪意ある言葉を…、かわす事も…、受け流す事も…、防ぐ事も…、遮る事も…、撥ね返す事も…、打ち砕く事も…。

きない…。

ただ直撃を喰らうのみ…。

（僕は出来の悪い弟子…。いつまで経っても成長しないダメ人間…。僕は何のために生きているのだろうか…。）

そんな気分の落ち込みに加え…。忙しさに追い討ちをかけるかのように毎年春恒例の狂犬病予防と心臓寄生虫予防の診療がわんさか入ってくるので…。僕の精神にはじわじわと這い寄るように終焉の時間が近づいてくる…。

以前は時々やって来るくらいだった頭痛や吐き気やめまいも…。僕にすっかり懐いたみたいで側を離れなくなってきた…。

寝付きも悪くなり…。ようやく眠れても悪夢や小さな物音ですぐに目が覚めるので…。心も体も休まるものではない…。

睡眠不足が続く…。食欲も落ち…。体重もぐんぐん減っていく…。

自殺しようとは思わないが…。大通りを行き交う車を見るたび…。『事故とかで死んだら楽になれるのにな…。』という考えが頭をよぎる…。

今…。精神科を受診すれば…。うつ病の診断が下されるのだろうか…？

だが…。病院に行く時間も無いし…。受診するのも面倒くさいので…。そんなのどうでもいい事だ…。

精神も肉体も時間的にも限界を突破し…。ミスも当然増えてくる…。この時期はさすがの”汚物”でも忙しく働かなければならない上に…。怒鳴っても怒鳴ってもミスを続ける僕に対し…。そのイライラが最高潮に達しているようだ…。

もはや怒鳴られたところで改善する余裕も無いのだが…。以前よりやる気が無くなっているのもまた事実…。

“汚物”にしてみれば…。忙しい時期に急に反抗的になったように

見えるだろうし…、腹立たしがるのも無理はない…。

そして…、やがて怒りの波は幾重にも折り重なり…、巨大な大津波となって”汚物”の心を激しく揺さぶり…、決定的な言葉を放たせる…。

“汚物”「お前…、やる気無いんだつたら辞めろ！お前の替わりなんていくらでも居るんだぞ！獣医だからクビにならないとも思ってたのかよ！？何を自惚れてんだ！！このバカが！！」

「。。。だつたら辞めろ。」とか…、「お前の替わりはいくらでも居る。」とかも”汚物”がよく使う言葉だ…。

しかし…、さすがに獣医師の替わりはなかなか見つからないようで…、今までは看護師やバイトにしか言っていなかった…。

だが…、度重なるイライラが我を忘れさせたようで…、ついに僕に對しても使ってきた…。

これは願ってもない喜ばしい事態だ…。
だつて…。

（普通なら言葉の綾とか…、やる気を出させる時の常套句で本氣にする奴はいないとか…、冗談とかで済まされる言葉なのだろうが…、今の僕にそんな言い訳は通用しない…。言ったからには責任を取ってもらう…。言質は取れたんだ…。もう僕はいつでも何の気兼ねもなく辞められる…。替わりはいくらでも居るらしいからね…。フフフ…。）

そんな事を頭の中で考えてはいても…、『結局僕は辞められないんだろうな…。』と自嘲しつつ診療を続けていたある日…、ついに念願の辞めるに値する決定的な事件に遭遇する…！！

だがそれは…、臆げに想像していたような輝きに満ちた天の恵みなどでは決して無かった…。

そんな事で辞める決心をすることになるとは思わなかった…。
それに気付くくらいなら…、まだ今の地獄の生活をあと2年続けた
方がマシだった……。

本当の自分

それは…、いつものように朝っぱらから顔の歪んだ”汚物”がやってくるところから始まる…。

“汚物” “おい！！お前！！掃除機、ちゃんと片付けれてねえじゃねえか！！こんな風に出っ張ってたら邪魔だし、つまづいて怪我するかもしれないが！！このボケ！！だいたい、お前は…”

つまづく奴が居るとは思えないが…、確かに掃除機がいつもの収納場所からほんの少しはみ出している…。

朝の掃除機がけは僕がよく担当している仕事だ…。

だからコイツ…、僕がやったに違いないと決めつけて確認もせず怒鳴ってきやがった…。

しかし…。

（フフ…、フフフフ…。残念でした…、今日は珍しく新人看護師がやったんだよ…。）

『…今日は。。。さんが掃除をしたんです。』

気付いたらそう喋っていた…。

この時の僕はホントにどうかしていた…。

直後に「しまった！！」と思ったがもう遅かった…。

怒りの矛先は当然…、その新人看護師に向かって行くに違いない…。病院内で一番立場が弱く…、怒鳴られるのにも慣れていない新人看護師に…。

そもそも…、彼女が掃除機をかけたのは…、僕が他の事に時間を取られて掃除機をかけるのが遅れていたからなのだ…。

僕の代わりに慣れない事をやってくれたんだし…、怒鳴られるのに

慣れている僕が怒鳴られて然るべき場面だったのだ……でも……。

もう怒鳴られるのには耐えられなかったんだ……。
少しでも回避できるなら、そうせざるを得なかったんだ……。
事実を言っただけなんだ……。

でも……。

僕は仲間を売ったんだ……。

本来なら守るべき存在であるはずの後輩を……。
自身は慣れない新生活と”汚物”の豹変に戸惑っているにもかかわらず……、積極的に他人の仕事の手助けをしてくれる優しい子を……。
自分を助けてくれた恩人を……。

その後の事は詳しく覚えていないけれど……、”汚物”は僕を疑った事を謝るところか逆に監督責任だの何だのと言って結局怒鳴った後……、その新人看護師も“拷問部屋”に呼んでいた……。
彼女は部屋から出てきた時には泣いていた様子だったが……、後ろめたさで彼女を直視できなかった僕には詳しい状況は分からなかった……。

周りの看護師たちは慰めと励ましの言葉をかけていたが……、僕はかける言葉を見失い……、逃げるようにして診療を続けていた……。

1年前に危惧した通りだ……。

僕は自分さえ助かるのなら……、平気で他者を生贄として差し出せる人間となってしまうた……。

僕はこんなにも醜い……。

僕はもう腐りきってしまったんだ……。

いつからだろう…？

いつからこんな風になってしまったのか…？

今までの１年間に振り返ってよく考えてみると…、ある事に気付く…。

『最初っからだ……。』

思い返せば最初の頃からいつも文句や言い訳ばかり…。

良い環境ややるべき事は誰かが用意してくれるのが当たり前…。

そのくせ上手くいかない時の原因はすべて周囲のせい…。

大した努力もせず…、周囲や環境を呪うばかりで状況を改善しようともせず…、厳しい条件下で奮闘する悲劇のヒーローを気取っては自分に酔っていた…。

獣医になれるほど頭の良い自分…、動物を助ける優しい自分…、大学を出たばかりでいきなり診療ができる自分…、劣悪な労働環境でもへこたれない自分…、変人ばかりの職場で頑張る自分…、
“汚物”の批判など到底できない自分大好き人間だったじゃないか…。
診療においても…、なるべく失敗しないように…、なるべく怒鳴られないように…、“汚物”の機嫌を窺い…、オーナーの顔色を窺い…、できるだけ問題の起きにくい模範解答的な診療ばかりで患畜の容体は二の次…、いつも自分の保身ばかりで患畜の事など一つも考えていなかったじゃないか…。

僕の正体はこんなにも自分本位な人間だったのだ…。

履歴書に「周囲に気を配れる」とか「面倒見が良い」などと書いた事もあったが…、そんなのは心や時間にゆとりがあればこそ書ける戯言だったのだ…。

僕みたいに自分の事しか考えられないような奴には…、オーナーも動物も診療してほしくないだろう…。

僕は「動物を助ける」だの「命を救う」だのと言う資格のある人間ではなかったのだ…。

やはり…、僕は臨床獣医師失格なのだ…。

せつかく子供の頃からの夢を叶えたのに…、自分がそれに相応しくないと感じた時の絶望感を想像していただけるだろうか…？

生きていく意味を失うような…、これまでの人生が無駄になるような…、永遠に奈落の底へ落ち続けていくような…、そんな感覚だ…。僕の中の何かが音を立てて崩れていった…。

…しかし、この事で逆に僕はある呪いから解放たれることになる。「せつかく夢を叶えたのだから、臨床を頑張るべきだ」という呪いから。

僕はむしろ、「臨床をやっているはいけない」のだ。

命の現場はもつと高潔な人物が担うべきなのだ。

ちよつと勉強ができるだけの低俗な人間が居てはいけない場所なのだ。

となれば、僕のすべき事は一つだけ！！

（この病院を…、いや臨床を辞めよう！！）

麗らかな春の日差しが、僕の決断を温かく見守ってくれているような気がした…。

第二部・完。

終わりの始まり（笑）

——というわけで、何となく一区切りついた感じだったんで「第二部・完」と書きましたが、特に意味はありません（笑）。これ以前に、もっと第二部が終わりそうな区切りがいつぱいあったんですが、忘れていたのでここで区切っておきます（笑）。そして物語はいよいよ最終章。ありがちなタイトルをつけるとしたら、「終わりの始まり」か「新たな旅立ち」といったところでしょうか。ぶっちゃけ、後は僕が辞めるまでとその後の就職事情の話なので、「汚物」の悪行もさほど紹介できませんが、それでも良ければ最後までお付き合いください。では、早速……

4月末、13回目の給料日。

渡された給与明細を見ると、なんと基本給が5000円もアップしているではないか！！

勤務2年目に突入したので昇給したのだそうだ。

世間では給料据え置きという話もよく聞く中で、この病院としては破格の待遇だ。

“汚物”にとっても断腸の思いだっただろう。

それほど辞められては困ると思っっているのだろうが、もはや同情はしない。

僕はもう辞める。

また、給料袋を渡される際、「副院長としての自覚」とか「2年目の心得」とやらについて「汚物」がゴチャゴチャと囁いていたが、そんなのももう知ったことではない。

僕はもう辞める。

さらに帰り際、最近元気が無くなっていた新人看護師の1人が「家に帰ったら院長に電話して、今日で辞めさせてもらおうと思ってる。

「というほぼ予想通りのカミングアウトをして、これから病院がまた忙しくなりそうだが、今の僕にとってはそんなのもどうでもよい事だ。

僕はもう辞める。

以前の僕には辞める口実が必要だった…。

だが、もはや昔日の私ではない！

辞めるのに理由なんて要らない！！

我が決意は今や、ダイヤモンドよりも硬いのだ！！！！

…もっとも、ダイヤモンドは一瞬の衝撃には弱く、ハンマーで叩いただけで粉々に砕け散るが…。

まあ、そんな不吉な比喻はともかく、問題はどという辞め方をするかである。

辞める日時、看護師たちに言うかどうか、”汚物”に言うかどうか、言うとしたらそのタイミング、直接言うのを避ける場合はその伝達方法…。

一番単純なコースは、このまま誰にも何も言わずに明日からいきなり消える事だろう。

“汚物”への復讐という観点からも、この案を採用してパニックにさせたいくらいだが、この方法はあまりにも無責任過ぎるし、法律的にも訴えられる危険があるし、看護師たちへの被害も大きいだろう。

看護師たちにはそれなりに世話になっているので、せめて事前に辞める事くらいは伝えて、心の準備をしてもらいたいと思う。

一方、クソ真面目コースは、辞める予定の数か月前には”汚物”にも看護師たちにも伝える事だが、もはや僕には数か月も働く余力は残っていない。

また、このコースは前述の中堅看護師のように、辞めるまでの間、散々嫌がらせを受け続けながら死ぬほど扱き使われるので非常に陰しいコースとなっている。

いや、むしろそのまま殺されかねないので絶対に避けるべきであるとなると、以上を総合的に判断して……、辞める日は5月末にしよう。

予防接種も下火になる頃だし、新人看護師たちも色々と慣れてくる頃だろう。

また、月半ばに辞めるのではその間はタダ働きとなり、”汚物”に貢献する事になるのでそれだけは絶対にしたくない。

そして、6月末までは僕がもう持たないからだ。

難しいのは“汚物”に言うかどうかだが……、訴えられる危険もあるが、これは復讐も兼ねていることだし、”汚物”には黙っておくことに……、いや、当日に言うことにしよう！！

電話じゃなくて直接伝えれば、”汚物”の焦る様子も見られて一石二鳥だろう。

その際振るわれるであろう多少の暴力や暴言も、もう見られなくなることでだし記念体験という事で大目に見よう。

看護師たちにはゴールデンウィーク明けあたりで伝えようと思うが、これも悩ましい決断だ。

なんせここは地獄かつ戦国時代だから、寝返るのが得意な悪魔がウジャウジャ居る。

決行日前に情報が”汚物”に漏れる危険があるのだ。

まあ、そうなった時はそうなった時か。

その仕打ちに対する忍耐も含めて、今まで色々と手伝ってもらったお礼に代えさせてもらおう。

もともと、実は以前から従業員同士の談笑において、「もう辞める」という言葉は冗談ながらも度々交わされていたので、今さら「辞める」と言ったところで信じてもらえるか分らない。

世間一般でもよくある事だろうが、「辞める」「辞める」と言っている奴らに限って結局は辞めないものなのだ。

だが、彼らは悪くない……、彼らはヘタレではないのだ。

彼らはそれを言う事でストレスを解消しているか、人の気を引こうとしているかで、本気で辞める気など毛頭無い。

それを信じる方が空気の読めないイケてない奴なのだ、…そんなイケてない奴がここにも1人居るのだから。

我が病院で「もう辞める。」と言い始めるのは大体ベテラン看護師なのだが、それを聞いて、僕は本気で「お供します。」と言っていた。

しかし、結果はご覧の通り。

だから、今度は僕の番。

ただし、僕は期待を裏切ったりはしないけどね…、フッフッフ…。

まあ、それはともかく、これで辞め方は決まった!!

辞めるのは1か月後の5月末給料日!!

“汚物”には給料を貰った後に直接言う!!

看護師たちにはゴールデンウィーク明けに!!

細工は流々、あとは仕上げを御覧じろ!!

退職準備？

ゴールデンウィーク明け。

“汚物”は海外旅行から帰ってきたばかりだが、やっぱり早速不機嫌になっている。

それもそのはず、毎年恒例の事ながら、新人看護師がさらにもう一人来なくなったからだ。

相変わらず電話で辞意を伝えられたそうだが、これだけ毎年同じような事が続くのに、“汚物”は未だに自分が一番の要因だとは露知らず、壊れたテープレコーダーのように「最近の若い奴は根性が無い」と「誰かいじめたんじゃねえだろうな？」を繰り返す。

病気の診断能力はそこそこ高いのに、人間関係の問題にはどうしてこうも疎いのか。

ま、少々遅いかもしれないが、そろそろ正しい人間関係の作り方を学んでもらうためにも、僕が辞めて痛い目を見せてやらないといけないようだ。

僕が辞めるのは“汚物”のためでもあるのだ！！（笑）

それにしても、これは良い流れだ！！

辞めやすい雰囲気が出てきた！！

人の心というものは非常に伝染しやすい。

正の感情も、負の感情も。

一生懸命も伝染すれば、倦怠感も伝染する。

“汚物”も、日々の業務をもっと必死にやっていたれば従業員だつてもっと頑張る者は居るはずなのに、のらりくらりと楽な方へ楽な方へ流されて行き、他人にばかり苦勞をさせて自分はゆっくり休み、何か問題が起これば全て他人のせいにして改善しようとしめない。トップがこんなやる気の無い奴だと、従業員もやる気を出せるはずがない。

今回辞めた新人看護師も、そういう職場の雰囲気の悪さに加え、4月末で辞めた新人看護師の件で「他の人が辞めたんだから、私も…」と思ってしまったのだろう。

そして今、2人も続けて辞めたこの雰囲気の中でなら、「辞める」という行為が通常よりも許容されやすい。

僕が弱気になり、「辞める」と言い出してもおかしくない状況なのだ。

《僥倖っ…！なんという僥倖…！》

天までもが僕の辞めるという決断を応援してくれている…！

《神様っ…！ありがとうございます…！！ありがとうございます…！！！！》

ちなみに、後に残った最後の新人看護師は、以前僕が犠牲にしてしまった例の子だ。

彼女は自分も大変な状況の中、周囲にも気を配り、困っている人間を手助けできるという、この病院にはもったいないくらいの優しい子だ。

彼女には助けてもらった恩と売ってしまった借りがあることだし、あまり迷惑をかけたくないのだが、僕が辞めるとなったら彼女はどいう状況に置かれるのだろうか？

僕が居なくなれば、この病院の”汚物”以外の正社員は、ベテラン看護師1名、中堅看護師2名、新人看護師1名の計4名となる。

一見すると、個人の動物病院としては十分な従業員数に見えるし、獣医師が自分1人になれば、さすがの”汚物”も真面目に働かざるを得まい。

今までも実質獣医1人で診療をこなしてきたようなものだし、多少は忙しくなるだろうが、病院が立ち行かない状態ではないだろう。だが、問題は病院が回せるか否かなどではなく、”汚物”の機嫌である。

（自業自得だが）従業員に立て続けに辞められ、（”汚物”の頭の

中でのみの話だが）大切に育ててやっていた獣医師に裏切られ、（病院主としては当然の事だが）自身は忙しくなるのだ。

はたから見れば「身から出た錆」なのだが、そんな事を考慮できる”汚物”ではない。

機嫌が悪くなるに決まっている。

そこから中に当たり散らすに決まっている。

怒鳴りまくるに決まっている。

下手をすれば、そんな状態が新しい獣医師が来るまで続くかもしれないのだ。

しかも、診療における”汚物”との接触が各看護師とも圧倒的に増え、怒鳴られる機会も大幅に増加するだろう。

特に、新人は元々何かと標的になりやすいので、その精神的負担の増大ぶりは計り知れない。

そんな未曾有の大嵐の到来が約束されているところに、新人看護師をむぎむぎ置き去りにするのは心苦しい。

これで彼女がうつ病にでもなったら、僕も傷害に加担したも同然だ。一番手っ取り早い対策としてはこの病院を辞めてもらう事なのだが、なかなか辞めにくいだろうし……。

と、ここで一計を思いつく。

（むしろ、従業員全員で一斉に辞める事を提案してはどうか？）

新人看護師にとっては、得られる以上に多くのものを失うこんな病院には早く見切りをつけてもらって、早いうちに新しい病院に移った方が傷は浅くて済むはずだ。

他の看護師たちも、いつも文句を言って辞めたがっていた事だし、良い機会になるのではないだろうか？

一斉に辞めれば、後に残る人の事を色々と心配せずに済むし、みんな一緒なら罪悪感も薄れるだろう。

「赤信号 みんなで渡れば 怖くない」というやつだ。（良い子は

マネしちやダメだよ！！）

しかも、最近は動物病院が雨後の筍のように乱立しているので、こより条件の良い病院はいくらでも見つかるだろうから、その後の職場探しも容易なはずだ。

また、僕が辞めれば、その後の病院がどんな状態になるかはこの病院に勤めている者なら誰でも簡単に想像できるだろうから、辞める決断の後押しとなるだろう。

さらに、全員同時に辞める事で、密告の可能性も減ずることができる。

なにより、“汚物”への復讐としても、これ以上の案はちょっと思いつかない。

（これだ！これしかない！！これで決まりだ！！！！）

今から考えると、「辞めた方が良いに決まっている」という自分勝手な考えを人に押し付けようとするのは少々行き過ぎた感もあるし、「5月末で辞めてもらう」というのも話が急過ぎて難しい気もするが、この時は最高の妙案を思い付いた事で浮かれきっていたのだ。

ともかく、僕が5月末で辞める考えであることを伝え、全員で一緒に辞めようと提案を試みる。

もちろん、いつものようにストレス発散で言っているだけと思われないように、真剣な雰囲気だ。

すると、いつもの軽めな調子なのが気になったが、ベテラン看護師が即座に「辞めよう！！辞めよう！！私も辞めるわ！！」と応じてくれ、続いて中堅看護師たちも賛同してくれた。

新人看護師も一応了承してはくれたのだが、今一つ乗り気ではない感じがちよつと気に掛かった。

何か思うところもあるのだろうか？

確かに、彼女はまだ1か月しか働いていないので、仕事の事も“汚物”の事もよく分かってないだろうし、僕の事が信用できないのも

無理はない。

僕の方も、彼女に勝手な理想像を押し付けて「優しい娘」など思っているが、彼女の事をそんなに詳しく知っているわけではないし、やはり、入ったばかりの職場を辞めるといふのは抵抗を感じたりするのだろうとも思う。

まあ、諸手を上げて賛同してくれなかったのは残念だが、思ったよりもすんなり提案を受け入れてもらえて良かった。

『やれるだけの事はやった。これで心置きなく辞められる…。』と思いきや、ベテラン看護師がやっぱりやってくれる。

数日後、ベテラン看護師が「やっぱり生活のこともあるし、急には辞められない。先生も、もうちょっと勤める事はできないか？」みたいなことを言ってきた。

やはり、僕みたいに関心の準備をしていたならともかく、何の準備も無しに今月末でいきなり辞めてもらうというのは少々無理があったようだが、それならそれで、一度軽々しくOKを出して期待させないでよかった。

それにしても、後半部分は聞き捨てならない。

（無理だ。もう無理だ。他の従業員が辞めなくても、僕1人でも辞める。それはもう変わらない。）

ベテラン看護師が辞めないという件はともかく、僕が診療を続ける事は丁重にお断りした。

この件が気に入らなければ、”汚物”にチクってもらっても構わないという覚悟で。

何故なら、「急には辞められない」と言っているが、今の状態が続く限り、この人はいつになっても辞められないだろう。

それは過去の「辞める」騒動の結末からも分かる事で、そんな辞める気の無い人に付き合っただけに勤務を続ける事など真つ平御免だ

からだ。

それに、ベテラン看護師が賛同した時、やたら軽い感じでその場の流れに合わせた反射的な返答だったので、すぐに心変わりをするなど想定範囲内である。

そして、御意見番のベテラン看護師が「辞めない」と言っただけなら、中堅看護師たちも右へならえ。

新人看護師もやはり乗り気ではなかったらしく、申し訳なさそうに「まだ続けてみます。」と言っていた。

これも、最悪の展開として予想した通りだ。

《言ってもわからぬ馬鹿ばかり…。》

皆、何だかんだで文句を言いつつも今の職場が気に入っているようだ。

僕が居なくなっただけの状態をちゃんと考えられているかはちょっと心配だが、辞める事を無理強いするわけにもいかない。

僕のせいで看護師たちに迷惑がかかるのは心苦しいが、もう僕が彼女たちにしてあげられる事は何もないのだ。

僕は最後まで無力だった…。

露と落ち 露と消えにし 我が身かな…。

齒車

その後は、意外にもチクられる事も無く、いつも通りの適度に怒鳴られる日々が続く。

不思議なもので、あれだけ精神的苦痛を与えてきた“汚物”の怒鳴り声も、辞めると決めたらさして苦痛を感じず、さらっと聞き流せるようになった。

嫌がらせも嫌味も、もはや僕の心を蝕む事は無い。

「どうせ今月までの辛抱だ。」と思えば、大抵の事は許せるのだ。

逆に、この先、僕が起こす出来事を思えば申し訳ないくらいの気持ちにもなる。

自分に害を及ぼす人間に対して、こんな気持ちになれたのは初めてな気がする。

これが「悟りの境地」というやつだろうか…。

死が目前に迫った時はもつと寛大になれそうだ。

意味が違うが、「死ねば仏」というのもまんざら嘘ではないのかもしれない。

頭痛や吐き気やめまいも一時に比べると随分和らいでいる。

ゴールが見えてきた事で心にゆとりができ、体も警告の発信を緩めてきているのだ。

今なら履歴書に、「周囲に気を配れる」とか「面倒見が良い」と胸を張って書けそうだ。

たまに、『この状態だったらもう少し残ってみてもいいかな。』と思う事もあるけれど、『心という器はひとたびひびが入れば二度とは…、二度とは…』。』

居残る事を想像すると、たちまち頭痛や吐き気がぶり返してくる。

つまり、多少回復したようには見えていても、僕の心はすでにこの病院での勤務をこれ以上受け付けない状態となっているのだ。

今月末が限界ということが改めて認識できた。

ところで、限界といえば最近、視界に突然キラキラと黄色く光る三角形が多数現れ、数分間はまともに物が見れず、それが消えた後は耐えがたい頭痛に襲われるという症状に悩まされ始めた。

この頭痛というのが、今までに経験した事が無い激しさで、本当に頭が割れそうなほど痛い。

『僕の体はすでに《GENKAI TOPPA》していて危ない状態なのでは?』と不安になり、ネットで調べてみる。

すると、どうやら「閃輝暗点」という聞き慣れない症状らしい。

よく読んでみると、極度のストレスから解放された時に起こりやすい症状のようなのだ。

なるほど、まさに今の僕の状態だ。

そして、むしろ頭痛が起こらない方が危険度が高いらしい。

さらに、若ければそのまま治まっていく事が多いようで、頻度が少なくなっていけば心配は無いそうだ。

頭痛がやたらと激しいのが気になるが、今のところは安心という事か?

良かった良かった、せつかく“地獄”から這い出ることができのに、天国に直行しては堪らない。

もつとも、もし今死んだら、天国行きを取り止めてでも“汚物”を呪い殺すけどね…、フッフッフ…。

まあ、それはともかく、無事に最終日を迎えられそうなので一安心。
《あとは勇気だけだ!!》

勸酒

そして、いよいよ最終決戦の日が近づいてくる。

しかし、辞めるに当たり、考慮すべき事案がもう一つあったことに気付く。

僕が担当している継続患畜の事である。

本来ならば、次の担当者にこれまでの経過やこれからの治療方針、オーナーの志向や患畜の性質などをしっかり伝え、担当が変わってもスムーズに診療が行われるように取り計らわなければならないのだ。

ところが、普通に辞める場合は残る獣医師にゆっくり引き継ぎをすればいいのだが、僕の場合は退職を申し出たその日に辞めるので引き継ぎの時間などあったものではない。

一瞬、どうしたものかと困ったが、よく考えてみれば、幸いにも残る獣医師は”汚物” 1人である。

“汚物” は、僕が診療した患畜のカルテも診察時間終了後に一通り見ている（というか、失点が無いかを厳重に監視している）ので、ほとんどの患畜の大体の経緯は把握しているはずである。

また、そうでなくても、カルテという物を見ればおおよその経過が分かるようになっていたので、治療にはほとんど支障が無いはずだ。

とはいえ、オーナーの志向や患畜の性質はカルテでは伝わらないし、やはり直接診てきていないと感じ取れない部分もあり、そういった面ではどうしてもオーナーや患畜にも迷惑をかけてしまう事になる。またしても僕は、自分の保身のためにオーナーや患畜をないがしろにしてしまうのだ。

心にゆとりができてこそは変わらない。

僕はホントに臨床獣医師失格だ…。

まあ、そんな獣医師として致命的な性格はもう諦めるとして、せめてもの償いにこれまで以上に丁寧にカルテを書いておく。
そんな感じで、辞めるための準備を水面下で着々と進める中、診療が一段落している時に何も知らない” お見通し野郎” が機嫌良さそうに囀る。

“汚物” 「いや、先生、最近ホントに優秀になってきたよね。」
病院の事も色々任せられるようになったし、診察の腕も結構上がったよ。僕の指導が良いからかな？なんちゃって（笑）。先生にはこれからも副院長として頑張ってもらわないといけないし、診察が落ち着いた時期に特別休暇でもあげちゃおうかなあ。何だったら、研修後もうちの病院ですつと働いてくれても良いんだよ、ハハハハハ。」

（何だ、コイツ？気持ち悪いぞ！？まさか気付いて…はないよな。それだったらコイツが、こんな穏やかでいられるわけないもん…。ただ、機嫌が良いだけか？）

“汚物” には、たまにこういう時があるのだ。

何か悪い物でも食ったんじゃないかと心配になるような優しい時が。“汚物” も一応人間であるらしく、ごく稀に非常に機嫌が良い時があるのだが、そんな時にこんな似つかわしくもない褒め言葉を何の脈絡もなく言い出すのだ。

怒鳴り過ぎた後とかに、言い方が白々しく、棒読みの、形式的な言葉で褒められる事はよくある。

「これで「飴と鞭」の“飴”をあげたんだから、さっきの“鞭”の分はチャラですよ」的な感じのやる気の無い褒め方なら。

しかし、今回のような本心からそう思っている感じの、気持ちがいもった褒め方をするのはとても珍しいのだ。

普段、酷い扱いを受け続けていて、たまに優しくされると「まさか」って感じだがグツとくる。

比較対象である普段の状態が世間一般の水準に比べて悪過ぎる事をつい忘れて、「この人は本当は良い人なのかも。」と誤ってしまうのだ。

「不良が捨て猫に優しいと良い奴に見える」とか「暴力男にハマる女性の心理」とかに見られるギャップ効果というやつか。

まさかこのタイミングで優しくされるとは予想だにしておらず、動揺して「意外に良い人なのかもしれないけど、本当に裏切っているのか?」と決意が揺らいだりもする中、”汚物”が見事なフライングプレー。

やっぱり、最終的には辞めたい気持ちを後押ししてくれる。

それは最終日直前の事…、犬の早期妊娠診断での出来事だ。

犬や猫の早期妊娠診断では、超音波診断装置を腹部に当てて診断するのが一般的だが、大抵の動物の体は被毛に覆われており、超音波が届きにくい。

したがって、診断前にバリカンなどで綺麗に毛を刈る必要があるのだが、不恰好に禿げてしまうため、オーナーには不評な事も多い。

しかし、腹部は元々被毛が薄い部分なので、毛が細い犬種などは超音波用のジェルをたっぷり塗れば超音波が届く事もあるのだ。

そして、今来ている妊娠畜はまさに毛が細い犬種であり、オーナーも「できれば毛を刈らないでほしい。」と希望している。

そこで、ジェルをたっぷりつけて装置を当ててみたのだが、残念ながら上手く見えなかった。

思ったよりも腹部の被毛が濃かったようなのだ。

仕方がないので、オーナーの了承を得て毛を刈る事にし、準備のために診察室を出す。

すると、その様子を見ていたらしき”汚物”が無言で近寄ってきて、いきなり僕の胸を小突いて…、いや、殴ってくる!!

そして、殴られた勢いでよろめき、一瞬何が起こったのか理解できず、頭が真っ白になっている僕を尻目に、ベテラン看護師に毛刈り

バサミでの毛刈りを命じた後、僕を“拷問部屋”に呼ぶ。
もちろん、キレている。

“汚物”「お前、ふざけんなよ！！この後どうするつもりだったんだ！？コラ！！どうせ、バリカンで刈るつもりだったんだろ？そんな事したらバリカンが傷むじゃねえか！！ボケ！！なんでジェルをつける前に毛を刈らないんだよ！？オレはいつもそうしてるだろが！！このバカが！！もういい！！オレが代わるわ！！お前に任せるとロクな事がねえからな！！あーあ、ハサミで刈っても根元までは切れんぞ…。画像が見難くなるぞ…。これで診断ミスしたらどう責任取ってくれんだ？このタコ！！」

言いたい事はよく分かった…。

確かに、自分の力を過信して独断で“汚物”の方針とは違う診断手順を行い、失敗した点は非難されるに値するだろう…。

頼んでもいないが、やりにくい状態で診断を交代して迷惑をかけた事も謝る…。

だが、なぜ殴る。

殴られずとも、一度怒鳴られれば次からはやらない。

それぐらいの理解力と従属性はあるつもりだし、分かってもらえていると思っていた。

しかし、出てきた答えは問答無用の実力行使。

僕には弁明の機会すら与えられなかったのだ。

また、もう一点気になるのが、「キレた一番の原因は何か」である。病院の方針に従わなかった事、“汚物”に相談しなかった事、ジェルを多めに使った事、失敗した事、“汚物”やベテラン看護師に余計な手間を取らせた事、オーナーに無駄な時間を過ごさせた事、診断画像が見難くなった事…、思い当たる点はいくつもある。

しかし、ここでもう一度“汚物”のセリフに注目してほしい。

“汚物”が初っ端に言及しているのはバリカンについてである。

いの一番にバリカンが傷みそうな事の心配をしているのだ。
という事は…、そういう事なのだろう。

僕はそんな理由で殴られたのだ…。

「バリカンを壊しそうな行動」に対する罰が「殴る」というのは少々厳し過ぎる気もするが、ともかく、以上から導き出される結論は…、あまり信じたくないのだが、僕はバリカンよりも存在価値が低いと考えられている可能性があるという事だ。

もしもバリカンを壊していたら殺されていたかもしれない…、そんな気配すらあった。

所詮、研修医は奴隷なのだ…、ご主人様の持ち物を壊せば、命に換えて償わなければならない。

あなたは「1万円とお前の命なら1万円の方を選ぶ。」みたいな事を言われた事はあるだろうか？

そんな酷い事を言われた事がある人は居ないと信じたい。

こんな悲しい想いをするのは僕1人で十分だ…。

ま、久しぶりにテンションを下げられたが、そういえば僕はもう辞めるのだった。

人権を無視されようが暴力がエスカレートしてこようが、もうすぐ関わる事も無くなるので大して気にする事ではない。

逆に、殴ってもらったおかげで目が覚めて助かったし、もう情けをかけたくなるような出来事も起きないだろう。

これで辞めるための障害は全て取り払われた。

《とっておきのダメ押しというやつだッ！！》

“汚物”と僕との関係は 花咲く事は無かったけれど
それでも別れは寂しいけれど さよならだけが人生だ！！

悪夢が終わるとき

そして、ついに最後の給料日を迎える。

診察はそれなりに忙しくはあったが、時間が空いた時は院内を見まわし、『もう明日からここに通う事はないんだ…』と感慨にふける。

嫌な記憶ばかりが甦ってくる場所なのに、これでお別れとなるとやはり少し寂しい。

もつとも、もう”汚物”と会わなくて済む嬉しさの方が圧倒的に勝つてはいたのだが…。

診療も普段通りにしたつもりだが、見る人が見れば挙動不審で落着かない感じだったろう。

看護師たちの呪いの視線も何となく突き刺さってくる気がするが、そんなものは後ろめたさからくる僕の思い過ごしに違いない。

ベテラン看護師の「先生、今日は活き活きしてるね。」という言葉も、そこはかとなく恨み節に聞こえたりもするが、真意など気にせず、素直に「そんなこと無いですよ（笑）。」と和やかにリアクションしておく。

この癖のある看護師たちともいよいよお別れだ。

『仕事上の付き合いで嫌々だっただろうけど、今日まで支えてくれて本当にありがとう。』と心の中でこっそりとお礼を言っておく。

そんなこんなで色んなものに心の中で一方的に別れを済ませつつも時間は経ち、午後の診察も終わり、手術も終わり、いよいよ給料の支払いが始まる。

先輩看護師たちが1人ずつ部屋に入り、給料を受け取って出てくる。1人出入りする度に胸の鼓動がどんどん高鳴っていく。

まるでこれから告白しに行くかのような気分だ。

まあ、実際、別の意味での「告白」をするわけだが…。

ベテラン看護師の番が終わり、中堅看護師の番が終わり、いよいよ

僕の番になる。

体温も上昇し、呼吸も乱れ、頭も火照ってくる。

ちゃんと言いたい事が言えるかどうか心配だ。

部屋に入って”汚物”の前に行き、いつもの“有り難き御言葉（笑）”に耳を傾ける。

しかし、“汚物”が何かを喋っているのは分かるのだが、緊張が極限に達している僕の耳には自分の心臓の鼓動音と耳鳴りしか聞こえてこない。

僕の心はもう、今から言う予定の自分の言葉を覚えておくだけで精一杯なのだ。

そうこうするうちに話も終わり、給料袋を受け取る…。

そして！ ついに！ この時が来た！！

この地獄の1年間の、想いの全てをぶつける時だ！！

散々薄給で扱き使ってくれた事や奴隷扱いしてくれた事、そして何よりも過去にうつ病患者を出しているにもかかわらず、性懲りもなく怒鳴り続けてくれた恨みを全てぶちまけてやる！！

いざ尋常に勝負！！！！

……と意気込んで挑んだものの、まともな勝負にならなかった…。

というのも、いざ”汚物”と対面すると頭が真っ白になり、『辞めます』と『すいません』以外の言葉が出てこなかったからだ。

「今日で辞めます。」と言った後、もちろん”汚物”は色々とギャーギャー喚いて暴れていたのだが、その様子もほとんど覚えていないので、紹介のしようもないし、つつこむ事もできない。

確か、ありきたりな「責任」とか「恩」とか「我慢」とか「契約期間」とかの言葉を言っていたと思うが、僕は「辞める」という断固たる決意を示すのに精一杯で聞いている余裕が無かった。

他にも言っただけの事はいっぱいあったのに、後は結局最後まで「すいません。」しか言えず、言われない放題、やられたい放題の

サンドバック状態だった…。

「今まで散々盛り上げてきていて、最後の最後でそりゃーねーだろー。」とお思いの皆さん…、それは僕のセリフです。

これまでの恨みを晴らすべく、最後に一花咲かせてやろうと、言いたい事を言い尽しての嵐のような口論をするつもりで挑んだのに、結果は無残なワンサイドゲーム。

しかもまさかの記憶喪失…、自分で自分が嫌になる…。

そういえば僕は、告白どころか日常会話でも気になる人が相手だと緊張して頭が真っ白になり、喋りたい内容と記憶が飛ぶ事がよくあるのだった。

気になる人との日常会話ですらそうなのに、この1年間、みっちり怒鳴られてトラウマを植え付けられた根源を相手にして、緊張もせずに冷静に口論などできるはずがなかったのだ。

一番肝心のクライマックスでとんだ大失態だ…。

所詮、言い訳ばかりであらゆる困難から逃げ続けた奴の人生なんてこんなものなのだろう…。

そういえば”汚物”のパニックフェイスも楽しむためにわざわざ直接対決にしたのに、それを観察するのもすっかり忘れていた。

こんな事なら、電話の方が冷静に言いたい事を言えていたかもしれない。

僕はつくづく正解の選択肢を選べない人間だ…。

その後、”汚物”は僕の決意が揺るがないと知るや、怒り心頭で部屋を出て行き、看護師たちに「辞める予兆が無かったかどうか」とか「無責任だと思わないか」とか聞いていた。

しかし、「予兆があった」と答えたら「何で知らせないんだ!？」と怒鳴られるのは分かっているし、「無責任だと思わない」と答えたら、これまた”汚物”が怒り狂うのは目に見えているので、看護師たちの答えは決まっている。

そんな予定調和な質問をして何が楽しいのだろうか？

ともかく、最終的には「もう知らん！！早く出ていけ！！二度と顔も見たくねえ！！」と退職のお墨付きをいただいたので、荷物を素早くまとめて病院を後にした。

こうして、“汚物”との別れはあまりにもあっけなく終わった。

1年も一緒に（？）働いたのに、ちつとも名残惜しくないのが少し悲しかった…。

最後の帰り道、従業員駐車場で事前の打ち合わせ通りに看護師たちを待っていると、思っていたよりも早く看護師たちがやってくる。

“汚物”の怒りが意外に早く治まって解散できたようで、彼女たちにかかる迷惑が少しでも減って安心した。

もつとも、それは明日からが真骨頂なのかもしれないが…。

まあ、それはともかく、迷惑をかけたお詫びと1人ずつにお礼と感謝の言葉を伝え、看護師たちの車が帰っていくのを手を振って見送った。

そして…、誰も居なくなつた。

ついに全てが終わつたのだ…。

初めての勤務生活も…、地獄の苦しみも…、臨床の道も…、……僕の人生も。

全てが終わり、明日から新たに始まるのだ……、夢を見失い、目的も無く、空虚で、とても「生きている」とは言えない、ただ死んでいないだけの毎日が…。

新しい職場など決まっていらない。

すぐに働けるわけがない。

しばらくは心と体の休養が必要なのだ。

しばらく休んで、それから先の事を考えようと思う…。

残りの人生はどうせ消化試合…、時間はたっぷりあるんだから。

まだ肌寒い晩春の夜…

辺りは静寂に包まれて…

見上げた夜空の星々は、ただただ静かに瞬いていた……

——まだ終わりじゃないぞよ。もうちっただけ続くんじゃない（笑）
。——

病院のその後

後日談。

その後、病院はどうなったのか？

中堅看護師からの情報によると、獣医師を急募するものの、そう簡単に応募が来るわけもなく、“汚物” 1人での診療が続いたらしい（あれ？おかしいな…、僕の替わりはいくらでもいるんじゃないか？たのかな（笑）。）

最初は僕のクズ人間ぶりをネタにしたベテラン看護師の媚売りで保たれていた“汚物”の機嫌も、数年ぶりに訪れた大忙しの診療三昧のせいですぐに制御できなくなり、病院内には大嵐が吹き荒れたそう。

今までなら、僕に当たって大抵は勢力が弱まっていたのに、今度からは看護師たちに直撃するようになったので堪ったものではなかったらしく、結局、残った看護師たちも皆その後しばらくしてバタバタと辞めてしまったとの事だ。（だから傲慢な態度を続けていると独りになっちゃうって言ったのに…（笑）。）

…今の僕は、自分で問題を引き起こしておいて“汚物”が大変な状況になるのを楽しんでいる悪い奴に思われているかもしれないが、何と思われようと一向に構わない！！

僕も人間だ…、憎い相手の、しかも半分は自業自得の不幸ぐらいは楽しませてもらう！！

ヤツはそれだけの事を僕にしてきたのだ！！！！

もつとも、そんな個人的な復讐の巻き添えになった看護師たち、特に何の罪もない新人看護師にはちよつと罪悪感を覚えるが…。

まあ、今はみんな別の病院に勤めていたり、別の仕事についているそうで、一件落着だよな？

“汚物”のその後は、情報源の中堅看護師が辞めてしまったので詳

細は分からないが、ホームページがたまに更新されているので病院は問題なく存続しているようだ。

恐らく、バイトを増員するとか、他の病院に応援を頼むとかして急場をしのぎ、新しい正社員の看護師や獣医師が入ってくるまで耐えたのだろう。

今では、スタッフ紹介欄に新しい獣医師や看護師が名前を連ねているくらいだ。

頼れる人間が居なくても”汚物”の傍若無人ぶりに耐えられるとは驚きだが、よっぽど忍耐強い人材ばかりだったのか。

それとも、”汚物”が態度を改めでもしたのだろうか。

後者であれば、僕のした事も少しは意義があったという事になるので嬉しいが、たまに“従業員急募”のお知らせがトップページに掲載されるのが気になるところではある。

それはそうと、ホームページの院長紹介欄には”汚物”の写真が掲載されているのだが、その写真というのが、”汚物”が愛犬を抱いてニヤけているというもので、まあ気持ち悪い。

以前、僕が患畜を世話のために抱き上げていた時、”汚物”に「君は本当に動物と戯れる姿が似合んなあ」（笑）。と言われた事があったが、こんな奴に言われたのかと思うとゾッとする。

まあ、それはともかく、病院のその後はそんな感じで、潰れるまではいかなかったが多少は大変な目にあっただけなので、これですしは憂さも晴れたというものだ。

役に立たない獣医師免許

その後の僕はというと、とりあえずはニート生活を満喫。

最初の数日間は何もする気が起きず、数十分起きては数時間寝るというサイクルの繰り返しで一日12時間以上眠り続けたが、次第に横になると頭痛がするようになりだした。

寝過ぎると頭の血管が拡張して頭痛が起こるらしいのだ。

仕方がないから、とりあえず疲労も回復したし、体調も良くなってきたので睡眠時間を減らし、音楽を聴いたり、漫画を読んだり、ネットで遊んだり、この1年、忙しくてできなかった趣味をやり尽した。

ニート生活なら、好きな事を好きなタイミングで好きなだけやれるのだ！！

《Yeah！めっちゃホリデイ！！》

最初の頃はそんな感じで浮かれ気分だったが、さすがに休みが1か月以上も続くとだんだんキツくなってきた。

やる事が無くなってくる事もそうだが、何よりもお金の問題が厳しい。

僕の場合、親に頼らないニート生活を続けていたので、家賃や食費などの必要経費から娯楽代まで、生活費のすべてが自腹だったのだ。したがって、1か月に10万円前後消費するのだが、辞めた時の貯金は50万くらいだったので、単純に計算して5か月で資金が尽きることになる。

おまけに、6月といえば、昨年度分の収入に応じた住民税の支払いの通知が来るので、さらに追い討ちをかけられることになるのだ。支払いが4回に分かれているとはいえ、無収入の人間にとってはかなり痛い額だった。

じわじわと、だが着実に減っていく貯金額を見ては不安に陥り、

この楽しいニート生活もあまり長くは続けていられないな。』としみじみ感じたのを覚えている…。

ちなみに、世間的には、独身の26歳男性でそんなにお金のかかる趣味も無いのに貯金額50万というのは、どっちかというと悲惨な部類に入るのではないだろうか。

獣医師になるぐらいの偏差値があれば目指せそうな医師や歯科医師、薬剤師、公認会計士、1級建築士、弁護士などのそうそうたる国家資格職だけでなく、一般的なサラリーマンや公務員でさえ18歳や22歳から働き始めていれば、もっと貯金額が多いだろう。

人生の価値は収入や貯金額で決まるわけではないとは言われたりするものの、『獣医師は負け組だな。』と実感し、そんな職業を選ぶという自分の選択がまたしても間違っていた事にも気付かされるのであった…。

（ま、過ぎた事を嘆いていても仕方がないし、金策を練らないと…。そうだ！！雇用保険料を払っていたんだった！！手続きをすれば失業保険がもらえるはずだぞ。早速、ネットで調べてみよう。なににな？「失業保険を申請するのは簡単です。」とな？フムフム…。）

「まず、働く意思を示しましょう」…（えっ？仕事探さなきゃいけないのか…、うーん…。）

「元勤務先に離職票を用意してもらいましょう」…（あんな辞め方したら、絶対無理です。）

「自己都合退職の場合は支給が3か月遅れます」…（3か月！？そんなに待てねえー！！）

確かに、普通に辞めていたらハローワークに行くだけで簡単に手続きできよう…。

しかし、”汚物”と喧嘩別れした僕には当然、離職票は手に入らない。

しかも、申請できたとしても、この状態で3か月も待っていたら、かなり切羽詰まった状況になるのは目に見えている。

やはり、そろそろ職を探さないといけならしい。

そんなわけで、しぶしぶ就活することにしたのだが、せっかく取得した獣医師免許を活かさない手はないので、獣医師職の求人情報をネットで検索した。

すると、公務員や動物病院の求人情報が多量にヒットしたが、ほとんどの公務員試験はすでに試験の応募期間が終わっていたし、動物病院はもうありえない。

また、企業は獣医師に限って募集をかけたりはしないようで、ほとんどヒットしなかったので、動物実験や衛生管理の関係で獣医師免許が役立ちそうな製薬会社や食品会社の中途採用者や第二新卒の募集も探してみるが、そんな中途半端な時期に募集しているところはほとんど無かった。

（あれ！？就職できないじゃん！！獣医師免許使えねえー！！！！）

さすがにこのご時世、国家資格を持っているとはいえ、すぐに正社員の職が見つかるほど甘くは無かった…。

しかし、早く仕事を見つけないと貯金が底を尽きてしまうのだ。

そんな僕が選んだ道は……、派遣社員だった。

派遣社員獣医師

派遣で働くことにした僕は、とりあえず、有名な大手派遣会社に登録した。

無名の小さい会社に登録すると、酷い搾取を受ける事があるらしいから危険なのだ。

もつとも、有名大手でもそれなりに搾取は受けるのだが…、まあ、働けるだけマシか。

登録手続きでは、基本情報や希望の職種と勤務地、持っている資格などに加え、過去の勤務経験を聞かれた。

仕事振り分けの際の参考にするらしいのだ。

そこで、動物病院での勤務経験ありと伝えたが、それを証明する「在職証明書」なる物を元勤務先に作ってもらって提出してほしいと言われた。

しかし、”汚物”と喧嘩別れした僕には当然、在職証明書は手に入らない。

したがって、職歴には注意書きで「証明書無し」と書かれる羽目になった。

ちよっぴり悲しかった…。

それでも、獣医師免許はさすがに効果があるようで、すぐに動物実験の仕事が紹介された。

仕事内容は世間一般のイメージ通りのものであまりやりたくない仕事だったが、背に腹は代えられない。

とりあえず、先方と顔合わせを行い、話がトントン拍子で進み、仮採用が決定した。

そして初出勤の日、妙な恐怖感を覚える…。

職場に行くのが怖い。

知らない他人と仕事するのが怖い。

前職場のような悪夢の再来をつい考えてしまうのだ。

（あれ……？これは……、トラウマ？僕はひょっとして対人恐怖症になっっているのか？）

関係を絶った後の生活にも悪影響を及ぼすとは、“汚物”の行いはもはや傷害罪で訴えて良いレベルだとも思うが、僕も褒められた退職手段ではなかったので勘弁してやる事にする。

まあ、悪夢が再来したとしても、今度は派遣社員としての就職なのだ。

どうしても無理なら契約を更新せず、すぐ辞めればいいだけの話だ。湧きあがる不安を何とか押し殺しつつ、職場に歩を進める。

ところが、いざ職場についてみると、心配していたような事にはならなかった。

今度の職場は、みんな良い人ばかりだったのだ。

直属の上司は、仕事ができユーモアもあり、部下が多少の失敗をしても何とかフォローしてくれようとする理想的な上司だった。

先輩たちも丁寧に仕事を教えてくれるし、時々冗談を言っただけ合ったりしているが、仕事の時はきちり真面目にやる人ばかりだ。たまに真面目で厳しすぎる人もいたけれど、説教の時は気を遣って傷つかないように優しく言ってくれているのがよく分かった。

そんな人たちで構成されている職場なため、全体の雰囲気明るく和やかなのだ。

そんな恵まれた人間関係な上、仕事も１７時で終わる事がほとんどで、残業した場合は残業代がつき、給料も毎月２０万程度支給され、数か月勤め続ければ各種手当も付き始める。

前に比べれば天国のような職場環境だった。

僕が思い描いていた理想の職場だった。

あまりの快適さについつい契約更新し続け、あっという間に１年近く経ってしまった。

しかし、将来の事を考えるとどうしても不安にならざるを得ない。正社員でない以上、「契約終了」と告げられたら退職金も無しにいきなり職を失う事になる。

また、ボーナスも昇給も無いので、長く勤めても経済的な余裕もできてこない。

そして、派遣社員から正社員への昇格は滅多にないのだ。

どこか別の所で正社員になるチャンスがあるなら、出来るだけ早く転職するに越した事はない。

というわけで、ちょうど公務員採用試験の時期になっていたので、次は公務員を目指してみる事にした…。

なお、ここに書いた給与や待遇等の内容は、各派遣会社によって多少の違いはあるようだが、最終的には、やはり正社員の待遇には遠く及ばないという結論に達する。

正社員の場合は、毎月の月給は安くても、それ以外の福利厚生にお金をかけられているケースが多いのだ。

今、派遣社員か正社員かという選択に直面している方は、将来の事も含めてよく考えてほしい。

また、その後、世間ではリーマンショック不況による派遣切りが問題となった事を皆さんも覚えておられるだろう。

派遣を続けていたら、僕も被害者の1人だったかもしれない…。

公務員獣医師

そして、公務員編。

獣医師職としての公務員の種類は色々であったのだが、ほとんどの試験は応募締め切りが近づいていて悩んでいる余裕があまり無く、とりあえず学生時代の友達がよく受けていた「地方上級公務員試験」とやらを受けてみる事にした。

レベルはそこそこ高めの試験のようだ。

公務員の試験は、だいたい4月ごろから募集が始まって、6月・7月の1次試験、8月の2次試験を経て採用に至るケースが多いようだ。

僕の地元の県職員採用試験もその日程のようなので、急いで応募した。

勉強期間は2か月も無く、普通はかなり厳しい状況なのだが、僕には当てがある。

不況の昨今、公務員の競争倍率は一般的には高いはずだが、獣医師枠は人気が無いため、倍率も低い。

なぜ人気が無いかといえば、獣医師を目指す学生の大半は臨床獣医師になるつもりで入学し、在学中に考えを変える人は居るものの、卒業後も臨床に進む学生はやはり多いので、元々公務員を目指す人間が少ないのだ。

また、公務員獣医師は仕事のやりがいがあるが今一つ感じられない職務内容というイメージが強いのに加え、特殊な免許を持っているのにそれを反映した給与体系ではなく、一般の事務職と変わらない給与になる事が多いというのもマイナス要因だ。

さらに、特別に昇給や昇格の機会が多いわけでもないのに、単純に少し遅れて採用される事務職と変わらないため、生涯年収は普通の高卒や大卒で採用された公務員よりも下回るのだ。

スタートダッシュで出遅れて、どこまで行っても離されるのである。

初めから公務員を目指すつもりなら、獣医師になるメリットが全然無いのだ。

お金の話ばかりで申し訳ないが、夢や理想だけでは食べていけない。

よく考えたらお金は大事なのだ。

もつとも、消化試合人生の僕にとっては、そんなことは微々たる問題だ。

生きていくだけのお金がもらえれば十分である。

まあ、とりあえず、倍率は低いとはいえ、ある程度は得点がないと採用されないと思うので、専門分野ぐらいいは勉強しつつ、試験に備えた。

そして、いよいよ試験日を迎えたのだが、1次試験では驚愕の事態が発覚する。

試験を受けに来た獣医が僕1人だったのだ！！

受験番号が他にも用意されているあたり、応募した人間は他にも居るようだが、1次試験に来ない以上は、もう来る予定も無いのだろう。

いやはや、人気が無いとは聞いていたが、ここまでのものとは思わなかった。

どうやら、公務員を目指す場合の獣医師免許のメリットが一つだけあったようだ。

あとは、試験成績がよっぽど酷いものでない限り落ちるわけは無いのだが、その可能性が十分あり得るほどに試験の手応えが無かった。特に筆記試験の一般教養問題がさっぱり分からない。

しかも、時間が足りなくなり、最後まで解けなかったのだ。

さらに、専門問題も、答えに自信があった問題は半分ぐらいしかなかった…。

『やはり、勉強期間が1か月ちょっとで地方上級は無理があったか…。』と落胆していたが、受験人数が1人だったためか、普通に合

格した。

公務員獣医師はよっぽどの人材不足らしい。

その後は順調に事が運んで採用決定まで行き、入庁のための準備が始まった。

面談や書類で、基本情報や希望の職種と勤務地、持っている資格などに加え、過去の勤務経験を聞かれた。

勤務経験によって初任給がプラスされるらしいのだ。

動物病院と派遣会社での勤務経験を伝えたが、やっぱり、それを証明する「在職証明書」を提出してほしいと言われる。

しかし、「汚物」と喧嘩別れした僕には当然、病院の方の在職証明書は手に入らない。

したがって、病院で働いていた期間は「無職」と書かれる羽目になった。

とても悲しかった…。

やはり、辞める時はちゃんと手続きを踏むべきなのだ…。

僕はつくづく正解を…（以下略）。

ともかく、そんなこんなで入庁準備も終わり、3月で派遣も終了し、4月から公務員としての勤務が始まった。

転々と

最初に配属されたのは、「家畜保健衛生所」という牛、豚や鶏などの家畜の疾病予防や衛生管理指導が主業務の部署だった。

ちなみに、この「家保」は県内にいくつかあり、実家近くの所を希望していたのだが、そんな希望はガン無視され、実家からは遠く離れた土地に配属された。

貴重な人材とはいえ、既卒の分際でそう易々と希望が叶えてもらえると思っただけ大間違いという事か？

まあ、そんなに実家に戻りたいわけでもなかったもので、良しとする。職場の人たちは、少し取っ付き難い人が居るには居るが、悪い人たちではなかった。

雰囲気も特にギスギスした感じは無い。

最初の職場がとにかく最悪だった事を再確認した。

そして、思ったよりもみんな真面目に働いている（笑）。

業務時間も、いわゆる“9時5時”では終わらず、サービス残業もしばしばやっていて、想像していたよりも忙しかった。

もっとも、最初の職場に比べればずっとマシだったが…。

また、ここでの僕の担当業務は、各地の疾病発生状況を各機関と連絡したり、家畜から血液を採ってきてひたすら検査したりで、やはり獣医師としてはやりがいの無い内容だったが、消化試合の僕にとってはどうでもいい事だ。

やる気が無いから文句も無い。

ただのビジネスとして、与えられた職務を淡々とこなすだけだ。

《獣医はビジネスだ！！》

ちなみに、勤めているうちに嫌でも“お役所仕事”的な対応をしてしまう場面が何回もあったのだが、やっているうちにその原因が判明した。

税金で仕事をしているという性質のため、そこら中からの監視の目が厳しく、やる事なす事全てが決まった形式に則って上の許可を取らないと実行できず、少しでも変更があればいちいち許可を取り直さなければならず、わずかでも決まりから外れる行為は実行できず、担当が決まっている業務は許可を与えられた担当でないと処理できず、以前と同じ事をする場合でも時期が違えば最初から許可を取りなおさなければならず……、とにかく全てが雁字搦めなのだ。仕事が遅いのではない……、許可の申請ばかりで動きが取れないのだ。不親切なのではない……、勝手な事したら逸脱行為として罰せられるのだ。

本当に不親切で仕事をさぼっている公務員はごく一部なのだ（と信じたい）。

各地の市役所の皆さん……、今まで心の中で『もつと急げよ！』と罵っていてごめんなさい……。

内部処理がこんな面倒だっと思って思わなかったんです……、すいません。

そうこうするうちに給料日もやってくるが、財政難のために基本給が数%カットされている上、保険や年金も天引きされており、各種手当も通勤手当と住居手当ぐらいで思ったよりも厚くなかったため、意外に手取りは少なかった。

もつとも、トータルで考えると、最初の職場に比べればずっとマシだったが……。

……、なんか……、最初にどん底を経験したおかげで、多少の苦労はあまり苦痛に感じない体質になっている気がするのだが、これは”汚物”に感謝すべきところであろうか……？

まあ、それはともかく、思ったよりも厚遇も冷遇もされない普通の労働環境で、機械のように同じ仕事をし続け、いつの間にか数か月が経っていた。

そして、いよいよ念願のボーナス支給日を迎える。

卒業以来、ボーナスが貰える職に就いたのはこれが初めてなので、とてもドキドキした。

給料の数か月分もの大金が月給とは別に貰えるとは、何とありがたい事だろうか！！

まあ、ボーナスも財政難のために数%カットされているのだが、貰えるだけマシなのだ。

大金が振り込まれた通帳を見て思わずニンマリする。

（公務員も悪くないかも！！）

公務員獣医師が何故人気が無いかを深く考えもせず、そんな浮かれ気分で働き続けてあつという間に数年経ったある日、4月の異動でいきなり「畜産試験場」に飛ばされる事となった。

またしても実家から遠く離れているわけだが、それよりも、異動のたった1週間前に、100km近く離れた場所を「新しい仕事場です。」と紹介するのはやめてほしい！！

独り身で仕事をしながらでは、色んな手続きが間に合わないどころか、新しい住居を探すのも引越すのも1週間こつきりでは不可能だ！！

そもそも、3月下旬といえば、ほとんどの引越し業者が大忙しで頼めない時期だというのに、自力で荷物を運べとも言うのか？

まあ、文句を言っても「決まりだから。」という返事しか返ってこないのは分かっているのです、とりあえず、新職場近くのすぐ入れる部屋をネットで探して契約し、今住んでいるアパートは4月末までの契約とし、水道とかの手続き関係は有休を使って済ませ、4月の間は必要なものをだけを自家用車で新住居に運んで生活し、4月終わりに残りの荷物を引越し業者に移してもらうことにした。

無駄な家賃1か月分（涙）。

そして辿り着いた新しい職場は、見渡す限りの田畑と山々に囲まれ

たド田舎のド真ん中。

民家も遠くにぽつぽつ見える程度の寂れた場所にあった。

家畜を飼育しているため、臭気や騒音などで近隣から苦情が来るのを避けるために人っ気が無いところに建ててあるのだ。

その第一印象は、もう『これ、キツいな。』以外の言葉が思い付かないほどだった。

そんな俗世間とは隔絶された場所にある畜産試験場の主業務は、家畜の改良や飼養環境の向上のための試験研究だ。

僕の担当業務も、前職場とはガラリと変わって牛の改良試験や情報収集などで、一から覚え直したった。

しかも、さらに悲しい事に、仕事時間の内、何よりも時間を費やすのは家畜の世話である。

長引く不況のため、研究費も削られていて試験など滅多にできないので、日常業務としてはただひたすら試験用の家畜を飼い続けるのみなのだ。

もはや、「公務員獣医師の仕事」というものが分からなくなってくる毎日だ。

ちなみに、新しい住居は町の外れで、これまた辺りには何もない所だった。

かろうじてコンビニが近くにあるのがせめてもの救いだ…、近くと言っても徒歩20分だが。

そんな寂れた所から、さらに寂しい場所へ、毎日車で数十分かけて通ったのだ…。

獣医師の需要は少ないのだ

そんな閉ざされた世界で、ただただ家畜の世話を毎日ひたすら続けているうちに、一つの疑問が湧いてきた。

『たった一度しかない自分の人生、本当にこれで良いのか？』

人生諦めたとはいえ、今の生活はあまりにも悲しすぎる…。

このままでは、生きた証も何も残らないのではないか？

静かに自分を見つめなおす時間ができた事で、改めて、今の道をこのまま進んで本当に後悔しないか不安になったのだ。

確かに、あと数年経てば、また別の部署に異動して仕事内容や環境も変わるだろう。

例えば、県庁に配属されて、都会暮らしで快適な生活が送れるかもしれないし、保健所や食肉検査所に配属されて、そこでとてもやりがいのある仕事に出会えるかもしれない。

しかし、そこも数年したらまた異動になり、定年退職するまで住所も職務内容もコロコロコロコロ変わり続けるのだ。

異動希望も出せる事は出せるのだが、それが考慮されるかは前述の通り…。

公務員獣医師には、地域に根差した人間関係を育てる事はできないし、「この道一筋」みたいな誇れる仕事や技術も身につかない。

蓄積されるものが何も無い労働人生なのだ。

なるほど…、これでは人気が出ないわけだ。

…というのは間違いで、実は採用された後で知った事だが、公務員獣医師で人気が無いのは異動による転勤や仕事内容の激変が多い都道府県の職員のみ。

ほとんど異動が無いが、異動してもたかが知れている都市部の市職員は、公務員獣医師でも人気が高いらしいのだ。

獣医職の公務員は、都道府県の他に、市町村でも募集している場合

がある。

町村は規模が小さいために滅多に獣医卒の募集はしていないが、政令指定都市やそこそこ大きめの市なら結構募集しているのだ。

その仕事内容は市が所有している施設によって様々なようで、市役所での事務の他、食肉検査所や保健所、動物園や水族館などでの勤務もあるようだ。

異動があるか無いかも各市によって分かれるようだが、異動するとしても範囲は市内なので、住居は変えなくても済む場合が多いだろう。

しかも、都市部で便利な生活ができるとあれば、若者を中心に人気が出るのも無理はない。

さらに、人気の話でいえば、「都道府県の職員は人気が無い」とひとまとめにして書いたが、実はその中でも格差があるようだ。

北海道や鹿児島などの畜産が盛んな県は獣医師が重宝され、やりがいがある仕事も多いようでそこそこ人気があるようなのだ。

まあ、人気があるといっても定員割れはしばしばのようだが、人が来るだけまだマシという事だ。

また、東京や大阪、福岡などの大都市圏の都府県では、獣医師の需要は少ないので扱いが悪いが、便利な都会で暮らせる、あるいは大都会が近いという事でやはり人気が少し高めなようだ。

となれば、残りの「畜産が盛んでもないし大都市が近くもない良いところ無しの県」が特に不人気な県という事になる……、そう、僕の地元も含めて、だ。

そういった県に就職したが最期、退職するまで扱いが悪い上に不便な町村を転々とする労働人生を歩む事になるのだ…。

なお、人気の有り無しは採用試験時の受験資格年齢や募集人数でだいたい推測できるが、僕が見た中で一番すごかった所は、なんと5歳までの獣医師を募集していた…！

よっぽど獣医師が来ないのだろうが、まあ…、ただの田舎じゃあし

ようがないよね…。

そんな悲惨な人材不足も、獣医師の待遇をもうちよつと良くすれば少しはマシになるかもしれないが、“偉い人”たちには「獣医の仕事など事務職と同じで誰にでもできる」と思われているようで、いつまで経っても事務職と同じ給与体系のままで。

所詮、世間一般に認識されている獣医師の重要度などその程度である。

ちなみに、国家公務員の獣医師は、？種なら幹部候補で厚生労働省や農林水産省の省庁及び地方機関での勤務、？種なら各都道府県で検疫や事務が主な業務だそうで、ひたすら全国各地を飛び回るらしい。

それが良いか悪いかは人それぞれだ。

ともかく、そんな悲惨な境遇の不人気県の県職員を選んだ僕はまたしても最悪の選択をしてしまったわけだ。

自分の思慮浅さにはホトホト愛想が尽きた…。

だが、運命はまだ僕を見放してはいない。

不人気県がある限り、場所さえ選ばなければ、僕はいつでも公務員になれるのだ。

ということとは、もっと自分に合った仕事を探して、公務員以外の仕事をやってみるのもいいかもしれない。

いや、むしろ、コロコロ転職できるのはまだ独身で若い今だけだし、今しかできない他の仕事もやってみるべきだ！！

そんな衝動に駆られた僕は…、お察しの通り、退職した。

若者よ 獣医師になつてはいけない

そして今、僕は本書を記している。

最後の決断が間違つていたかどうかはまだ結果が出ていないが、衝動的に決めたあたり、恐らくまた最悪の選択肢を選んでしまったのだと思う（笑）。

履歴書的にはかなりの要注意人物になつてきているし、他の仕事といても次は獣医師免許を取った意味が無い仕事くらいしか思いつかないし…。

しかし、僕はいくら最悪の選択をしようとも、それほど後悔はしていない。

自分で選んだ道なら何があつても自己責任だと覚悟して選択しているからだ。

その結果、辛い事があつたとしても、次からは考慮すべき事案として参考になるし、それまで見えなかったものが見えてくるかもしれないし、良い人生経験にもなる。

例えば、病院でのトラウマ体験は不幸への耐性を培つてくれた。（怒鳴られる夢を今でもたまに見るのが気に障るけど…。）

また、不人気県の公務員になつていなかったら、人生を見つめなおす機会もなく生ける屍となつて働き続けていたかもしれない。

だからこの先、辞めなきゃ良かったと思うことはあるだろうが、それも含めてこれからの人生を楽しんでいきたいと思うのだ。

とはいえ、生涯の職業として獣医師を選んだことにより、僕の人生が波乱に満ちたものとなつたのはここまで書いたとおりだ。

「臨床」、「会社員」（派遣だけど）、「公務員」という獣医師の三大就職先を経験した僕に言わせれば、獣医師を選んだ時点で幸福な人生の道は閉ざされると言つても過言ではないのだ。

近くに獣医師を目指している若者が居たら、僕は間違いなくこう言

うだろう…。

『幸せになりたくはないのか？人生これからなんだから、そんなバカな真似をするんじゃない！！』と……。

あとがき　く獣医師を目指す学生さんへく

以上で、”汚物”院長が猛威を振るう地獄の動物病院に就職した獣医師の半生の（反省の？）レビューは終わりです。

後日談のあたりは蛇足になってしまってますいませんでした。

『獣医師になると、どの道へ行っても悲惨だよ。』っていう（極めて個人的で自業自得な（笑））意見がどうしても主張したくって。まあ、正直なところ、公務員の辺りはネットなどで得た知識が多くて信憑性に欠けるんですが、友達の話聞く限りはそんなに間違ってもいないはずです。

獣医師になるつもりなら、幸せな人生は諦めましょう（笑）。

本書を読んだ一部の方には「お前、仕事舐め過ぎ。」とお叱りを受けるかもしれません。

確かに僕は、愚痴っぽいし、根性が無いし、夢見がちだし、学生気分が抜けきっていない面があると思います。

本書のエピソードのうち、冷静になって考えれば”汚物”が正しい事を言っているのに対して文句を言っている場面もありますし、怒鳴っている内容を真面目に受け止め過ぎていたかもしれないし、もっと軽く流せていたら良かったのかもしれませんが。

また、仕事をしていれば辛い事や上手くいかない事があるのは僕も分かっています。

しかし、自分にとって快適な職場で働きたいと思う事は、そんなに悪い事ではないはずです。

僕の一度きりの人生ですし、なるべく周りに迷惑もかけないように気をつけますので、何も言わずに僕の気が済むまで安住の職場探しをさせてください。

そして、あなたの周りで僕と同じように人生に迷っている人を見かけても、あなたの意見を押し付けたりせずに温かい目で見守ってあ

げてください。

どうかよろしく願いします。

それはともかく、”汚物”には実体験の院長に色々足したはずですが、読み返してみると8割方本人そのままですな（笑）。

よくこんな奴の下で仕事できたもんです。

《自分で自分を誉めてあげたい。》（古ッ！）

しかし、臨床獣医師を目指す人にとっては悪い知らせなのですが、この“汚物”が特別酷い院長かといえば、そうではありません。

”汚物”ほどではないにしろ、動物病院の院長は癖のある人が多いようなのです。

診療が適当でいつ訴えられてもおかしくない「適当院長」、病院には常駐せず、連絡もつかない「放蕩院長」、オーナーも従業員も全ての人間を見下している「王様院長」、従業員不信で病院内に盗聴器や隠しカメラを仕掛けている「疑心院長」、説明不要の「セクハラ院長」……。

皆、各自の“治外法権領”にてやりたい放題やっています。

ただし、彼らは、人として欠陥のある人物たちなのは確かですが、様々なリスクを乗り越えて開業し、病院を運営しているという事実は称賛に値する事柄であり、リスクを冒してもいない人間がとやかく文句を言える筋合はないのです。

従業員や赤の他人が非難する資格はないのです。

とはいえ、決して優秀な上司とは言えませんし、「できればこんな変人たちの下では働きたくない。」、「もっと普通の院長の下で働きたい。」と思ってしまうのは人として当然の事でしょう。

しかし、僕のリサーチによると、その「普通の院長」率は50%程度……、しかも、見学時はほとんどの院長が優しく穏やかなので、「普通」と「変人」の見分けが付きません。

ほとんどのケースは、就職後に態度が豹変した時点で初めて“やってしまった”事に気付くのです。

あなたは、どんな院長の下なら文句も言わずに一緒に仕事できそうですか？

また、臨床獣医師コースは更なる問題を孕んでいます。

最近は大変になってきているようですが、勤務獣医師は給料が安いので、一般的な臨床獣医師は将来的に自分の病院を開業しないやっつけいけないケースも多いでしょう。

しかし、動物病院の設立には設備投資だけで数千万円、土地や建物も含めると億を軽く超える金額が必要になってくる場合もしばしばあるそうです。

普通に何年か研修や勤務をした程度ではそんな大金が貯まるわけもないので、まず間違いなく大借金を抱えての病院運営スタートとなります。

ところが、そこまでのリスクを負って開業しても、病院が上手いくとは限らないのです。

最近の動物病院過剰のため、オーナーの取り合い競争に勝たなければやっていけません。

夜間や休日にも容赦なくやってくる急患の対応もしなければなりません。

長期の休暇も取り難いので旅行もできません。

常に最新の知識を取り入れていないと医療ミスにつながるので、毎日の勉強も欠かせず、趣味を楽しむ時間も無いでしょう。

情報の氾濫によるオーナーの誤解および訴訟リスクに頭を悩ませる日々も続くでしょう。

これらの事項を適当に取り扱って、あっという間に悪い噂が広まって廃業に追い込まれるので、気の休まる暇もないでしょう。

そんな自分の人生を犠牲にするかのような生活を余儀なく強いられるのです。

あなたはこんな生活に一生耐えていく自信がありますか？

ともかく、ほとんどの獣医師の職場環境は世間で思われている程に恵まれてはいません。

「動物が好きだから」で気楽に務まる仕事ではないのです。

僕の周りでも、「動物が好きだから」、「動物を助きたいから」と言って臨床を目指した友達の半分ぐらいは悪徳院長や暗い将来に心を折られて他の道を選んだりしています。

しかし、散々獣医師の事を悪く言っておいてなんですが、これを読んでいる獣医師志望の学生さんに誤解してほしくないのは、僕は「獣医師を目指すな。」と言っているわけではないのです。

あなたの気持ちを確かめたかったのです。

僕が書いたような獣医師の暗黒面を目の当たりにして、それでもなお「獣医師になりたい」と思えるならば、あなたはきっと良い獣医師になれるでしょう。

あなたの夢を応援します。

僕の分まで頑張って下さい。

最後にこれだけは言いたかったのです。

それでは、言いたい事も言えたことだし、そろそろ筆を置こうと思います。

ここまで読んでいただいた皆さん…。

最後までお付き合いいただき、誠にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4060q/>

獣医禁書

2011年2月22日12時55分発行